ISSN 1883-9924

甲南英文学

No. 27 2012

甲南英文学会

編集委員
（五十音順、＊印は編集委員長）
青山義孝　有村兼彬　中谷健太郎　山﨑麻由美

目　次

谷本泰三先生を悼む・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　中島　俊郎　i

ロレンスの「怒り」と「希望」
—1915年の手紙と短編をめぐって・・・・・・・・・・・　横山　三鶴　1

主語を巡って・・・・・・・・・・・・福田　稔、北峯　裕士、古川　武史　23

削除現象の融合分析—態不一致現象を中心に・・・・　根之木　朋貴　78

谷本泰三先生を悼む

甲南英文学会会長　中島俊郎

梅田から岡本へ向かう車中で何気なく広げた夕刊紙に谷本先生のお名前があり、横に傍線が引かれていた。まさか、と思いつつも現実を受け容れざるをえなかった。電車は淀川を通過しようとしていたが、その堤を並んで歩いた日のことが思いだされ、先生の温顔が川面にうつりゆらいだ。今年の春もまだ早い 3 月 26 日に先生は逝かれた。

谷本先生は、1928 年、昭和に改元されてほどなく五人兄弟の四男として生まれ、苦学の末、二度までも渡米し、オレゴン大学大学院で修士号を修得され、帰国後、四国学院大学、同志社大学などを経て甲南大学文学部教授として英語英米文学科を牽引され、数多くの学生を育て、甲南大学を退かれた。その後、桃山学院大学に移られて後進の育成をつづけられた。甲南を去られてからもアメリカンフットボール部との紐帯を強くたもち、その精神的支柱であられた。

甲南英文学会では設立当初よりあらゆる面で寄与され、アメリカ文学研究の中心的存在として会員から尊敬をもって仰がれていた。研究発表の質疑応答のとき、先生の口から発せられた数々の質問は、今もって忘れがたい「味のある」ものであった。懇親会の折、グラス片手の先生と交わす会話もまた独自さゆえに忘れがたい興趣がただよっていた。何か皮肉めいた寸言をぽつりともらし、すぐにご自分で破顔一笑された。豪胆磊落にみえたが、本質的には含羞の人で

あった。

1954年、受洗され、ご自身が敬虔なクリスチャンであったためであろうか、文学作品もキリスト教が主軸となっている作品群をこよなく愛された。イギリス文学ではジョン・ミルトン、アメリカ文学ではナサニエル・ホーソン、ハーマン・メルヴィルをことのほか愛読された。神を探究する文学を営為としたこうした大巨人のまえで、先生は謙虚であり、頭をたれるようにして作品に接された。テクストを前に読む、というよりも祈りに近い態度でのぞまれていたような側面もおありであった。

1974年、関西学院大学に提出された博士号請求論文 "A Study of Herman Melville's Later Novels" は、のちに単行本となって出版され、メルヴィル研究の標準的研究書となった。この本をつまびくと、メルヴィルのなかで醸成されたシェークスピア的崇高美が先生の心を捉えてはなさなかったことが分ってくる。だが、その崇高美はミルトンのキリスト教的シンボリズムと融合されていたがゆえに先生を魅了してやまなかったのであろうか。

キリスト教への帰依が浪漫主義的情念を孤立させることなく、自己のなかで磁場となり、白熱をおびた電磁力ともみまがう思弁を文筆に——とくに達意の英文に——してみせて下さった。壮年期にご執筆された「バートルビー論」がこうした錬金術の一過程をみごとにとらえていよう。

かなうならば、先生が愛読してやまなかったアメリカのロマン派作家たちと英国ロマン派詩人たちとを共同で討議してみたかった。1840年、フランスの思想家トックヴィルは、いまだアメリカには独自の文学がない、ともらしたが、この指摘は10年もたたないうちに覆されることになる。ピューリタニズムの伝統のなかで、疎外と原

罪をテーマにすえた『緋文字』が寓意・象徴を駆使した織ものとして紡ぎだされてきたからである。そのホーソンは、理想郷に対しては否定的な立場を打ち出してきた。『アメリカ農夫の手紙』からはじまり、若き日の英国詩人サウジー、コールリッジなどが新大陸に夢見た理想共同体パンティソクラシーと、ホーソンのブルック・ファームとを比較検討し、さらにロバート・オーエンの理想郷との接続を議論のうえで試みたかった。作家たちの若き日の挫折を先生があまり語りたがらなかったのは、ご自身の夢の消失となにかしら重ねていたせいであろうか。また、メルヴィル、ホーソンの英国体験がどのように血肉化されたのか、ヴィクトリア朝の英国でもっとも信頼をあかれていた思想家はエマソンであったが、カーライル、ワーズワスとの思想的交流はどのようなものであったのか、はたまた、ロレンスのアメリカ作家論の妥当性、等などの旧大陸と新大陸の架橋について先生から知見をじっくりと拝聴したかった。

私事にわたれば、走馬灯がめぐるように在りし日のお姿が思い出されてくる。摂津本山駅界隈にある紅灯のもとで鯨飲したあと、終電もとっくに行ってしまい、わが家に泊まられたことがあった。翌朝、テーブルの下で並んで目覚め、しぼりだすような声で「水をくれ」と哀願されたのは昨日のことのようだ。少し猫背になった後姿をもうお見かけすることができないと思えば、底知れぬ寂寥につつまれてしまう。だが、私たちは、先生が残されたものを糧として生きていかなくてはならない——手渡された養分を力にかえて。谷本泰三先生のご冥福を心からお祈りしたい。

ロレンスの「怒り」と「希望」
—1915 年の手紙と短編をめぐって

横山　三鶴

SYNOPSIS

Letters can be an "autobiography", especially for a writer such as D. H. Lawrence. Having recovered from the initial shock of the war which had broken out in 1914, Lawrence began to talk about the war in his letters and the short stories. The year 1915 was the beginning of a crucial period for Lawrence himself and, needless to say, for England as a whole. Lawrence struggled to live through this crisis as a man, and exerted himself to find a way of dealing with the war in his writings. He wrote 294 letters to 48 people in 1915. Among them, he wrote very frequently to Lady Ottoline Morrell, Bertrand Russell, and Lady Cynthia Asquith. Letters to these three reveal that his relationships with them had a great influence not only on his life but also on the two short stories he wrote in 1915, 'England, My England' (1915 version) and 'The Thimble'.

Lawrence had an ambivalent attitude towards the war. He hated the war for its appalling destructiveness, while accepting it as a necessary destructive process for man to be regenerated. 'England, My England', which is the first story about the war, focuses on the process of dissolution and the desire for war that could be found deep in the hearts of almost every

Englishman. It also shows the profound anger that Lawrence felt about man and the world. 'The Thimble', another war story, was written for Lady Asquith, whose husband had been wounded, and deals with their despair and hope for their new life as a couple. These two stories, filled with his anger and hope, were the starting point for Lawrence to explore man's potential to live through the crucial period which had just begun.

はじめに

1915年、1月31日、ロレンス(D. H. Lawrence) はシンシア・アスキス(Cynthia Asquith) に宛ててほぼ1年ぶりに手紙を書いた。その手紙の中でロレンスはその空白の時間について "my autobiography" として語っている。[1] ロレンスにとって手紙は常に自己を語るものであり、時を経て書簡集として並べられた手紙は、自己の経験をフィクション化する過程における生々しい自己の記録としての意味を持つ。多くの作家は、作家として成長する過程で、自己の個人としての経験や内的葛藤を作品として昇華する。たとえば、ロレンスも自分の過去と母親との関係を *Sons and Lovers* という小説で見つめなおし、自己の歴史を語ると同時にそれを「イギリスの若者の悲劇」と捉えていた。[2] そして、若い頃からの手紙を時系列で読んでいくと、ロレンスが作家として成長するにつれ、当然、出版関係者、作家、批評家などと交友関係が広がっていくのが分かる。つまり、「誰に手紙を書くか」は常にその時々ロレンスが重要視する対象の変遷と思考の変化を反映している。

自己の経験を通して世の中を見渡してきたロレンスの視点を大きく変えたのは、戦争である。1914 年に勃発した第一次世界大戦は、

一個人の経験の枠を超えた大きな歴史のうねりとなって、否応なく多くの人々に衝撃を与えた。アメリカの詩人、ハリエット・モンロー(Harriet Monroe)に宛てた11月17日付の手紙でロレンスは、「戦争は恐ろしいものです。戦争をとことん追跡していって個人の戦士たちの故郷、その心にまで触れることが芸術家の仕事なのです」(*L*II, 233) と記している。当時はまだこの戦争は長く続くことはないだろうと楽観視されていたものの、15 年に入ってますます激化する中、彼は作家として何ができるのかを問い続けたに違いない。もはや、個人宛ての手紙のレベルを超えたリアリティがそこには溢れているのである。30歳を迎えるこの年、ロレンスは誰に何を伝えようとしたのか。

1915 年、戦争という歴史の変動に加えて彼個人にとって衝撃だったのは、*The Rainbow* の発禁であった。生活面でも苦境に陥る中、若い作家としてのロレンスの才能を認め、支えてくれた二人のレディがいた。シンシア・アスキスとオットリン・モレル(Ottoline Morrell)である。さらにオットリン・モレルを通して知り合った当時のモレルの恋人バートランド・ラッセル(Bertrand Russell)、この 3 人に宛てた手紙だけで 15 年の手紙のほぼ 3 分の 1 、95 通に及ぶ。[3]それほど、この 3 人、特にオットリン・モレルとラッセルとの関係は短いが親密であった。そこで本稿では、この 3 人に宛てた手紙を通して、1915 年、戦争がロレンスという作家にどのような影響を与えていたのかを辿り、この年に書かれた短編 'England, My England' と 'The Thimble' にどのように反映されているかを考察する。この二つの作品はその後の作品の展開を変えるものであり、この危機的な時代に作家として何をすべきか、何ができるかを模索し苦悩するロレンスの姿を映し出している。

1. 1915 年のロレンス

Tomorrow Lady Ottoline is coming again and bringing Bertrand Russell – the Philosophic-Mathematics man – a Fellow of Cambridge University R.R.S. – Earl Russell's brother. We are going to struggle with my Island idea – Rananim –But they say, the island shall be England, that we shall start our new community in the midst of this old one, as a seed falls among the roots of the parent. Only wait, and we will remove mountains and set them in the midst of the sea. (*L*II, 276-7)

ロレンスはコテリアンスキー(S. S. Koteliansky) に宛てて、理想郷ラナニムへの想いを語る。開戦の衝撃からしばらく立ち直れないでいたロレンスは、戦争と汚辱の世界から脱出して人類の復活を身をもって証明しようとするかのようなこの計画に、ようやく息を吹き返し、力が湧き上がってくるのを感じていた。オットリン・モレルやバートランド・ラッセルのグループとの交流によって、さらにラナニム実現への期待を膨らませる。

実際、1915 年、ロレンスに絶大な影響力を与えたのはオットリン・モレルで、彼女にあてた手紙は 52 通と、この年もっとも多い。彼女はポーランド公爵の娘で、自由党の急進的な国会議員フィリップ・モレル(Philip Morrell) と結婚後、夫とともに社会改革に情熱を燃やす。ロレンスとは 1914 年末、ギルバート・カナン(Gilbert Cannan) の紹介で知り合い、同じノッティンガムの生まれということもあり、意気投合した。才能ある人物を見いだす能力のあった彼女は芸術家や知識階級の人たちを自宅に集め、パトロンとなっていた。ロンドンの邸宅や、オクスフォードシャのガーシントン・マナーと呼ばれる社交場には多くの知識人が集まり、また夫妻は平和主義者であったため、そこは良心的兵役拒否者の避難所ともなっていて、ロレンスもこの年、頻繁に

彼女を訪問していた。ラナニムの構想を抱いていたロレンスは、ここでその同志を集めたいと期待していた。そして、ラッセルもその一人だったのだ。2月1日、オットリン・モレルに宛てた手紙で、ロレンスは次のように語っている。

After the war, the soul of the people will be so maimed and so injured that it is horrible to think of. And this shall be the new hope: that there shall be a life wherein the struggle shall not be for money or for power, but for individual freedom and common effort towards good. That is surely the richest thing to have now – the feeling that one is working, that one is part of a great, good effort or of a great effort towards goodness. (*L*II, 272)

ちょうどロレンスが彼女と知り合ったとき、彼女はバートランド・ラッセルと恋愛関係にあり、オットリン・モレルと同じく平和主義論者のラッセルとも志を共有できるかと思われた。当初、ラッセルは、ロレンスの洞察力や直観力、若い情熱に魅力を感じたようだった。[4]親交は一気に加速し、7月には共同講演会をという話にまでなるが、そこで意見が対立する。ラッセルが「社会再建の哲学」という講演の草稿をロレンスに送ると、ロレンスはその原稿に殴り書きをし、ラッセルが書いているのは「社会批判ばかりで社会再建ではない」と述べ彼の民主主義の理想を痛烈に非難し、築き上げてきた思想を覆そうとしたのだ。[5]ロレンスは民主主義を信用していなかった。むしろ絶対的な指導者が必要と考えていて、それに対してラッセルは、ロレンスはファシズムを求めているのだと非難した。ロレンスのラッセルへの手紙は、敵意を帯びてくる。7月14日付の手紙では、

I am sure, now, that if we go on with the war, we shall be beaten by Germany. I am sure that, unless the new spirit comes, we shall be irrecoverably beaten. Remember when you write your lectures, that you are

a beaten nation. We are a beaten nation. It is no longer a case for satire or gibe or criticism. It is for a new truth, a further belief. (*L*II, 365)

と述べている。最初こそロレンスの熱狂的なヴィジョンに魅了されたものの、ロレンスの思想はラッセルには未熟で危険なものに思えてきた。一方、ロレンスにとってラッセルら温室育ちの知識人たちの議論は、知的ではあるが無責任なおしゃべりにしか思えなかった。その後もロレンスは、「批判はもう時代遅れ」だとし、ラッセルの根底には最大級の戦争願望があり「平和のプロパガンダ」という羊の仮面をかぶっているとまで揶揄し、9月には事実上の決別となる。

Your basic desire is the maximum of desire of war, you are really the super-war-spirit. What you want is to jab and strike, like the soldier with the bayonet, only you are sublimated into words. And you are like a soldier who might jab man after man with his bayonet, saying 'this is for ultimate peace'. … You are satisfying in an indirect, false way your lust to jab and strike. …

You are simply *full* of repressed desires, which have become savage and anti-social. And they come out in this sheep's clothing of peace propaganda. … (*L*II, 392)

このときロレンスは、なぜこれほどの怒りをラッセルにぶつける必要があったのか。ラナニムの仲間にと期待していたラッセル周辺の知識人たちに絶望し、その怒りの矛先をラッセルに向けていたのではないか。ラッセルもオットリン・モレルも、ロレンスの中ではいつの間にか象徴化され、ラッセルが個人であることを忘れたかのように彼を攻撃する。ラッセルはこの手紙を受け取り、自分の無力さに自殺を考えたほど傷ついたという。その後のロレンスの手紙を、ラッセルは受け付けようとはしなかった。この年の二人との交友は双方に多大な影響と傷跡を残して、翌年には完全に終わる。

一方、シンシア・アスキスとの交流は、他のどの人物とも違うものだった。シンシア・アスキスは開戦当時の英首相、ハーバート・H・アスキス(Herbert Henry Asquith) の次男、ハーバート・アスキス(Herbert Asquith) 夫人である。実家はスコットランドの名家だが、結婚に反対されたため持参金もなく結婚した。夫のアスキス氏は法廷弁護士、自由主義者で文学好き、若い詩人を庇護していた。ロレンスは1913 年、編集者のエドワード・マーシュ(Edward Marsh) の紹介で夫妻と知り合うが、戦時、アスキス氏が応召されたこともあり、ロレンスの方が気を遣ってしばらく手紙を出さないでいたようだ。長男の自閉症、夫の戦傷、弟の戦死など辛いことの多かった彼女に、ロレンスはそのつど手紙を送り、彼独自の思想を熱烈に語り、かつ彼女を励まし続けていた。

オットリン・モレルやラッセルとの関係が行き詰ったことについては、彼女に次のように打ち明けている。

I am so sick of people: they preserve an evil, bad, separating spirit under the warm cloak of good words. That is intolerable in them. The conservative talks about the old and glorious national ideal, the liberal talks about this great struggle for right in which nation is engaged, the peaceful women talk about disarmament and international peace, Bertie Russell talks about democratic control and the educating of the artisan, and all this, all this goodness, is just a warm and cosy cloak for a bad spirit. … (*L*II, 378)

この手紙で、ロレンスは彼らのことを「裏切り者」だとも語っている。実際はロレンスの期待が裏切られたのだが、結局、イギリスの知識人たちの説く平和は、ロレンスには偽善としか映らなかったのだろう。戦争に参加しないという点ではお互いの立場に相違はないと思われるが、戦争とは関わりのない立場から民主主義や平和の理想ばかりを

語る彼らは偽善者であり、ロレンスはそんな彼らに対して苛立ちを覚えた。ただ、シンシア・アスキスは、ロレンスにとって永遠の恋人的存在であったに違いない。1915 年末には、自身のアメリカ行きのこと、兵役免除について相談もしている。彼女への手紙は敬意と善意に満ちた手紙が多い。そして 'The Thimble' は彼女のための物語である。ラッセルに見た人間に潜む「戦争願望」と、一方でシンシア・アスキスに見せた思いやり、彼女が生き抜くための希望を、ロレンスはどのようなかたちでこの年の二つの物語に託したのだろうか。

2. 'England, My England' (1915 年版)

I thought the war would surgeon us. Still it may. But this England at home is as yet entirely unaffected, entirely unaware of the mortification in its own body. It takes a dodge to protect its own fester from being touched: preserve your ill from touch or knowledge: that is the motto. (*L*II, 318)

4 月 15 日、ロレンスはオットリン・モレル宛てにこのような手紙を送った。開戦後の衝撃が過ぎ去ると、ロレンスには戦争を肯定するような意識が芽生えていた。それは、文明によって疲弊した社会、特にイギリスには戦争という外科手術が必要だという見方である。'England, my England' は大戦について書かれた最初の作品である。6 月頃に書き終えられ、10 月 *English Review* に発表された。その後書き直され、22 年に短編集として出版されたが、ここでは 15 年版に注目したい。[6]タイトルの 'England, My England' は W. E. Henley の、戦争において国家のために個人を犠牲にする忠誠と義務を謳った愛国詩の冒頭からとったものである。[7]のどかな田舎で暮らす主人公が、戦争が始まると自ら戦争に志願し、負傷してもなお敵兵を殺し祖国の

ために戦って死ぬというストーリーの展開は、このタイトルのように一見愛国の物語に見える。ところが、そこに描かれているのは国家のために戦うイギリス人の忠誠心でも愛国心でもなく、戦い抜いた末に家族を残して死んでいく若き兵士の悲劇の物語でもない。

主人公イヴリン(Evelyn) は、年に 150 ポンドの収入があるため働こうともせず、庭仕事ばかりしている。妻の父親が援助をしてくれるため、子どもができても働く意志を持たない。妻のウィニフレッド (Winifred) は彼に心を閉ざしているが、さらに長女の怪我がそれを決定的にする。最初の処置が遅れたため敗血症を起こしロンドンの病院に運ばれるが、自分を責め苦しむ妻に対し、イヴリンはまるで麻痺したように茫然と立ちすくむだけであった。後遺症が残ってしまうが、イヴリンは、罪悪感はおろか何の感情も示さない。イヴリンの極端なまでの倦怠、無気力と、それに対するウィニフレッドの嫌悪感だけが物語の前半を支配している。[8]そんなときに戦争が始まった。

イヴリンの心を動かしたのは、愛国心でも使命感でもない。もともと自分の行動に責任や意義を問いかけるような男ではなかったし、戦争の大義にも無関心であった。ただその緊張感だけが身体にしみ込んでくるのを感じて、彼は志願する。

A flicker had come into his voice, a thin corrosive flame, almost like a thin triumph. As he worked in the garden he felt the seethe of the war was with him. His consciousness had now a field of activity. The reaction in his soul could cease from being neutral; it had a positive form to take. There, in the absolute peace of his sloping garden, hidden deep in trees between the rolling of the heath, he was aware of the positive activity of destruction, the seethe of friction, the waves of destruction seething to meet, the armies moving forward to fight. And this carried his soul along with it. (*EME*, 224)

物語の後半、空気は一変し、一度も積極的な面を見せたことのなかった男が戦争によって極端に行動的な男へと変貌するのだが、彼を動かしたのはただ破壊への衝動だけである。家庭では何事にも無気力、無関心であった男が、戦地に送り込まれたとたん有能な戦士となる。倦怠から目覚めたかのように戦う機械となったのだ。

He was really a soldier. His soul had accepted the significance. He was a potential destructive force, ready to be destroyed. As a potential destructive force he now had his being. What had he to do with love and the creative side of life? He had a right to his own satisfaction. He was a destructive spirit entering into destruction. (*EME,* 225-6)

戦場では、精神というものを排除し破壊へと突き進む、孤立化し抽象化された存在だけが強調されている。

この時期ロレンスが、戦争を否定しながらも健康を取り戻すための手段として戦争を肯定的に見ていた、というのも事実である。前半に描かれていたのは、徹底してイヴリンの無気力、無関心と、無能な夫に対する妻の嫌悪であった。それが、戦争を機に活力ある男へと変貌を遂げた夫を、妻は別人のように感じ威厳すら覚える。軍服を着たたくましい夫なら愛することができるのである。空虚感の漂う日常に、戦争は一種の刺激でもあった。男にとってもその妻にとっても再生のためのプロセスとして破壊が必要であるという考えは、この時期にロレンスが抱えていた社会への怒り、苛立ちでもあっただろう。20 世紀、戦前の市民の生活というものがイヴリンに代表される無気力、倦怠であって、いかにそれを鼓舞するかという問題はロレンスの頭から離れたことがなかったのだ、と Michael Black は指摘する。そして、皮肉なことに戦争が突破口となり、戦場における破壊活動が無気力、倦怠を打破することになったのだ。[9]

したがって、この作品の後半で描かれているのは、徹底した破壊である。15 年に書かれた最初の戦争の物語の意図は、容赦なく執拗なまでに破壊性を描くことであった。いったん戦場に行けば、殺すか殺されるかしかない。彼の無気力は、無気力さゆえの残虐性に変わる。家族に英雄視されることなど何の意味も持たない。殺すか殺されるかの戦場でひたすら闘争心のみを駆り立てられ、目の前の敵を殺していく道具へ化してしまうイヴリンに、読者は恐怖を覚えるだろう。イヴリンはいったん気力を取り戻し、家族の愛を取り戻したかのように見えたが、イヴリンにとっては戦争とはまったく対極にある愛など意味を持たない。生きる力を取り戻したかのように見える彼の抑えられない破壊活動への衝動は、実は彼を死に向かって加速させることになっていたのだ。

その後、イヴリンは戦場で負傷する。頭に銃弾を受けるのだが、自分が傷を負っていると分かってから死ぬまで、感情的なものは一切描かれない。朦朧としていく意識の中で、何が見えるのか—自分がいる場所、横たわる死体、壊れた十字架。残された感覚で何を感じられるか、自分の体からどれくらいの血が流れているのか、負傷した足の感覚を確かめようとするが、動かない。イヴリンの視覚と感覚を通して、死を受け入れるプロセスが淡々と描かれる。生への執着もない。“a cold, clear abstraction” (*EME*, 230) と化した彼にドイツ兵が近づいてきて死んでいるのを確認しようとしたそのとき、朦朧としたイヴリンは最期に彼らを射殺する。そして再び別のドイツ兵にとどめを刺される。さらにそのドイツ兵は彼の顔をずたずたに引き裂いてこの作品は終わる。最後の場面では、彼はイヴリンではなく “the Englishman” として語られるが、それは戦争というものが、個人を全く否定してしまうということをも示している。空虚と狂気だけが残される。当時のロ

レンスは、徹底した空虚、狂気を描くことで、逆に人間に残された正気の可能性に希望を託そうとしたのだ。

3. 'The Thimble'

If the war could but end this winter, we might rise to life again, here in this our world. If it sets in for another year, all is lost. One should give anything now, give the Germans England and the whole Empire, if they want it, so we may save the hope of a resurrection from the dead, we English, all Europe. What is the whole Empire and Kingdom, save the thimble in my story. If we could but bring our souls through, to life. (*L*II, 420)

ロレンスがシンシア・アスキスのために書いた短編、'The Thimble' は、帰還兵とその妻の再生をテーマにしている。顔に深い傷を負って帰還した兵士ヘバーン(Hepburn) とその妻が、不慮の出来事に当惑し、無力感から復活を誓いあうまでの物語だ。この物語でも、法廷弁護士をしていた頃のヘバーンに彼女はこれといった魅力を感じることもなく、最初は結婚するつもりもなかったのだが、軍服を着て彼女の前に現れたとたん、"If you want to love your husband, you should see him in khaki."(*EME*, 190) と言って、たちまち彼に夢中になり結婚した。ここでも、戦争という衝撃が訪れると軍服を着た男にこそ存在の意義があり、女は、自分はとるに足らない存在のように思え、その男の妻として尽くしたいという衝動に駆られる。軍服にはそういう威厳を放つ力があった。ところが、夫は戦地で負傷し、彼女は肺炎にかかる。

回復して夫の帰りを待つ彼女は、ふと戦争と病気が自分と夫との間に生みだした距離感に当惑する。自分は夫について何も知らなかった。

夫のことを、自分が作り出した主観的な印象としてしか記憶していなかった。夫が顔に傷を負ったらしいということが彼女をさらに不安にする。

At any rate he would be different. She shuddered. The vision she had of him, of the good-looking, clean, slightly tanned, attractive man, ordinary and yet with odd streaks of understanding that made her ponder, this she must put away. They said his face was rather horribly cut up. She shivered. How she hated it, coldly hated and loathed it, the thought of disfigurement. Her fingers trembled, she rose to go downstairs. If he came he must not come into her bedroom. (*EME*, 193)

軍服姿の夫への心酔も、戦地にいる夫と手紙によって心を通わせていたことも、すべてが過去の幻覚となってしまった今、未知の存在としての夫と対面しなければならないという恐怖が彼女を襲う。"She did not want to think of his disfigurement, she did not want to have any preconception of it." (*EME*, 193) 美しい妻は、醜くなって帰って来た夫を受け入れられるだろうか。それでも、夫を迎えるために着飾りながら、傷ついた夫を迎える妻という自分の役割を演じようと、気だるい魂を奮い立たせる。そして帰って来た夫が発したことばは、あまりに不明瞭だった。夫は仲間の一人が撃った砲弾が誤って当たり、顎が砕け、口の半分がなくなっていたのだった。

ヘバーンは生と死のあいだを彷徨う亡霊のようで、まるで無力だった。光と闇の境目で、生きようか、死の世界へ戻ろうかと戸惑っているかのように思えた。彼女の心も揺れる。タイトルの「指ぬき」は、夫を待つ妻が偶然ソファの奥にはさまっているのを見つけたものである。100 年以上も前にある伯爵が女性に贈ったと思われるその指ぬきは、過去のロマンスを想起させる。この古い過去の物が夫を待つ彼

女の緊張感を和らげ、交わすことばを失った二人のあいだの沈黙から会話を生みだす「道具」の役割を果たしていた。それがなければ、彼女は夫に話しかけることすらできなかったのだ。夫の手に渡された指ぬきはしばらく存在を忘れられていたが、物語の最後で、二人の過去を象徴するかのように窓の外に放り投げられた。[10]彼女にとって過去の夫が幻覚となってしまっていたように、夫も、昔の妻のことは覚えていなかった。指ぬきはそんな二人の時間的、空間的隔たりをも象徴していたのだ。そこで二人は、出会ったばかりのようにまったく新たな出発点を見出す必要があった。意味のない過去を捨てなければ、次は始まらないのだ。そしてお互いの今の無力さに気づいたとき、二人には新しい関係が生まれる。

"I know," he said, "we are helpless to live. I knew that when I came round."

"I am as helpless as you are," she said

"Yes," came his slow, half-articulate voice. "I know that. You're as helpless as I am."

"Well, then?"

"Well then, we are helpless. We are as helpless as babies," he said.

"And how do you like being a helpless baby?" came her ironic voice.

"And how do *you* like being a helpless baby?" he replied.

There was a long pause. Then she laughed brokenly.

"I don't know," she said. "A helpless baby can't know whether it likes being a helpless baby."

"That's just the case. But I feel *hope*, don't you?" （*EME*, 199）

愛し合えるかもしれないという希望が二人を救う。

ロレンスはこの物語の中で、シンシア・アスキスの "word-sketch"

(*L*II, 418) を描こうとした。彼女の再生のための物語であったが、この作品はロレンスにとって新たな愛を描くきっかけの物語となる。戦争と愛とは対極のものであり、この時代を生き抜くためには、人は愛によって再生するしかない。11 月 2 日付の手紙で彼女に次のように語っている。

If I love, then, I am in direct opposition to the principle of war. If war prevails, I do not love. If love prevails, there is no war. War is a great and necessary disintegrating autumnal process. Love is the great creative process, like Spring, the making an integral unity out of many disintegrated factors. (*L*II, 424)

春という創造の季節を迎えるためには、秋という壮大な解体のプロセスが必要なのだ。戦争はその解体のプロセスである。戦争を早く終わらせなければ再生の希望すら失われると考えていたロレンスは、人を再生させる愛のかたちをその後の作品で模索していくことになる。

4. 二つの物語を繋ぐもの

Do not keep your will in your *conscious* self. Forget, utterly forget, and let go. Let your will lapse back into your unconscious self, so you move in a sleep, and in darkness, without sight or understanding. Only then you will act straight from the dark source of life, outwards, which is creative life.

I tell this to you, I tell it to myself – to let go, to release from my will everything that my will would hold, to lapse back into darkness and unknowing. There must be deep winter before there can be spring. (*L*II, 469)

12 月 7 日、ロレンスはオットリン・モレルに宛ててこのようなこ

とばを送った。理想郷ラナニムに夢を抱いて立ち上がったこの年、その構想はもろくも崩れ去ったが、表現者として彼は希望を失ったわけではなかった。戦時の世の中がそうであったように、ロレンスにとっても冬の時代であった。しかし、植物が地上の葉を枯らせても春を迎えるためにその根はしっかり生き抜いているように、ロレンスはその現実を受け入れていた。そこで、1915 年に書かれた二つの短編を繋ぐテーマを確認しておこう。一つは戦死した兵士の物語。ここでロレンスは、徹底した破壊衝動と死を描こうとした。淡々と徹底的な破壊を描くことで後に残る空虚感とその行為の無意味さを際立たせようとしているかのようである。この作品を書いていた頃、ロレンスはラッセルとの意見の相違に気付き始めていて、ケンブリッジの知識人たちの生活や態度にも幻滅し、彼らに期待できることは何もないと感じていた。恵まれた環境で平和主義を語るよりも、おそらくどの人間にでもある人間の奥に潜む破壊衝動を描かなければ、戦場に立たない人間はその恐怖に気づかないと考えたのだ。

そしてもう一つは帰還兵の物語である。アスキス氏のように戦場でさらに身近に死を経験し、亡霊のようになって帰還する兵士もいた。戦場がリアリティとなってしまった彼らにとって、帰ってきて生き続けることがいかに困難で苦しいことかをロレンスは理解していた。彼らにとって、そしてその妻たちにとっても、喪失した過去と折り合いをつけて再び「生きる」ということはさらに深刻な問題なのだ。また、彼が再生にこだわる背景には、ルパート・ブルック(Rupert Brooke)、シンシア・アスキスの弟、キャサリン・マンスフィールド(Katherine Mansfield) の弟の死という、この戦争で身近な人を失ったことも影響していると思われる。身近な人間の死によって、生きている人も死を経験する。ロレンスは、自分の中の一人の人間が死ねば、必ずもう一

人の自分が生まれるのだと周囲の人たちを励まし続けていた。一方で世間を憎みつつ、人間への希望を失うことはなかった。ただ、どう再生するかが問題なのだ。

再生の方向性を探る鍵として、この二つのストーリーに一つの連続性があることに気づく。それは、顔の傷である。'England, My England'の最後に登場するドイツ兵は、イヴリンが息絶えているにも関わらず執拗に彼の顔を切りつけていた。その顔に不気味な笑いが現われていたからだ。22 年版ではこのような描写はなく、ドイツ兵が彼の死体を見つけるところで物語は終わっている。語られるのはその事実だけである。15 年の段階では、ロレンスは、人間を戦争へ向かわせる極端な闇の部分、破壊本能といったものを強く意識していて、それに対する怒りを抑えることができなかった。それが戦争を生み、多くの人間を死へと駆り立てる。イヴリンの不気味な笑いにイギリス兵の狂気を、その顔を切りつけるドイツ兵にもその狂気を投影させた。 人間の最も目立つ部分である顔を破壊するという行為は、象徴的だ。また、'The Thimble' ではヘバーンが顔に傷を受けることで、妻の美しさと夫の醜さ、目に見える部分での対比が強調される。妻が最も恐れたのは夫の顔だった。この二人はまず「目に見えるもの」に対する恐怖を克服しなければならない。今まで「目に見えるもの」に依存し過ぎていた二人は、次は「目に見えないもの」に可能性を見出そうとするであろう。それは、「目に見えるもの」の奥にあるお互いの魂であり、二人が手を重ねる結末の部分に暗示されるように、「触れ合うこと」を通して感じ、直感によって理解しあう世界である。 'The Thimble' の最後のシーンでは、妻は一度は夫に触れられるのを拒むが、"Again he stretched forward and touched her hand, with the tips of his fingers. And the touch lay still, completed there." (*EME,* 200) とあるように、最終的に

はこのわずかな接触が、二人の再生の鍵となっている。問題は、どこまで「触れ合うこと」(“touch”) の可能性を信頼できるのか、信頼する勇気を持てるかであるが、この作品ではその可能性を示唆するにとどまっている。[11]

終わりに

ラッセルは『自伝』の中で、ロレンスのことを、経験がなく自分の力をあまりに過信しすぎていて個人の無力さをわかっていない、世の中を良くしようとは思っていなくて、ただ世の中がいかに悪いかを「雄弁な独りごと 」のように語って夢中になっているだけ、と批判している。[12]描写力は認めているものの、そこに思想はないということだ。二人の立場の違いを明確に表すものだが、このラッセルのロレンス批判は、皮肉にもロレンスについての真理を語っている。「雄弁な独りごと」こそ、ロレンスが芸術家の仕事であると自負していたことではないか。自己の矛盾する感情も含めて、この恐ろしい戦争をとことん語りぬく姿勢である。ラッセルに対しては、ロレンスにとっても、出会ったころの期待が大きかっただけに、幻滅も大きかった。手紙では、ことばが十分に客観視されないまま、時に相手の感情を度外視して語り続けるが、彼の雄弁な独りごとは、やがていくつもの物語を生みだしていく。ロレンスは続く作品の中でオットリン・モレルやラッセルをモデルにした人物を登場させ、エリート知識階級の彼らを痛烈に批判する。この危機的な時代にロレンスが感じた「怒り」と「希望」は、短編小説では繰り返し昇華され、長編小説で融合されて、様々なかたちで世に送り出されることになるのだ。若さゆえの未経験や焦りがあったのも事実だが、ただ彼は、作家として時代の危機をいち早く察知し、肉体的にも精神的にも疲弊し、生きる活力を失いかけてい

るイギリス人の魂に揺さぶりをかけようとした。戦時の狂気がロレンスの中にも入りこんでいたのかもしれない。この時代をどう生き抜くかが今後の生き方の質を決定する。そのためにロレンスは、作家として発言し続けなければならないと考えたのだ。手紙も、作品も、そこに溢れ出たことばはまさにその時代を雄弁に物語るものである。

注

＊本稿は、第27回甲南英文学会（2011年7月2日、於甲南大学）での発表原稿を加筆修正したものである。

1. George J. Zytaruk and James T. Boulton eds., the Cambridge Edition, *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. II. 1913 – 16 (Cambridge: Cambridge UP, 1981), 269. 以下、『書簡集』第II巻からの引用は *L*II とし、引用ページを括弧内に記す。
2. James T. Boulton ed., the Cambridge Edition, *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. I. 1901-13 (Cambridge: Cambridge UP, 1979), 477.
3. ケンブリッジ版の『書簡集』に収められている1915年に書かれたロレンスの手紙は、294通、宛先は48人に及ぶ。その中で、レディ・オットリン・モレル宛ては52通、バートランド・ラッセルが20通、レディ・シンシア・アスキスは21通である。この手紙の数からも、出版関係者を除いてロレンスがいかに彼らと親密であったか（あろうとしたか）が窺える。
4. Bertrand Russell, *The Autobiography of Bertrand Russell*, Vol. II (London: George Allen & Unwin, 1968), 20-21. ラッセルはロレンスのことを "imaginative genius" だと思った。自分より深い洞察力を持っていると感じたようだった。

5. バートランド・ラッセル宛ての7月8日付の手紙で、ラッセルの原稿に殴り書きをしたことを詫びてはいるものの、社会再建を本気で考えるならば別の原理を取り入れる覚悟が必要であるとか、大衆向けの通俗的な講演ではなく哲学的な内容にしてほしい、大胆になってほしいなどと注文をつけている。

6. B. Steele ed., *England, My England and Other Stories*, the Cambridge Edition (Cambridge: Cambridge UP, 1990) 'England, My England', 1915 version はこの巻末の Appendix に収められている。以下、この短編集からの引用は *EME* とし、引用ページ数を括弧内に記す。

7. W. E. Henley, *England* (1900) の冒頭は、What have I done for you, / England, my England? / What is there I would not do, / England, my own? で始まる。

8. 本稿では論じないが、1922 年版では、15 年版ほど主人公の無力感は強調されず、主人公の名前も Egbert に変えられ、前半の部分は古き良きイギリスを象徴するかのように、より牧歌的、平和的に描かれている。リアリティに欠けるとしばしば指摘される後半の戦線のシーンも、大幅に削除される。

9. Michael Black, *Lawrence's England; The Major Fiction, 1913-20*. (New York: Palgrave, 2001), 154.

10. 「指ぬき」の象徴については疑問が残る。鉄村春生は『D・H・ロレンス短編全集』の解説で、この指ぬきの放擲が「過去を脱し、未来への再出発を表す」としつつ、この指ぬきには爵位を現わす文字と日付が刻まれていたことで、ロレンスが意図したように古いイギリス、ヨーロッパの伝統を象徴させるものとするには、象徴性が弱いのではないかと疑問を投げかける。 この作品は 1921 年の「てんとう虫」（'Ladybird'）の原型という位置づけにもなっていて、指ぬきも再びシ

ンボルとして登場する。

11. 'touch' のテーマは、翌年（1916）に執筆された短編、'The Horse-Dealer's Daughter' をはじめ、その後の多くの作品に引き継がれる。

12. ラッセルは、"Gradually I discovered that he had no real wish to make the world better, but only to indulge in eloquent soliloquy about how bad it was." (Russell, 21) と述べ、そのような独り言に耳を傾けるのはせいぜい少しの信徒だろうと言っている。

Works Cited

Black, Michael. *Lawrence's England; The Major Fiction, 1913-20.* New York: Palgrave, 2001.

井上義夫　『新しき天と地』（評伝D・H・ロレンスII）小沢書店、1993年。

Lawrence, D. H.. *England, My England and Other Stories.* Ed. Bruce Steele. Cambridge: Cambridge University Press, 1990. [『D・H・ロレンス短編全集 2』鉄村春生ほか監訳、大阪教育図書、2003 年。]

———. *The Letters of D. H. Lawrence*. Ed. James T. Boulton. Cambridge: Cambridge University Press, 1979.

———. *The Letters of D. H. Lawrence.* Eds. George J. Zaytaruk and James T. Boulton. Vol. II. Cambridge: Cambridge University Press, 1981. [吉村宏一、今泉晴子、霜鳥慶邦ほか編訳『D・H・ロレンス書簡集 VI 1915』松柏社、2001 年。]

武藤浩史他編、『愛と闘いのイギリス史　1900－1950 年』慶応義塾大学出版会、2007 年。

清水一嘉、鈴木俊次編、『第一次世界大戦とイギリス文学―ヒロイズムの

喪失―』世界思想社、2006 年。

Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell 1914-1944.* London: George Allen and Unwin, 1968.

主語を巡って

福田　稔

主語という文要素に関する研究は様々なものがあるが、近年の生成文法で中心となっているのは「主語位置になぜ要素が生じるか」という問題である。歴史的には、まず標準理論において句構造規則で主語位置にNPが生じることを保証していた(Chomsky (1965))が、GB理論では上述の問いへ原理に基づいて答えを与える試みがなされた。しかし、格や主題役割といった概念で説明することができず、結局は「節には主語がなければならない」という拡大投射原理(Extended Projection Principle)で記述するレベルに留まっていた(Chomsky (1982))。その後、素性照合(feature checking)が重要な役割を演じるミニマリスト・プログラムでは、主語位置がなんらかの要素で満たされるという事実をEPPという素性の照合で説明しようとした(Chomsky (1995))。しかし、EPPという素性を仮定することに対しては様々な問題が指摘されている(Epstein and Seely (2006))。

他にも主語に関する研究課題があり、GB理論以前から分析が試みられているものの依然として問題として残っている。例えば、主語DPと目的語DPの内部からの移動の可能性、主語として機能する節の構造位置、DP内部で主語として解釈される属格名詞の構造位置などである。以下の3編の論文はいずれもこれらの問題を扱っている。

北峯裕士氏の「名詞句からの抜き出し」は、主語位置にあるDPと目的語位置にあるDP内部からの移動の可能性の違いを、Müller (2010)の提案を援用しながら分析している。また、古川武史氏の「文主語の範疇と統語

位置」は、Rizzi (1997)の左周辺部(left periphery)の提案を前提に、that 節に代表される要素が主語として機能している文主語構文の構造分析を提案している。そして、福田は、Rizzi (1997)の左周辺部が DP にもあると仮定して、属格名詞が主語解釈の場合と所有者解釈の場合の違いを属格名詞の構造位置から導き、さらにその分析を DP からの移動現象に関連させて Stroik (2009)の派生理論で説明している。

これらの論文は第 27 回甲南英文学会・研究発表会で開いたワークショップ「主語を巡って」での口頭発表を基にしている[1]。北峯裕士氏の「名詞句からの抜き出し」は口頭発表「主語と目的語からの移動について」に、古川武史氏の「文主語の範疇と統語位置」は口頭発表「主語の範疇と統語位置について」に、そして、福田の「属格名詞と DP からの移動」は口頭発表「DP 内部の属格主語の統語位置について」に基づいている。

参照文献

Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Epstein, David Samuel and T. Daniel Seely (2006) *Derivations in Minimalism*, Cambridge University Press.

Müller, Gereon (2010) "On Deriving CED Effects from the PIC," *Linguistic Inquiry* 41, 35-82.

Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer, Dordrecht.

Stroik, Thomas (2009) *Locality in Minimalist Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

---

1 第 27 回甲南英文学会（平成 23 年 7 月 2 日）のでワークショップ「主語をめぐって」開催は、平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：22520506 研究課題名　左周辺部構造と主語の特異性に関する統語研究　代表者　福田稔）の援助を受けている。ワークショップでは中島平三先生、有村兼彬先生、鈴木憲夫先生から有益な助言やコメントを頂いた。感謝申し上げたい。

名詞句からの抜き出し

北峯裕士

SINOPSIS

This paper deals with the extraction from NPs. It is standardly said in the literature that the extraction is permitted from objects but not out of subjects. But this object-subject asymmetry does not hold when the subject, out of which wh-expression is extracted, is derived from complement position. In particular, the extraction from non-derived subjects is totally ungrammatical, while that from derived subjects yields a improvement. In this paper, this phenomenon is accounted for under the theory of phase.

1. はじめに

本稿では、名詞句からの抜き出しにおける可能性、つまり、目的語名詞句からと主語名詞句からの抜出可能性の差を考察していく。

(1) a. Who did you read stories about?

b. Who did you hear jokes about?

(2) a.?? Who did you read those stories about?

b.*Who did you hear those jokes about?

(3) a. Who is the class reading a book about?

b.*Who is a book about being read by the class?

一般的に、名詞句からの抜き出しに関しては定性条件がかかり、上の(1a,b)のように不定名詞句からの抜き出しは可能で、一方、(2a,b)が示すように、定名詞句からの抜き出しはできないとされている。しかし、(3)が示しているように、不定名詞句からの抜出に関して、目的語名詞句から抜き出す場合と主語名詞句からの抜き出しでは、明らかな文法性の違いが生じている。従来、(3a)のようなものはChomsky(1977)等の主語条件違反、Huang(1982)における CED 違反とされ、説明がなされてきた。

しかしながら、下に示すように、必ずしも主語名詞句からの抜き出しが不可能であるというわけではない。

(4) a. *Who did pictures of arrive?

b. ?About which war was a book sold?

c. ?On which topic was a lecture given?

d. ?Of what senator was a picture taken?

Johnson(1985)では、(4a)よりも(4b,c,d)は、容認性がかなり高いと指摘されている。

そこで本稿では、目的語名詞句からの抜き出しを踏まえた上で、主語名詞句からの抜き出しを説明する分析を提案する。

２．１．目的語からの抜き出し

Davies & Dubinsky(2003)では、 名詞句を、次のように３種類に分け、目的語名詞句からの抜き出しを考察している。

(5)具体名詞(concrete nominal)

a. *Which church did Ashley prefer [the café near]?

b. *What sort of fur was George looking for [a dog with]?

(6)結果名詞(result nominal)

a. Who were the Phillies hoping for [a victory over]?

b. *Who were the Phillies hoping for [the victory over]?

(7)複合イベント名詞(complex event nominal)

Which patient did the surgeon forget to observe [the examination of]?

(5)のような具体名詞からの抜き出しは定性条件にかかわらず不可能で、(6)の結果名詞の場合は、定性条件を満たせば可能、(7)の複合イベント名詞に関しては、定性条件にかかわらず可能と観察している。つまり、彼らは、(5)のような具体名詞以外の参与構造(participant structure)を持つ結果名詞や複合イベント名詞の場合、名詞句からの抜き出しが可能であると観察しているわけである。また次の(8a)と(8b)の違いであるが、*book* などの名詞は、どのような動詞の補部として生じるかによって、*book* 自体の読みが変わってくる。(8a)のように、情報源としての本（情報）としての読みの場合、結果名詞となり、抜き出しは可能となるが、本そのもの（物質）としての読みとなる(8b)では、具体名詞になり、抜き出しは不可能となる。

(8) a. Which presidents do children usually read books about?

b.*Which presidents do children usually shelve books about?

また、結果名詞の場合でも、次に示すように、定性条件を満たさなくても、抜き出しが可能な場合があるが、(9a)と(9b) のような違いが出るのかを、William & Stanley(2003)は、Abstract Noun Incorporation

を提案することにより説明している[1]。

(9) a. Who did you tell those jokes about?

b.*Who did you hear those jokes about?

彼らによると、DP は、NP とは異なり、wh 移動の絶対的な障壁となるが、この操作により、動詞の補部 DP が主要部である動詞に組み入れることで、DP の障壁性を取り消すことができる[2]。その結果、定性条件が回避されるとしている。

以上のように、動詞の補部である名詞句の抜き出しは、概して述べると、参与構造を持たない具体名詞の場合を除いて、潜在的に可能であると思われる。

２．２．主語からの抜き出し

すでに指摘したように、下のような主語からの抜き出しと目的語からの抜き出しに関して、文法性の差が生じる。

(3) a. Who is the class reading a book about?

b.*Who is a book about being read by the class?

一般的に(3)のように、目的語からの抜き出しは可能であるが、主語からの抜き出しができないことは、主語条件や CED などで説明がなされてきた。次の(10)のように、概して、主語からの移動は、不可能である。

(10) a.* What is that she wanted to learn *t* unfortunate?

b.*What is to learn *t* very hard?

c.*What is checking *t* absolutely necessary before you turn in your thesis?

Davies & Dubinsky (2003)は、この現象を説明するために、次の(11)が示すように、主語位置にはさまざまな範疇が現れるが、それらは、全て DP であると主張している[3]。

(11) a. That Shelby lost it is true.

b. Under the bed is a good place to hide.

c. Very tall is just how he likes his bodyguards.

その根拠として、全ての時制節には D 素性を持つ T が存在し、その T がスペルアウト以前に照合されなければならず、時制節の主語位置に現れる範疇は、全て DP シェル構造を持つと考えているからである。つまり、T の D 素性を照合するために、主語位置に生じたものは、どんな範疇でも、DP 構造をしていると主張しているのである。したがって、(10a)の構造は、概略、次のようになり、DP という絶対的な障壁を越えて移動しているため、非文法的になると考えている。

(12) *what is [$_{DP}$ D [$_{CP}$ that she wanted to learn *t*]] unfortunate

このように考えると、上の(3a,b)の文法性の違いは、DP という絶対的な障壁を超えるかどうかの違いになる。

(13) a. Who is the class reading [$_{NP}$ a book about *t*]?

b.*Who is [$_{DP}$ [$_{NP}$ a book about *t*]] being read by the class?

上の(13)は、(3)を構造表記したものであるが、目的語の場合である(13a)では、定限定詞を含んでおらず、単なるNPからの抜き出しとなり、障壁を越えていない。また、(13b)の主語の場合も同様に、定限定詞を含んでいない。しかし、この場合、目的語とは違い主語なので、Tが持つD素性を照合するために、NPの上にDP-shellを持たなければならない。このDPを越えるため、(13b)は非文法的となる。つまり、この絶対障壁であるDPを越えるか越えないかの違いで、(3)のような文法性の違いが生じると彼らは説明している。

しかしながら、このように主語位置に現れる範疇は、Tが持つD素性照合のために、絶対的な障壁であるDPシェルを持つとすると、次のような場合は、(13b)と同様に、全て非文法的になるという誤った予測が得られてしまうことになる。

(14) a. ?About which war was a book sold?

b. ?On which topic was a lecture given?

c. ?About what person was a story recounted?

d. ??Of which senator did a portrait arrive?

e. ??On what topic did a lecture interest you?

f. ??About whom did a story amaze you?

上の(14)の例文は、全て主語名詞句から抜き出しが行われているが、彼らの枠組みから考えると、全ての例文に関し、移動に対する絶対的な障壁であるDPシェルを越えることになるので、不自然ながらもかなり文法性が高いという事実を説明できない。

3．解決案

まず最初に、(14)と(15)の文法性の違いを考えてみよう。

(14) a. ?About which war was a book sold?

b. ?On which topic was a lecture given?

c. ?About what person was a story recounted?

d. ??Of which senator did a portrait arrive?

e. ??On what topic did a lecture interest you?

f. ??About whom did a story amaze you?

(15). *Of which car did the driver t cause a scandal?

上の(14)と(15)の例文では、いずれの場合も、主語名詞句からの抜き出しが行われており、文法性の違いが出ているが、派生に着目してみると、(15)は能動文であり、(14a) は受動文である。つまり(15)の主語は、派生主語であり、(15)と(14a)は、それぞれ、次のような構造を持つことになる。

(16) a. .....[$_{vP}$ the driver of which car v [$_{VP}$ cause a scandal]]

b. .....[$_{vP}$ v [$_{VP}$ sold a book about which war]]

(16a)では、主語は指定部に位置しており、(16b)では、補部に位置している。また、(14)のその他の例文も、動詞が、非対格動詞や心理動詞であるので、主語名詞句は、(16b)と同じように、補部に位置しており、その後、主語位置へ移動したと考えられる。補部に位置していた主語名詞句は、(14)のように抜き出しが可能で、(15)のように補

部ではなく指定部に位置していた主語名詞句からの抜き出しができない。

そこで本稿では、Müller(2010)の Last Resort(17)と Edge Feature Condition(18)を概観していく。また、Müller では、全ての XP が phase であるとしているが、本稿では、便宜上、通常仮定されているように、CP と外項を持つ v P が phase を形成するとする。

(17) Last Resort

a. Every syntactic operation must discharge either structure-building features or
probe features.

b. Only features on the top of a feature list are accessible.

(18) Edge Feature Condition (EFC)

An edge feature [XP] can be assigned to the head γ of a phase only if (a) and (b)

a. γ has not yet discharged all its structure-building or probe features.

b. [XP] ends up on top γ 's list of structure-building features.

彼によると、述語の語彙エントリーに主題役割は順序付けられており、下位範疇化素性(structure-building features)リストに反対の順序で写像される。さらにその下位範疇化素性は、一つずつ、階層の一番上から放出(discharge)されると考えている。具体的に述べると、(19)の例文において *gave* は、(20a)の主題役割を持ち、それらが、(20b)の下位範疇化素性リストへと写像される。その下位範疇化素性が、

$[PP]_3$、$[DP]_2$、$[DP]_1$の順番で放出されるという。

(19)　$John_1$ gave a $book_2$ to $Mary_3$

(20) a.　$th_1>th_2>th_3$　　　　(Agent>Theme>Goal)

b. $[PP]_3>[DP]_2>[DP]_1$

彼はさらに、(19b)のように述語の主題役割にさかのぼらない下位範疇化素性も仮定している。たとえば、v は VP をシータ表示しないが[VP]という下位範疇化素性により、v と VP が併合できるとし、その他の機能範疇に関しても同様である。また外項に関してであるが、彼は、(19b)とは異なり、V の項として留まりその後 v の指定部へ併合するのではなく、v の項として捉え、v には、[VP]>[DP]の下位範疇化素性があり、v の項である VP がまず最初に併合し、v の[VP]素性が放出され、その後、外項が併合され、[DP]素性が放出されると仮定している。また(17b)から、放出された素性は語彙項目から削除される。さらに、(18)であるが、簡単に述べると、edge-feature が導入されるのは、phase の主要部に少なくとも一つは放出すべき素性が残っており、一旦 edge-feature が導入されると、その素性はすぐに放出されなければならないということである。つまり、edge-feature が導入されるのには、edge となる主要部が active で無ければならないということである。具体的に次の構造で見てみよう。

(21).　……$[_{vP}$ α $[_{VP}$ V β]]

補部に位置するβからの抜き出しは、vP の phase-edge を経由することが可能である[4]。なぜならば、v には VP＞αという下位範疇化素性があり、まず v は VP と併合し、指定部素性αが放出される前に、v

に edge-feature を挿入できる。しかし、指定部に存在しているαからの抜き出しは不可能である。v の VP＞αと言う下位範疇化素性が全て放出されているため、edge-feature を v へ挿入できない[5]。

したがって、α内部に存在する要素は、v の edge を経由することはできず、vP という phase を越えて移動せざるを得なくなり、(22)の PIC 違反と考えられる。つまり、Müller(は、phase の指定部に要素が現れると、その phase にもはや edge-feature を挿入できなくなるため、その指定部からの抜き出しは不可能と主張している。

(22) Phase Impenetrability Condition (PIC)

The domain of a head X of a head XP is not accessible to operations outside XP; only X and its edge are accessible to such operations.

では、問題となっている(16)を再び考えてみよう。

(16) a. .....[$_{vP}$ the driver of which car v [$_{VP}$ cause a scandal]]

b. .....[$_{vP}$ v [$_{VP}$ sold a book about which war]]

(16a)では、指定部に *the driver of which car* が生じており、v に edge-feature を挿入できず、指定部内部に存在する *of which car* を移動させると、(22)の PIC 違反となる。一方、(16b)では、*which war* を移動させても、そのようなことは無い。なぜならば、v は外項を取らないため、phase を形成しないからである[6]。Müller のように、指定部素性が放出される、言い換えると、外項が併合されてしまうと、edge-feature が挿入されなくなり、その外項からの移動は不可能であるとすると、下にくりかえし表示しているが、上の(14)と(15)の文法性の差を説明することができるようになる[7]。

(14) a. ?About which war was a book sold?

b. ?On which topic was a lecture given?

c. ?About what person was a story recounted?

d. ??Of which senator did a portrait arrive?

e. ??On what topic did a lecture interest you?

f. ??About whom did a story amaze you?

(15) *Of which car did the driver t cause a scandal?

(14)に使われている動詞は、受身動詞、非対格動詞、心理動詞のいずれかであり、主語位置に存在する名詞句は、もともとは内項で、全て、外項を欠いており、v が phase を形成しない。一方(15)では、外項から抜き出しが生じており、v が phase を形成しているにもかかわらず、edge-feature の挿入ができず、PIC 違反が生じていると考えられる。

さらに、1.1. で述べたように、目的語からの抜き出しは、潜在的に可能である。なぜ潜在的に可能であるかというと、下の(21)の構造において、外項である α が併合する前に、v へ edge-feature を挿入でき、β の内部からそこを経由することにより、PIC を回避することができるからである。

(21) ……$[_{vP}$ α $[_{VP}$ V β]]

４．まとめ

本稿では、名詞句からの抜き出しを見てきたが、目的語名詞句の場合は、参与構造(participant structure)を持てば、潜在的に抜き出しが可

能であり、また主語名詞句からの抜き出しも補部位置に存在していれば同様に可能である。それは、v が外項を取り phase を形成するかどうか、そして phase を形成する場合、v に edge-feature を挿入できるかどうかで説明を試みた。

しかし次の対比を見てみよう。

(14)d. ??Of which senator did a portrait arrive?

(22) *Who did pictures of arrive?

(14d)と(22)の例文に共通して、非対格動詞 *arrive*[8]が用いられて、主語名詞句は両者とも動詞の補部の位置に存在しており、その位置から移動しても PIC 違反は生じないはずだが、pied-pipe されている *of which senator* の抜き出しと *who* の抜き出しとでは容認性の差がでる。このような問題に関しては、今後の課題としたい。

参考文献

Chomsky N. (1981) *Lectures on Government and Binding.* Dordrecht: Foris.

Chomsky N. (1986) *Barriers.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky N. (1995) *The Minimalsit Program.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky N. (2001) 'Derivation by Phase', in Michael Kenstowicz, ed., Ken Hale: A *Life in Language*, 1-52. Cambridge, Mass.,: MIT Press.

Davies, W. and S. Dubinsky. (2003) 'On extraction from NPs', *Natural Language & Linguistic Theory 21*, 1-37.

Huang, C. –T. C. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*. MIT Ph. D. dissertation.

Johonson, K. (1885) *A Case for movement*. MIT Ph. D. dissertation.

Lasnik, H and M. Saito. (1992) *Move α: Conditions on Its Application and Output*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Muller, G. (2010) 'On Deriving CED Effects from the PIC', *Linguistic Inquiry 41*, 35-82

Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*. MIT Ph. D. dissertation

注

本研究は平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：22520506 研究課題名　左周辺部構造と主語の特異性に関する統語研究　代表者　福田稔）の援助を受けている。また、本稿は第 27 回甲南英文学会・ワークショップ「主語をめぐって」（平成 23 年 7 月 2 日）での発表に基づいている。

1.この操作は、名詞が result nominal であること、名詞が表されている結果と意味的に関係している動詞の補部であること、動詞の主語が result nominal の行為者主語を制御していること、の三つの条件が満たされなければならないとしている。

2.彼らは、DP は範疇的に移動をブロックし、次に示すように、定限定(definite determiner は D 主要部、非限定詞(indefinite determiner)は、D でないと仮定している。

i)a. $[_{DP}$ those $[_{NP}$ books about Nixon$]]$

b. $[_{QP}$ some$[_{NP}$ books about Nixon$]]$

3.義務的な繰上げ、主語・助動詞の一致、強意の再帰代名詞が生じることから、主語位置に現れたものは、どんな範疇でも DP-shell 構造を持っていると仮定している。

4. Müller(2010)では、全ての XP が phase と仮定しているが、全ての XP が phase を形成するのであれば、本稿(21)における β からの抜き出しは、β の edge、

V の edge そして、v の edge へと移動することになるので、本稿では、便宜上、phase を形成するのは、CP と外項を持つ vP と仮定し、議論を進める。また、本稿では、CED 効果のもう一つの例である付加詞条件に関しては考察しないが、彼は、付加詞は何らかの機能範疇の指定部に併合されると仮定し、主語からの抜き出しと同じ結果がでると考えている。

5. 素性の挿入、放出の順番に関する議論は、Müller((2010)を参照のこと。

6.受身文における暗黙の行為者(implicit agent(IA))を仮定した場合、v には、VP＞IA という下位範疇化素性があり、まず VP と併合することにより、VP 素性を放出し、IA 素性が放出される前に、v に edge-feature が挿入される。その場合、v の edge を経由しての移動となる。

7. Müller は、次の例文を非文法的とすることから、主語からの抜き出しは、全て X の指定部素性が放出されたあとに生じ、PIC 違反を起こしていると考えているようだが、本稿では、全ての主語からの抜き出しが X の指定部から生じているとは考えていない。

i)a. *who has a comment about t annoyed you

b.*about whom has a comment annoyed you)

8. Johnson(1985)によると、話者の中には、非対格動詞や心理動詞主語からの抜き出しは、完全に非文法的で、受身の述語の主語からの抜き出しは、わずかながら容認性があがると述べている。しかし、(22)の例文では、従来言われていた A-over-A の違反が生じているが、(14d)では、そのようなことは無い。

文主語の範疇と統語位置*

古川武史

SYNOPSIS

We observe that some categories other than DP can appear in subject positions in English. We focus on the sentential subject construction and its salient properties, review two major extant analyses in terms of categorical status and syntactic positions of sentential subjects, and point out some problems posed by the analyses. We will attempt to propose an alternative to solve the problems within the frameworks of the left periphery of Rizzi (1997) and the minimalist program of Chomsky (2000, 2001, 2007, 2008). In particular, we will demonstrate that Agree plays an important role to activate DP-shells of sentential subjects merged in either TopPs or FinPs.

0. はじめに

英語の主語位置に生起するものとして、DP 以外には、(1)の CP である文主語と（2）の PP、AP の例が観察されている。

(1) [$_{CP}$ That Shelby lost it] is true.

(2) a. [$_{PP}$ Under the bed] is a good place to hide.

b. [$_{AP}$ Very tall] is just how he likes his bodyguards.

Davies and Dubinsky (2001)では主語に生じる要素は（1）や(2)のような場合もみなDPであるという分析が提案されている。一方、（1）の文主語構文については、1970年代の生成文法においてKoster (1978)（ミニマリストプログラムの枠組みでは、Alrenga (2005)、Moulton(2009)等）は、文

主語の振る舞いがDP主語よりもむしろ話題化(topicalize)された要素の振る舞いに近いためトピック(topic)とする分析が提案されている。

セクション1では、文主語の名詞的特質を概観する。セクション2では先行研究を概観し、問題点を指摘する。セクション3では、ミニマリスト・プログラムやRizzi (1997)の文の左周辺部の構造分析(Cartographic Approach)の枠組みで解決策を提案する。文主語の認可には、Agreeが重要な働きをし、Agree関係が成立するとDPシェルができるという提案を行う。文主語の生起位置としては、トピックと主語が生じる位置にあるとする提案を行う。セクション4は本稿の結語となる。

1. 文主語の名詞的特質

Davies and Dubinsky (2001)は、文主語の注目すべき特質の一つである名詞的な特質、すなわち、文主語はDP主語と同様の振る舞いを示す様々な例を指摘している。このセクションでは、文主語の名詞的特質について概観しておく。

第一に、文主語は繰り上げなどのA移動の適用を受ける。

(3) $[_{CP}$ That Shelby lost it$]_1$ appears $[t_1$ to be true].

(4) *It/There appears $[[_{CP}$ that Shelby lost it] to be true].

第二に、文主語と動詞の間には数の一致が見られる。

(5) $[_{CP}$ $[_{CP}$ That the march should go ahead] and $[_{CP}$ that it should be cancelled]]] *have* been argued by the same people at different times.

第三に、equally は (6) にあるように複数名詞句によって認可される。同様に文が主語位置に複数生じると equally は認可される。

(6) a. The combatants were equally intransigent.

b. My rabbits and my hamster are equally annoying.

(7) [$_{CP}$ That he'll resign] and [$_{CP}$ that he'll stay in office] seem at this point equally possible.

それに対して、文が目的語位置に複数生じると、equally は認可されない。

(8) Dale thought that Dana left and that Terry wouldn't come (*equally).

第四に、文主語は強意を表す再帰代名詞（emphatic reflexives）を認可する。

(9) a. The professor herself offered the student sage advice.
b. The zookeeper forced the monkey itself to clean up the cage.
c. I gave my x-rays to the doctor herself.

(10) a. That Leslie arrived drunk itself put Kelly in a foul mood.
b. That there were 25 miles to go was itself enough to discourage Edwin.

目的語位置の文は強意を表す再帰代名詞を認可することができない。

(11) a. Kelly was angry that Leslie arrived drunk (*itself).
b. Edwin hoped that there were less than 2 miles to go (*itself).

以上の議論をまとめると、文主語の特性として、次のようなことが言える。文主語には名詞的な特性が見られるが、一方、目的語位置にある文は名詞的な特性を示さない。

2 先行研究

文主語に関する分析のうち主な二つの分析、すなわち DP シェル分析とトピック分析を概観し、それぞれの問題点を指摘する。

2.1 DP シェル分析

Davies and Dubinsky(2001)は、セクション 1 で見たように名詞との平行性に着目し、文主語は音声的に空の D の補部に CP が生じている

とする DP シェル分析を提案している。

(12) [$_{DP}$ [$_{D}$ φ][$_{CP}$ That Shelby lost it]] is true.

この分析の利点の一つには、受動文の主語に文を許す動詞は、能動文では目的語に名詞を取る動詞に限定されるという Alrenga (2005)の一般化が説明できるという点が挙げられる。

(13) Alrenga の一般化

A passive verb may appear with a clausal subject only if the position of the gap is the one in which an NP is licensed by the verb's active form.

(14) a. [$_{CP}$ That Grady quit the team] is believed by everyone.
(Cf. Everyone believes that.)
b. *[$_{CP}$ That Grady quit the team] is hoped by everyone.
(Cf. *Everyone hopes that.)

DP シェル分析では、文主語は DP として TP 指定部にあり、(2) で見たように PP や AP が主語位置に生じると、文主語の場合と同様に、上位に DP シェルが生じ、DP となる。したがって、英語の主語位置に生じる範疇は、すべて DP であるということになる。そのため、DP シェル分析を仮定すると、文主語は DP 主語と統語的に同じ振る舞いを示すことを予測する。しかしながら、実際には、DP 主語と完全に並行的ではない。以下 DP シェル分析の問題点を見ていく。

まず、文主語構文は、主語助動詞倒置 (subject-auxiliary inversion: 以下 SAI)の適用を受け、疑問文にすることができない点が挙げられる。

(15) a. Did that story really suck?
b. *Would for the Giants to lose the World Series really suck?
c. *Who did [that John left early] disappoint?

次に、DP シェル分析によると、(16a)にあるように DP 主語の場合と同様に、文主語の前にトピックを移動する話題化は可能であると予測するが、実際は、(16b)が示すように、文主語構文に話題化は適用できない。

(16) a. John, the story shouldn't have bothered.

b. *John, that the Giants lost the World Series shouldn't have bothered.

また、DP シェル分析では、文主語は DP であるため、不定詞補文においても文主語が生起可能であると予測する。しかしながら、(18) にあるように不定詞補文を文主語にすると容認可能性が下がるか、非文となる。

(17) a. John believes their claims about human cloning to be true.

b. I {planned/intended/expected/hoped/prayed} for our cloning attempts to be discovered.

(18) a. ?*John believes [that the cult members cloned a human baby] to be true.

b. *I {planned/intended/expected/hoped/prayed} for that the cult members coned a human baby to be discovered.

最後に、なぜ文主語の場合に限り、空の D の補部として CP が生じるのか、つまり、(19b) のように、CP が PP の補部に生じると DP シェルが認可されず、非文になるのか原理的に説明する必要がある[1]。

(19) a. John didn't think of that.

b. *John didn't think of that he might be wrong.

2.2 トピック分析

文主語の生じる位置は、TP指定部ではなく、より上位の左周辺部にあるとする分析が提案されている。

(20) a That these nouns behave differently is captured by this formulation of the rule.

b [$_{CP}$ That these nouns behave differently] [$_{TP}$ … is captured t_1 by this formulation of the rule].

一つには、Stowell(1981)は、格を付与する要素には格が付与されないというCase Resistance Principleの帰結として、文主語は主語位置のTPの指定部からより上位の位置へと直接移動するという分析を提案している[2]。

(21) [$_{CP}$ That these nouns behave differently]$_1$ C [$_{TP}$ t_1 is [captured t_1 by this formulation of the rule].

Koster(1978)は、文主語はTP指定部より上位の左周辺部の位置に基底生成されるという提案を行っている[3]。さらに、Koster(1978)の基本的な提案を受け入れ、文主語はTPより上位のトピックが生じる位置に基底生成させたうえで、空演算子(null operator)移動によって文主語と主語位置とを関連づけるという提案（Alrenga(2005)）がある。

(22) [$_{CP}$ That these nouns behave differently]$_1$ Op_1 [$_{TP}$ t_1 is [captured t_1 by this formulation of the rule].

以下の議論では、文主語のCPは、直接移動したか、あるいは基底生成されたかはここでは問題にせず、トピックが生じる位置にあるとし、これらの分析のことをトピック分析と統一して呼び、議論を進めて行くことにする。

次に、このトピック分析の経験的な動機付けを概観する。トピック分析は話題化構文との平行性に着目している。

文主語構文がSAIの適用により疑問文にすることができないというDPシェル分析の問題点は、話題化構文と平行的であるとすれば説明が可能である。

(23) a. *To whom did [this book] you give?

b. *Who did [that John left early] disappoint?

つまり、トピック分析では、SAIで移動する助動詞の着地点が、話題化された要素や文主語よりも下位にもかかわらず、文主語よりも前に移動しているために局所性の条件に違反し非文となると正しく予測する。

文主語構文において話題化ができないという特質も、話題化を二重にかけることができない事実と平行的に考えれば説明が可能である。

(24) a. *[John], [this book], I will give to.

b. *[Such things], [that he reads so much] doesn't prove.

また、補文中の文主語が生じうる環境は補文中の話題化の場合と並行的である。

(25) a. I {think/said/believe} that for us to smoke really bother her.

b. ?*I regret that for us to smoke really bother her so much.

c. ?*Mary wishes that for us to smoke bothered her more than it did.

(26) a. Mary {thinks/said/believes} that John, the article really bothered.

b. ?*I regret that Mary, my antics upset as much as they did.

c. ?*Mary wish that John, the article bothered more than it did.

次に、DPとの平行性についてトピック分析ではどのように説明ができるのかを見ていこう。文主語はトピック位置で基底生成され、元位置と空演算子移動により関連づけられるというAlrenga(2005)の提案では、この空演算子の範疇が名詞的であると仮定すれば、Alrengaの一般化が説明できる。つまり、Alrenga(2005)の分析において、DPである空演算子移動

が関与しているため、DPのみを補部として取る動詞を受動文にすると、文主語が許されるということが説明される。

(27) a. *This formulation of the rule {expresses/captures/reflects/brings out} [that the nouns behave differently].

b. This formulation of the rule {expresses/captures/reflects/brings out} [the fact that the nouns behave differently].

c. [That the nouns behave differently] is {expressed/captured/reflected/brought out} by this formulation of the rule.

一方、補部にCPのみを取る動詞は、受動文にしても文主語は許されない。

(28) a. Most baseball fans {hoped/felt/wished/insisted/reasoned} that the Giants would win the World Series.

b. *Most baseball fans {hoped/felt/wished/insisted/reasoned} that.

c. *That the Giants would win the World Series was {hoped/felt/wished/insisted/reasoned} (by most baseball fans).

つまり、受動文の文主語は、目的語にDPを取る場合に限り許されるのは、文主語は左周辺部に基底生成されるが、下位の構造では、名詞要素である空演算子が移動していることになる。このように、文主語はCPであるが元々の位置はDPしか生じない位置から移動したというカテゴリーのミスマッチが説明できる。

次にこの分析の問題点を見ていこう。文主語構文と話題化構文との平行性には反例があることが指摘されている (Delahunty(1983), Davies and Dubinsky (2001)等)。

まず、文主語構文においてもSAIが許される場合がある[4]。

(29) a. To what extent did [that Fred failed to show up] anger those of his

devoted fans who had waited by the stage door since dawn the previous day?

b. Why does [that Fred wants to marry her] so upset Mary's mother, father, brothers, sisters and four grandparents that they haven't ceased to harangue her about it since they discovered the proposal?

c. Who does [that Fred left early] bother so greatly that he refuses to visit us any more?

d. Does that [Fred lied to them] bother all of the people who bought stock in this company?

次に、文主語と話題化要素が共起する場合がある。

(30) ??[Ted], [that John's a fool] bothers to no end, not Horatio.

最後に、従属節、特に小節において、文主語を容認する話者がいる。

(31) a. I found [that no one left such a boring party early] remarkable.

b. I thought [that no one would leave such a boring party early] unlikely.

このように話題化構文との平行性のデータには文法性の揺れがある。これは、談話的、文体的な要因、文処理など様々な要因が関係しているように思われる[5]。

トピック分析におけるAlrengaの一般化に関する解決策では、空演算子がDP的な要素と仮定し、文主語構文に、空演算子移動が関与すると説明していた。しかしながら、空演算子が関与する構文は、理論的な前提にもよるが、名詞に限定されるわけではない。(32a)のような分裂文（cleft sentences）において、(32b)のように空演算子移動が関与し、焦点位置にある前置詞句と関連づける分析がある。

(32) a. It is in the garden that Mary kicked John.

b. It is in the garden [Op_1 [Mary kicked John t_1].

3. 代案

DP シェル分析とトピック分析のそれぞれの問題点の解決策を提案する。まず、文主語の統語位置としては、主語の生起する TP 指定部にある場合とトピックが生じる位置にある場合があるとする。つまり、文主語が生起する統語的な位置は構造的に曖昧であるとする。ここでは、左周辺部の句構造を採用し、文主語の構造上の曖昧性を説明したい。文主語はこの構造では TopP または FinP 内部にあるとする[6]。

(33) $[_{ForceP}$ Force $[_{Foc\,P}$ Focus $[_{TopP}$ Topic $[_{FinP}$ Fin $[_{SubjP}$ Subj $[_{VP}$ ....]]]]]

文主語の統語位置が決まるのは、様々な要因が絡んでいて、構造的に上記のように曖昧であるとする。これは、文主語以外の主語についても SAI を許さないことがあるので、DP 主語も構造的に曖昧であると言える。

(34) *Who did $[_{DP}$ the fact that John left early] disappoint?

本稿では、文主語の範疇は、Davies and Dubinsky (2001)等に従い、DP とする。

(35) $[_{DP}$ $[_{D}$ φ]$[_{CP}$ That Shelby lost it]] is true. (=(10))

その理由としては、セクション 1 で見たように、文主語には、名詞的な特性が見られるという経験的な事実と、Alrenga の一般化が容易に捉えられるという理論的な理由に加えて、Roussou (1981)が指摘しているように、現代ギリシャ語などの言語では文主語の前に決定詞（determiner）が生じる点が挙げられる。

(36) $[_{DP}$ to $[_{CP}$ oti ethis filus]] simeni pola.
The that have-2SG friends-ACC mean-3SG much
"That you have friends means a lot."

さらに、文主語はトピックであるという主張は、英語の文主語は談話機能的に古い（discourse-old、familiar）情報を担う要素であるというHaegeman (nd)の観察とも合致する[7]。

次に、なぜ文主語のみがCPの上位に空のDPが生じるのかという点については、通常のCPの左周辺部に生じる機能範疇がφ素性を持ち、unvaluedであるとする[8, 9]。

(37) [$_{XP}$ φ[… that …]]

T との Agree によりφ素性が valued になり、DP 的な要素になると仮定する[10]。

(8) ― (11) の一連の例が示すように、文主語には名詞的な特性が見られるが、一方、目的語位置に生じる文には名詞的な特性がない。これは、目的語位置に生じる CP は T との Agree 関係が必要なく、そのため、目的語位置の CP の左周辺部にφ素性が生じる必要がないためと考える。また、ギリシャ語と英語の文主語の違いは、ギリシャ語では CP の左周辺部にある D が音声的に具現化するが、一方、英語では音声的に具現化しないというように説明できる。

文主語のトピック性は、Miyagawa(2010)のメカニズムに従い、[-Foc]（トピック素性）がDPに自由に付与されるとする[11]。[-Foc]が付与された要素は、主語または上位のTopPに義務的に移動し、Criterionを満たす[12]。

では、本稿の提案はどのように文主語に関連した事例を予測するかを見て行こう。まず、(38) の例を考えてみよう。(38)は、CPを補部として取る要素ではない。

(38) a. *This formulation of the rule {expresses/captures/reflects/brings out} [that the nouns behave differently].

b. *John didn't think of that he might be wrong.

本稿の提案では、CPが空のDを持つにはAgree関係が必要であるとしたが、(38)ではAgreeがそもそも関係ない。そのため、CPの上位にDPシェルができない。よって、[-Foc]が付与されることはなく、Criterionを満たす必要もなく、CPの移動が駆動されない。したがって、CPが排除される位置に留まることになる。このように、本稿の提案は、（38）の例が非文であると正しく予測する。

一方、名詞が認可される位置から CP が移動する(39)のような例は次のように説明できる。この CP は、T により Agree 関係が成立し、CP の左周辺部の φ 素性が valued となり、DP シェルができる。したがって、[-Foc]が付与され、適切な位置に移動することが可能となり、結果的に、Criterion を満たすことになる。

(39) [That the nouns behave differently] is{expressed/captured/reflected/brought out} by this formulation of the rule.

(39)のような例は、元位置がDPを認可する位置であるが、移動した要素がCPというカテゴリーのミスマッチも、Agree によってCPの左周辺部のφ素性がvaluedとなり、CPにDPシェルができているために移動元も移動した要素もどちらもDPであると説明できる。

次に、話題化によってCPが主語よりも前に移動している（40）の例について考えてみよう。

(40) [That he might be wrong], he didn't think *(of).

この場合、トピック位置にあるCと主節のTとのAgree関係は関与しない。しかしながら、Chomsky(2001)等に従い、移動の前提としてprobe-goalの関係でAgree関係が成立するとgoalの移動が可能となると仮定する。このように仮定すると、話題化が起こる前にprobeとgoalの間にAgree関係が成立し、文主語と同様、トピックのCPの左周辺部のφ素性がvaluedとな

り、範疇がDP的になる。したがって、[-Foc] の付与が可能となり、トピック位置へと移動することが可能になる。

4. 結語

本稿では、文主語について DP シェル分析とトピック分析の二つの主要な先行研究の比較検討を行った。ミニマリスト・プログラムや左周辺部の構造分析の枠組みを採用し、文主語の範疇については、Agree が重要な働きをしており、Agree 関係が成立する主語位置やトピック位置に生じる場合に限り DP シェルができると仮定した。統語位置に関しては、トピックと主語が生じる位置にあるとする提案を行った。これらの提案により Alrenga の一般化も容易に捉えられることを示した。

しかしながら、次のように文を目的語に取る動詞を受動文にすると非文になる。この事実は、本稿の提案では説明できない。

(41) a. Theodore held [that chimp was immortal].

b. *[That chimp was immortal] was held by Theodore.

(42) a. She {felt/found/heard }[that the chimp was intelligent].

b. *[That the chimp was intelligent] was{felt/found/heard}by Stan.

この点については、Agree以外にCPのトピック性を保証する[-Foc]素性付与を制限する条件を仮定する必要があると思われるが、この可能性は今後の研究課題としたい[13]。

参考文献

Alrenga, P. 2005. A sentential subject asymmetry in English and its implications for complement selection. *Syntax* 8, 175–207.

Chomsky, N. 2000. Minimalist inquiries, the framework. In R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka (eds.) *Step by Step*. 89-156. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, N. 2001. Derivation by phase. In M.Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*. 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, N. 2007. Approaching UG from below. In U. Sauerland and H. Gartner (eds.) *Interface + Recursion = Language?* 1-31. Berlin: Mouton de Gruyter.

Chomsky, N. 2008. On phases. In R. Freidin, C.P. Oero, and M. L. Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*. 133-166. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Davies, W. and S. Dubinsky. 2001. Functional architecture and the distribution of subject properties. In W. Davies and S. Dubinsky (eds.) *Objects and Other Subjects*. 247-279. Dordrecht: Kluwer.

Davies, W. and S. Dubinsky. 2003. On extraction from NPs. *NLLT* 21, 1-37.

Davies, W. and S. Dubinsky. 2010. On the existence (and distribution) of sentential subjects. In D. B. Gerdts, *et al.* (eds.), *Hypothesis A/hypothesis B: Linguistic Explorations in Honor of David M. Perlmutter*. 111-128. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Delahunty, G. 1983. But sentential subjects do exist. *Linguistic Analysis* 12, 379–398.

Haegemann, L. Locality and the distribution of main clause phenomena. Ms. Ghent University.

Han, H. 2005. A DP/NP-shell for subject CPs. *BLS* 31, 133-143.

Kim, S. 2011. Movement paradoxes are not paradoxes: A raising approach. *Lingua* 121, 1009-1041.

Koster, J. 1978. Why subject sentences don't exist. In S. J. Keyser (ed.) *Recent Transformational Studies in European Languages*. 53-64. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Miyagawa, S. 2010. *Why Agree? Why Move? Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Postal, P. 2004. *Skeptical Linguistic Essays*. New York, NY: Oxford University Press.

Rizzi, L. 1997. The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (ed.), *Elements of Grammar. A Handbook in Generative Syntax*. 281–337. Dordrecht: Kluwer.

Rizzi, L. and U. Slosnky. 2007. Strategies for subject extraction. In U. Sauerland and H. Gartner (eds.) *Interface + Recursion = Language?* 115-160. Berlin: Mouton de Gruyter.

Roussou, A. 1991. Nominalized clauses in the syntax of Modern Greek. *UCLWPL*3, 77-100.

Stowell, T. 1981. Origins of phrase structure. Ph.D. dissertation. MIT.

Takahashi, S. 2010. The hidden side of clausal complements. *NLLT* 28, 343-380.

---

*本研究は平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：22520506 研究課題名　左周辺部構造と主語の特異性に関する統語研究　代表者　福田稔）の援助を受けている。また、本稿は第 27 回甲南英文学会・ワークショップ「主語をめぐって」（平成 23 年 7 月 2 日）において発表した原稿に加筆修正したものである。

註

1 この点については Davies and Dubinsky (2003)では、　主語と T の間に一致が生じるためには、文主語には照合される D 素性がなければならないとしている。また主語に限り CP に DP シェルが生じるのは、目的語位置の CP には emphatic reflexive や equally などを認可しないという文主語とは異なる統語特性が観察されるという点で経験的に支持される。しかし、目的語と主語では、CP に DP シェルが生じるか否かの違いを原理的に説明する必要がある。話題化により CP が文頭に移動する場合においても（i）にあるように DP シェルができなければならないが、Davies and Dubinsky(2003)の分析では不明である。セクション 3 で代案を提示する。

i)　That he might be wrong, he didn't think *(of).

2 Case Resistance Principle は次のように定義される。

i) Case Resistance Principle (CRP)
Case must not be assigned to a category bearing Case-assigning feature, i.e., the feature [-N].

[3] Koster(1978)では、文主語は、主節の最上位に e という節点に支配された satellite という位置にあり、構造上最も高い位置とされている。

[4] さらに、Han(2005) によると、(ia) は方言では容認可能としている。また、否定疑問文にすると文法的となるということ、間接疑問文を主語にすることも可能ということを指摘している。

i) a. *Is [that he is a doctor] surprising?
b. Isn't [that he is a doctor] surprising?
c. Was [who was invited] ever decided?

[5] ここでは様々な要因は扱わない。文主語についての容認可能性の揺れについては、Davies and Dubinsky (2010)を参照のこと。

[6] ここでの左周辺部の構造は、Rizzi and Shlonsky (2007)に倣っている。

[7] Aboutness については、ここでは除外しておく。

[8] 左周辺部の Force である可能性が高いと思われる。Kim (2011)によると、トピックになり得る要素は、名詞的であり、指示的（referential）であるが、命題的でない要素であるとしている。

[9] この仮定が正しいとすると、AP や PP が主語位置に生じることができるので、AP や PP にも左周辺部の機能範疇があり、これらの範疇の上に DP シェルが形成されることになる。この可能性は今後の研究課題とし、本稿ではこれ以上議論しないことにする。

[10] ここでの goal が unvalued であるという考え方は通常の probe-goal の仮定では probe の方が unvalued であるということであるので、厳密に言えば一般的なミニマリストプログラムの考え方とは異なる立場を取っていることになる。

[11] より正確には、ここでは、DP は、通常の DP に加えて、本稿で仮定したように、CP の左周辺部の主要部で、unvalued な ϕ 素性を持つ機能範疇のことも指す。後者の場合、CP の左周辺部の要素が Agree により valued になり、DP シェルができ、名詞的な要素になると仮定している。

[12] TOP の下位の範疇である Fin においても[-Foc]素性を持つ要素は認可されると仮定する必要がある。これは、TOP から Fin へと素性の継承が起こると仮定する。Chomsky(2007), Rizzi and Shlonsky (2007), Kim(2011)等においても本来の位置よりも下位の位置にある要素が Criterion を満たすことが提案されている。

[13] 対象の文の左周辺部の値が文主語になり得る CP とは異なると捉え、このタイプの動詞はそのようなタイプの CP を取る可能性がある。通常の CP とこのタイプの補文の違いについては、Kim(2011)が議論している。詳しくは、

Kim (2011)を参照のこと。

属格名詞と DP からの移動

福田　稔

SYNOPSIS

The present paper, on the basis of the pure derivational theory proposed by Stroik (2009), argues that the impossibility of movement out of definite DPs is explicable on the following two assumptions: (i) the Spec of the DPs is occupied by an empty operator, and (ii) the structural positions of genitive nouns in DP differ with respect to their grammatical functions. These assumptions also help resolve other unsolved empirical problems with previous analyses. One of the implications of the proposed analysis is that the cumulative effects of ungrammaticality induced by crossing more than one barrier, which Chomsky's (1995) Minimalist Program does not deal with, could be derivationally accounted for if the number of violations of Stroik's (2009) SURVIVE Principle is taken into account.

1. はじめに

Stroik (2009: 74)は純粋な派生理論の枠組みで、多重 wh 構文の元位置にある wh 要素 whom が[REF/WH]という指示依存素性(referentiality dependent feature)を担うか否かという相違により(1)と(2)の文法性の違いを説明している。

(1)　Who took a picture of whom

(2)　a.　*Who took the picture of whom

b. *Who took a certain picture of whom

しかし、多重 wh 構文でない場合、Stroik (2009)の分析は wh 要素が顕在的に移動できないという事例(3)を説明することができない。また、Takano (1990)が指摘した(4)と(5)の文法性の差も捉えられない[1]。

(3) *Who did you take the picture of?

(4) ?? *What* did you sell Mary's picture of *t* ? （主格属格の解釈[2]）

(5) * *What* did you sell Mary's picture of *t* ? （所有属格の解釈[3]）

そこで本稿では、次の２つの独立した仮説により上記の事実が説明できると提案する。第一に、Campbell (1996)や宗正(2010)が提案するように、DP の種類に応じてその内部に空演算子が生成される場合があると仮定する[4]。第二に、福田(2011)の提案に従い、DP に生じる属格名詞の解釈に応じて、その属格名詞の DP での統語位置が異なると仮定する。

次の節で Stroik (2009)の移動分析を概観し、DP からの移動に関する経験的な問題を指摘する。第３節で Takano (1990)の DP 内部の属格名詞の分析を検討し、問題点を指摘する。そして、主語として解釈される属格名詞と所有者として解釈される属格名詞の構造位置に関する福田(2011)の分析を提示する。第４節で Melvold (1991)と宗正(2010)が提案を概観する。第５節では第２節と第３節で指摘する問題を解決する。最後に本稿での主張をまとめ、Chomsky (1986)が指摘した移動違反の累積効果に関する帰結について触れる。

2. 純粋な派生理論での分析と問題

Brody (2002: 22-23)は派生と表示の両者を持つ理論(mixed theory)には余剰性があるので受け入れられないと論じている[5]。さらに、純粋な派生理論(pure derivational theory)では人間言語が持つ（長距離）移

動の特性(displacement property)が捉えられないとして、究極的には純粋な表示理論(pure representational theory)が最善の理論(optimal theory)であると結論づけている。

しかし、Stroik (2009)は、純粋な表示理論は適格でない表示を全て処理せざるを得ず、天文学的な負担が生じるという問題を指摘し、次の２つの仮説を組み込むことにより、純粋な派生理論こそが最善の理論であると反論している。まず、純粋な派生理論であっても従来の移動という概念に依らずに移動現象が説明可能であり、また、Frampton and Gutmann (2002) の crash-proof syntax を取り入れて適格な表示しか導かない仕組みにすることで不要な処理負担の問題を回避することも可能である。

具体的には、Stroik (2009: 45)は(6)の SURVIVE Principle を提案して、人間言語の移動という特性を局所移動の繰り返し操作と見なすことで説明している。

(6) If Y is an SO in an XP headed by X and Y has an unchecked feature incompatible with (i.e., cannot potentially be checked by) the features of X, Y must Remerge from the WorkBench with the next head Z that c-commands XP.

これによると、要素は実際に移動しておらず、語彙算出表(numeration)や（派生の段階で既に構築された）統語物(syntactic object)から成る WorkBench から語彙項目あるいは統語物を複写(copy)し再併合(Remerge)する操作の繰り返しであると Stroik (2009)は仮定する。つまり、移動現象は要素が移動しているように見えるだけで、実際の移動は生じていないのである。

WorkBench の要素の素性は全てが照合されない限り、派生された表示はインターフェースに送られないので音声解釈も意味解釈も受け

ることがない[6]。例えば、wh 要素の場合、以下の素性が関わることになる。

(7) a. Moving wh-elements have the [OP] feature, while in-situ-*wh*-elements do not have it.

b. Argument wh-elements have the [REF] feature, while non-arguments wh-elements do not have it.

c. Argument in-situ-wh-elements depend on the [REF] feature of moving wh-elements with respect to their referentiality, and thus have the referentiality dependent feature [REF/WH].

全ての wh 要素は[WH]素性を担っているが、さらに次のような下位素性を持つことがある。まず、(7a)に記したように WorkBench の wh 要素が[OP]素性を持つと、顕在的に移動して同じ素性を持つ主要部と照合される[7]。しかし、元位置に留まる wh 要素には[OP]素性はない。次に、(7b)に記したように項となる wh 要素と付加詞として機能する非項の wh 要素との違いであるが、前者は[REF]素性を持つが後者は[REF]素性を欠く。もし、項となる wh 要素が元位置に留まる場合は、(7c)に記したように指示性に関して顕在的に移動している wh 要素の[REF]素性に依存するので、これを表すために[REF/WH]素性を持つ[8]。

ここで、(1)と(2)の違いを検討してみよう。(1)と(2)の目的語 DP の派生の途中の段階をそれぞれ(8)と(9)に示した。

(8) [whom [a picture of whom]]

(9) a. [whom [the picture of whom]]

b. [whom [a certain picture of whom]]

定決定詞 the と a certain は[REF]素性を持ち、不定決定詞 a は[REF]素性を欠くという仮定のもとで(1)と(2)の違いは次のように説明される。まず、(8)では、元位置にある whom は(7c)に示したように[REF/WH]

素性を持つが、不定決定詞 a はこれを照合する素性を欠くので、(6)の SURVIVE Principle の適用を受けて、whom は DP を抜け出てさらに上位へ移動する[9]。これに対して、(9)では the と a certain は[REF]素性を持つのが、これと whom の[REF/WH]素性は相容れない(incompatible)ことはないので、SURVIVE Principle は適用しない。その結果、whom の移動はこの段階で止まることになる[10]。

しかし、Stroik (2009)の提案は多重 wh 構文においては成立するが、(3)のような通常の単一の wh 要素が顕在的に移動している事例の非文法性を説明することはできない（(3)を再掲した)。

(3) *Who did you take the picture of?

(7c)からわかるように、顕在的に移動している wh 要素は[REF/WH]素性を持たないので、who は the の[REF]素性に依存しない。よって、DP の指定部に留まることなく、who は[OP]素性を主節 CP の主要部 C に照合してもらうまで SURVIVE Principle によって移動することになる。その結果、(3)は誤って適格と判断される。また、同様の理由で(4)と(5)も誤って適格と判断されるし、Takano (1990)が指摘した属格名詞の解釈に対応した文法性の差異も説明できない。

3. 属格名詞の統語位置

3.1 Takano (1990)の分析

Quirk et al. (1985: 321-322)は、主に意味を根拠にして属格を 8 種類に分類している。さらに Declerck (1991: 253)は(18)と(19)の 2 種類を認めている。

(10) 所有属格 (possessive genitive) : Mrs Johnson's passport (Mrs Johnson has a passport.)

(11) 主格属格 (subjective genitive) : the boy's application (The boy

applied for ...)

(12) 目的格属格 (objective genitive) : the family's support ((...) supports the family.)

(13) 起源の属格 (genitive of origin) : the girl's story (The girl told a story.)

(14) 記述属格 (descriptive genitive) : a women's college (a college for women)

(15) 度量属格 (genitive of measure) : ten days' absence (The absence lasted ten days.)

(16) 帰属属格 (genitive of attribute) : the victim's courage (The victim had courage. / The victim was courageous.)

(17) 部分属格 (partitive genitive) : the baby's eyes (The baby has (blue) eyes.)

(18) 時間名詞属格 (genitivized temporal nouns) : today's event

(19) 場所名詞属格 (genitivized place names) : Liverpool's history

Takano (1990)は、(10)の所有属格と(11)の主格属格には以下のような統語的な相違があると提案している。

(20) 主格属格

a. John's speeches

b. $[_{DP}$ $[_{IP}$ $[_{DP}$ John$]$ I $[_{NP}$ speeches$]]]$

(21) 所有属格

a. John's cat

b. $[_{DP}$ $[_{IP}$ $[_{PP}$ e $[_{DP}$ John$]]$ $[_{IP}$ t I $[_{NP}$ cat$]]]$

派生名詞 (examination, speech など) や絵画名詞 (book, picture など) には節に対応する解釈が可能であるが、本来的な名詞 (cat など) は

項構造を欠き、そのような解釈は得られない(有村・その他 (2009: 10))。(20)に示したように、Takano (1990)は主格属格名詞はDP内部のIP指定部にあるので主語の解釈が得られると説明している。一方、(20)に示したように所有属格の場合は、DP内部のIP指定部に空の前置詞が主要部であるPPが生成され、後に話題化（topicalization）を受けてIP付加するとTakano (1990)は提案している。これによって例えば以下の事実が説明可能となる。

(22) PRO解釈 (Roeper (1983), Takano (1990))

a. *John's* speeches *PRO* to win the election

b. * *John's* cat *PRO* to anger his aunt

(23) 代名詞同一指示 (Takano (1990))

a. * *John's* examination of *him*

b. *John's* book about *him*

(24) 条件C効果 (Lasnik (1989), Takano (1990))

John's picture of *John*

まず、(22)から(24)の事実を確認しておこう。(22a)は「(ジョンが)選挙に勝つためにジョンが行った演説」という意味の主格属格の事例で、(22b)は「叔母を怒らせるためのジョンが飼っている猫」という意味の所有属格の事例であるが、後者は非文法的である。また、(23)ではJohnとhimの同一指示のもとでの文法性が判断されている。(23a)は「ジョンが彼を診察したこと」という主格属格の事例であり、(23b)は「ジョンが持っている彼についての本」という所有属格の事例であるが、前者では同一指示の解釈ができない。(24)でもJohnとJohnとの同一指示の可能性が判断されている。この例のJohn'sを所有属格として「ジョンが持っているジョンの絵」と解釈することは可能だが、「ジョンが描いたジョンの絵」という解釈は容認されない。

上述の事実は、Takano (1990)が提案した(20)と(21)の構造によって次のように説明される。(22a)ではJohn'sがPROをC統御するが、(22b)ではJohn'sはPPの補部であるためにPROをC統御できないので、文法性の差が生じる。代名詞の束縛については、(23a)ではJohnがhimをC統御するので束縛原理の条件Bに違反するが、(23b)ではJohnがPP内部にあるためにhimをC統御しないので条件Bの違反は生じない。最後に条件C効果であるが、(24)ではJohn'sが所有者の解釈の時にはJohnはPP内部にあるので束縛原理の条件Cに違反しない。しかし、主語解釈ではJohnは右側のJohnをC統御するので束縛原理の条件Cに違反する。

(4)と(5)の文法性の差について、Takano (1990)はChomsky (1986)の障壁理論を仮定して、(4)では1つの強い障壁と1つの弱い障壁を越えているが(5)では2つの強い障壁を越えていることから、(4)の方が(5)より若干良くなっていると論じている。

さて、Takano (1990)の分析は与えられたデータを一貫して説明するという点では優れているが、特に(21)の構造分析に関して以下のような問題が生じる。まず、第一に、言語獲得に関する問題である。大人の文法では、PPがNを前置修飾する事例は稀にしかない。しかも、Takano (1990)の分析では主要部Pが音声的に空であるので、そのようなPPが前置修飾することを子どもはどのように獲得するのかという疑問が生じる。また、そのPPが話題化を受ける理由も不明である。ここで移動を仮定することなく、属格名詞が話題となる分析も可能であることに注意されたい。例えば、DP内部にTopic Phraseを仮定し、その指定部にPPを生成するという分析も可能である。PPの移動分析をとるからにはなぜ移動が生じるのか、独立した根拠を示す必要がある。さもないと、障壁理論で(5)の非文法性を説明するために移動分

析を仮定したに過ぎないということになってしまう。

最後に、Takano (1990)は時間名詞属格についても(25)の構造分析をしている。

(25) a. yesterday's lecture

b. [$_{DP}$ [$_{IP}$ [$_{PP}$ e [$_{DP}$ yesterday]] [$_{IP}$ *t* I [NP lecture]]]

(25a)の yesterday's lecture には、Anderson (1979)や Takano (1990)が指摘するように、「昨日のために予定されていた講演」(the lecture scheduled for yesterday)という解釈がある。しかし、英語のネイティブスピーカーによると「昨日誰かが行った講演」(the lecture someone delivered yesterday)という解釈も可能である。しかしながら、(25b)では IP 指定部に PP の痕跡があり、この解釈を捉えることができない。

3.2 代案

ここでは福田(2011)での提案を概観する。Aboh et al. (2010)は、名詞句構造は節構造と同じような階層構造があると仮定し、名詞句には談話が関係する投射領域があることを前提として、Rizzi (1997)の左周辺構造の分析が適用できると論じている。具体的には、節構造であれ名詞句構造であれ(26)の三層を成していることになる。これを節構造と名詞句構造に適用するとそれぞれ(27)と(28)のようになる。

(26) [$_{\text{[Discourse-linked features]}}$ … [$_{\text{[inflectional/agreement features]}}$ … [$_{\text{[core predicate and its arguments]}}$ …]]]

(27) [$_{CP}$ … [$_{TP}$ … [$_{vP}$ VP]]]

(28) [$_{KP}$ … [$_{DP}$ … [$_{nP}$ NP]]]

本稿では、(28)の構造分析をもとにして(20)の主格属格と(21)の所有属格の構造位置についての仮説を提案する。まず、既に考察したように、派生名詞や絵画名詞には述語としての解釈が可能であるので、こ

れらの名詞がNPの主要部Nである場合に主格属格名詞が生起することが可能となる。その派生は、例えば(28)で主格属格名詞は nP で生成され主題役割が与えられて、それから属格照合のために DP 指定部に移動すると仮定する。この点では Takano (1990)の提案に対応する分析となる。しかし、cat などの本来的な名詞は項構造を欠くので、NP の主要部 N となるが、主題役割の付与が関わる nP は存在しないか不活性となる。つまり、所有属格名詞が nP で生成されて DP 指定部に移動することはないので、所有属格名詞は非項として生成される。当然のことながら主格属格の解釈は得られない。この場合、Stroik (2009)の純粋な派生理論のもとで、所有属格名詞は K の投射に WorkBench から複写され併合されると仮定する。K の投射は(29)に示した Rizzi (1997)の節構造の左周辺部に対応し、所有属格名詞は話題か下位話題の指定部に生起すると仮定する[11]。

(29)

ForceP —	TopP —	FocP —	TopP —	FinP —	IP —	VP
force	topic	focus	topic	finiteness	inflection	
(発話)力	話題	焦点	下位話題	定形節	屈折	

第二の仮説は属格'sの構造的な位置である。福田(2011)の提案を受けて、(30)の主格属格'sは投射を成しておらず、属格の音声具現形として生起していると仮定する。これに対して、(31)の所有属格'sは投射を成していると仮定する。

(30) 主格属格

a. John's speeches

b. [$_{KP}$ [$_{DP}$ *John's* [$_{nP}$ *t* [$_{NP}$ speeches]]]

(31) 所有属格

a. John's cat

b. [$_{KP}$ [[John [s]] [$_{DP}$ [$_{NP}$ cat]]]

上記の提案のもとで(22)から(24)の事実は次のように説明される。まず、(22a)と(22b)の違いは、属格'sが投射するか否かの違いによって説明可能である。(30)に示したように、主格属格の場合は属格'sが投射しないのでJohnがPROをC統御して、「ジョンが選挙に勝つためにジョンが行った演説」という解釈が得られる。しかし、(22b)は(31)に示したように、Johnは属格'sの投射内にあるためにPROをC統御できないので、「ジョンが叔母を怒らせるためのジョンが飼っている猫」という解釈は得られない。次に、(23)であるが、(23a)ではJohnがhimを束縛する解釈は成立しない。これは(30)に対応する主格属格の事例であり、JohnがhimをC統御するので束縛条件Bのために同一指示の解釈ができないからである。一方、(23b)ではJohnがhimを束縛する解釈が成立する。これは(31)に対応する所有属格の事例なので、Johnは属格'sの投射にありJohnがhimをC統御しないためである。最後に、(24)が「ジョンが持っているジョンの絵」という解釈の場合は(31)に対応する所有属格の事例となり、JohnがJohnをC統御しないので束縛条件Cの違反が生じない。これに対して、「ジョンが描いたジョンの絵」という解釈の場合は(30)に対応する主格属格の事例となり、JohnがJohnをC統御するので束縛条件Cの違反が生じる。よって、(24)は2つのJohnに同一指示解釈が成立するとき必ず所有属格の解釈になるのである。

次に、Takano (1990)が検討した時間名詞属格の事例(25a)を再検討してみよう。この事例には「昨日のために予定されていた講演」という解釈だけでなく、「昨日誰かが行った講演」という解釈もあることを既に指摘した。後者の解釈はTakano (1990)の(25b)の構造分析で捉え

ることはできない。しかし、福田(2011)は、派生名詞 lecture は項構造を持つが、時間名詞属格 yesterday's は項ではないので(32)に示したようにDPに付加した付加詞であると提案している。

(32) [$_{KP}$ [$_{DP}$ [[yesterday][s]] [$_{DP}$ PRO [$_{D'}$ D [$_{nP}$ lecture]]]]]

また、Takano (1990)の分析と異なり、yesterday は DP 指定部に生起してないため、DP 指定部に講演を行う人に対応する項 PRO が生じることが可能となり、「昨日誰かが行った講演」という解釈が得られることになる[12]。

第4節と第5節では移動現象との関係を上述の提案をもとにして説明する。

4. 空演算子分析

一般に叙実的（factive）述語が従える補文からの移動はできない。

(33) a. John regrets that he fired Mary.

b. * *Who* does John regret that he fired *t* ?

この事実を Melvold (1991)は補文 CP の指定部に空演算子を仮定し、これが wh 要素の移動を阻止するという提案をした[13]。

(34) a. John regrets [$_{CP}$ OP that [$_{TP}$ he fired Mary]].

b. **Who* does John regret [$_{CP}$ OP that [$_{TP}$ he fired *t*]]?

(Melvold (1991))

Stroik (2009)が提案した純粋な派生理論のもとでは、Melvold (1991)の提案は以下のように組み込むことができる。まず、(35a)の段階で、wh 要素 who は[OP, WH]という素性を担っているので、顕在的に移動することになる。さらに派生が進み、補文の構造が(35c)のように派生される。ここで、CP 指定部に OP があるので、その主要部 C も[OP]素性を担っていると考えられる。既に触れたように、Stroik (2009)の

枠組みでは素性は削除されない。よって、wh 要素 who が補文から移動するとき(35d)の段階が得られる。C の[OP]は削除されず残っているが、これは who の[OP]と相容れない(incompatible)ことはない。よって、SURVIVE Principle は発動されず、 who はこの位置に留まる。その結果、主節 CP の主要部 C の[OP]は照合されないので、この派生はインターフェースに送られない。

(35) a. [$_{TP}$ he fired who]

b. [$_{CP}$ that [$_{TP}$ he fired who]]

c. [$_{CP}$ OP [that [$_{TP}$ he fired who]]]

d. [$_{CP}$ who [OP [that [$_{TP}$ he fired who]]]]

上述した、叙実的述語が取る補文に空演算子を仮定する Melvold (1991)の分析を、宗正(2010)は DP に適用し、(i) DP に CP があり、(ii) CP の指定部にある空演算子が DP からの移動を阻止していると論じている[14]。この仮説によると、(36)では wh 要素が CP 指定部を経由して DP から移動できるが、(37)では CP の指定部にあるにある空演算子 OP が移動を阻止することになる。

(36) a. What did you sell a picture of?

b. *what* did you sell [$_{CP}$ *t'* [a picture of *t*]]

(37) a. * Who did you take the picture of? (=(3))

b. *who* did you take [$_{CP}$ OP [the picture of *t*]]

次節では、(36)や(37)の分析の基本的な考えを純粋な派生理論に取り入れることができると論じる。

5 純粋な派生理論による分析

この節では、まず Campbell (1996)や宗正(2010)の提案を採用することで、純粋な派生理論のもとで(36a)と(37a)(=(3))の文法性の違いが説

明できることを示し、さらに(30)と(31)の属格名詞の構造位置を仮定することで(4)と(5)の文法性の差が説明できると論じる。

5.1 不定名詞句と定名詞句

まず、不定名詞句からの移動が可能である事例(36a)の派生を検討してみよう。(35)の説明で仮定したように、wh 要素 what は[OP, WH]という素性を担うと仮定する。また、注 14 で触れたように、(38c)の KP は宗正(2010)の DP 内部の CP に対応している[15]。(38d)に示したように、主節 CP 指定部に到達するまで、素性[OP]あるいは[WH]を持つ主要部がないので SURVIVE Principle の適用を受けて移動し続ける。

(38) a. $[_{nP}$ a picture of what]

b. $[_{DP}$ what [D $[_{nP}$ a picture of what]]]

c. $[_{KP}$ what [K $[_{DP}$ what [D $[_{nP}$ a picture of what]]]]]

d. $[_{CP}$ what [C $[_{TP}$ ... $[_{KP}$ what [K $[_{DP}$ what [D $[_{nP}$ a picture of what]]]]]]]]

定名詞句の場合(37a)(=(3))は(39)のような派生となる。(35)で補文 CP の主要部 C が[OP]素性を持っていると仮定したのと同じように、KP の主要部 K が[OP]素性を持っていると仮定する。すると、この K が wh 要素 what を照合してしまうために、これ以上 SURVIVE Principle の適用を受けず、(39d)の段階で派生が止まることになる。その結果、WorkBench にある主節 CP の主要部 C の[OP]素性が照合されず、インターフェースに送られることはない。

(39) a. $[_{nP}$ picture of what]

b. $[_{DP}$ what $[[_{D}$ the] $[_{nP}$ picture of what]]]

c. $[_{KP}$ OP [K $[_{DP}$ what $[[_{D}$ the] $[_{nP}$ picture of what]]]]]

d. $[_{KP}$ what $[_{KP}$ OP [K $[_{DP}$ what $[[_{D}$ the] $[_{nP}$ picture of what]]]]]]

5.2 移動と属格名詞句

この節では、(4)と(5)を派生する過程で、WorkBenchにある主節CPの主要部Cの[OP]素性が照合されず、派生がインターフェースに送られることはないので、両者はそもそも派生されない構文であることを示す。それにも関わらず(4)と(5)に文法性の差があるのは、SURVIVE Principleに違反する移動の回数の違いによると論じる。

まず、主格属格の場合(4)の派生は(40)のようになる。(39)との違いは、DPの指定部が主格属格名詞で占められているため、(40b)の段階でwh要素whatはDPに付加する形となる。whatの素性は照合されないので、Kが導入されるとSURVIVE Principleによって上位へ移動する。(40d)の段階でwhatの[OP]素性が照合されるので、この段階でwhatは留まることになる。(39)の場合と同じく、WorkBenchにある主節CPの主要部Cの[OP]素性が照合されず、派生がインターフェースに送られることはない。もし、(4)を派生するため無理にwhatをKPから抜き出そうとすると、SURVIVE Principleに1度違反することに注意されたい。

(40) a. [$_{\mathrm{DP}}$ Mary's D [$_{\mathrm{nP}}$ picture of what]]
b. [$_{\mathrm{DP}}$ what [$_{\mathrm{DP}}$ Mary's D [$_{\mathrm{nP}}$ picture of what]]]
c. [$_{\mathrm{KP}}$ OP [K [$_{\mathrm{DP}}$ what [$_{\mathrm{DP}}$ Mary's D [$_{\mathrm{nP}}$ picture of what]]]]]
d. [$_{\mathrm{KP}}$ what [$_{\mathrm{KP}}$ OP [K [$_{\mathrm{DP}}$ what [$_{\mathrm{DP}}$ Mary's D [$_{\mathrm{nP}}$ picture of what]]]]]]

次に、所有属格の場合(5)の派生は(41)のようになる。ここで(41b)から(41c)への派生に注意されたい。福田(2011)は、所有属格名詞がDP内部での話題を表す要素である可能性を示唆している。したがって、K_1は[TOP]素性を担っていると考えられる。また、(42)に示したようにStroik (2009: 91)は顕在的に移動するwh要素が[TOP]素性を担

う可能性を述べているが、これは[TOP]素性が[OP]素性と相容れない(incompatible)わけではないことを示唆している。したがって、SURVIVE Principleは発動されず、whatはこの位置に留まることになる。したがって、WorkBenchにある主節CPの主要部Cの[OP]素性が照合されず、派生がインターフェースに送られないので(5)は派生されない[16]。

(41) a. [$_{DP}$ PRO [$_{nP}$ picture of what]]
b. [$_{KP}$ Mary's [K_1 [$_{DP}$ PRO [$_{nP}$ picture of what]]]]
c. [$_{KP}$ what [Mary's [K_1 [$_{DP}$ PRO [$_{nP}$ picture of what]]]]]
d. [$_{KP}$ K_2 [$_{KP}$ what [Mary's [K_1 [$_{DP}$ PRO [$_{nP}$ picture of what]]]]]]
e. [$_{KP}$ OP [K_2 [$_{KP}$ what [Mary's [K_1 [$_{DP}$ PRO [$_{nP}$ picture of what]]]]]]]
f. [$_{KP}$ what [OP [K_2 [$_{KP}$ what [Mary's [K_1 [$_{DP}$ PRO [$_{nP}$ picture of what]]]]]]]]

(42) "However, if the wh-operator has a TOP(icalization) feature (which forces the wh-operator to remerge in a TOP to have its topicalization feature checked), then it can license a PG (see (108))." (Stroik (2009: 91))

(41e)の段階でK_2が導入されて、OPの[OP]素性が照合されても、K_2の[OP]素性は削除されずに残ることになる。もし、無理にwhatを移動させて、K_2に再併合(Remerge)させるとSURVIVE Principleの違反が1回生じる。(5)を派生するためwhatをK_2Pから無理に抜き出すと、SURVIVE Principleにもう1度違反する。

上記の分析から、(4)と(5)は派生の過程でWorkBenchにある主節の主要部Cの[OP]素性が照合されず、派生がインターフェースに送られることはないので、両者とも派生されない構文であることがわかる。

また、(4)を無理に派生するため KP から wh 要素を抜き出す際には、SURVIVE Principle に１回違反するのに対して、(5)を無理に派生するためは SURVIVE Principle に２回違反する必要がある。このことから、(4)と(5)に文法性の差は SURVIVE Principle の違反回数の違いによると考えられる。

5. まとめと帰結

Stroik (2009)が提唱している純粋な派生理論において、DP の種類に応じてその内部に空演算子が生成される場合があり、また、DP に生じる属格名詞の解釈に応じてその属格名詞の DP での統語位置が異なるという仮説に基づいて、DP からの移動可能性が説明できること論じた。

帰結の１つとして Chomsky (1986)が指摘した非文法性の累積効果の説明がある。例えば、Chomsky (1986: 38)は(43)を例示して、移動の障壁を越える場合、そのような移動の回数が多くなると文法性も下がると論じている[17]。

(43) what did you wonder [$_{CP'}$ who [$_{VP'}$ knew [$_{CP}$ who [$_{VP}$ saw t]]]]

上記の例では、下の who を what が越える時は１つの障壁(barrier)しか越えておらず、左側の who を越える時も１つの障壁しか越えていないので、Chomsky (1986)の障壁理論の予測として、(43)はさほど悪くない文法性を示すはずである。しかし、実際には(43)の文法性は１つの障壁を越える事例よりかなり低い。つまり、障壁を越える回数が増えることで非文法性も増していくという累積効果が生じるのである。

本稿での(4)と(5)の分析では SURVIVE Principle の違反回数に応じて非文法性が下がることを示唆したが、この分析は(43)のような事例にも適用することができる。(43)では wh 島が２つあるために、それ

ぞれの島を越える度に SURVIVE Principle の違反が生じ、違反回数は合計２となる。一方、１つの wh 島を越す移動の場合は、既に検討した(34b)の OP を wh 要素に置き換えることでわかるが、このような場合は SURVIVE Principle が発動されないのに無理に wh 要素を１回移動させている。つまり、SURVIVE Principle の違反回数に着目すれば、１つの障壁を越える事例より２つの障壁を越える事例の方が低いという、Chomsky (1986)が考察した累積効果を捉えることが可能となる。

このような累積効果の事例は Chomsky (1995)のミニマリスト・プログラムでは扱われていないが、本稿の分析では、SURVIVE Principle に違反した無理な移動の回数が計算されて、それに応じて文法性が下がるという説明が可能となる。

参照文献

Aboh, Enoch O., Norbert Corver, Marina Dyakonova, and Marjo van Koppen (2010) "DP-internal information structure: Some introductory remarks," *Lingua* 120, 782-801.

Amano, Masachiyo (2003) "On the Textual Function of the Possessor in English Genitive Expressions," *SITES* 1, 185-200.

Anderson, Mona (1979) *Noun Phrase Structure*, Doctoral dissertation, University of Connecticut. (Distributed by Indiana University Linguistics Club)

有村兼彬・他 (2009)『英語学へのファーストステップ（改訂版）』英宝社, 東京.

Brody, Michael (2002) "On the Status of Representations and Derivations," *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, ed. by Samuel David Epstein and T. Daniel Seely, 19-41, Blackwell, Oxford.

Campbell, Richard (1996) "Specificity Operators in SpecDP," *Studia Linguistica* 50,

161-188.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, ed. by Adriana Belletti, 104–131, Oxford University Press, Oxford.

Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.

Frampton, John and Sam Gutmann (2002) "Crash-Proof Syntax," *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, ed. by Samuel David Epstein and T. Daniel Seely, 90–105, Blackwell, Oxford.

福田 稔 (2011)「属格名詞の構造位置について」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 19 巻, 第 1 号, pp.155-172.

Lasnik, Howard (1989) *Essays on Anaphora*, Kluwer, Dordrecht.

Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move α*, MIT Press, Cambridge, MA.

Melvold, Janis (1991) "Factivity and Definiteness," *MIT Working Papers in Linguistics 15: More Papers on Wh-Movement*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Hamida. Demirdash, 97-117, MIT.

Müller, Gereon (2011) *Constraints on Displacement: A phase-based approach*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.

宗正佳啓 (2010)「名詞句からの Wh 移動」『福岡工業大学研究論集』 Vol.43, No.1, 21-26.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman (Pearson

Education Limited), London.

Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer, Dordrecht.

Roeper, Thomas (1983) "Implicit Arguments and Lexicon," ms., UMass.

Stowell, Timothy (1989) "Subjects, Specifiers, and X-bar Theory," *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, ed. by Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch, 232–262, University of Chicago Press, Chicago.

Stroik, Thomas (2009) *Locality in Minimalist Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

Takano, Yuji (1990) "DP-Internal Subjects," *English Linguistics* 7, 105-128.

本研究は平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：22520506 研究課題名　左周辺部構造と主語の特異性に関する統語研究　代表者　福田稔）の援助を受けている。また、本稿の第 5 節は、第 27 回甲南英文学会・ワークショップ「主語をめぐって」（平成 23 年 7 月 2 日）で発表した「DP 内部の属格主語の統語位置について」の第 4 節に基づいている。

[1] (4)と(5)の差については Stowell (1989)も参照のこと。なお、Takano (1990)は本稿の「主格属格」に対して Agr-Subject、「所有属格」に対して Poss-Subject という用語を用いている。Agr-Subject は目的語属格も含む場合があるが (Takano (1990: fn.6))、本稿では主格属格を代表例として検討する。
[2] 属格名詞 Mary's が主語のように解釈されるので、「君はメアリーが描いた誰の絵を売ったの？」という意味になる。
[3] 属格名詞 Mary's が picture の所有者のように解釈されるので、「君はメアリーが持っている誰の絵を売ったの？」という意味になる。
[4] 空演算子を事例では OP と表示する。
[5] Chomsky (1995)が提唱するミニマリスト・プログラムは派生と表示の両者を仮定するために余剰性がある。また、Brody (2002)の議論に関して、Müller (2011:74-76)は Chomsky (2001)の Phase Impenetrability Condition を擁護する立場を取るが、Stroik (2009:36-37)はこの条件の問題点を指摘している。
[6] インターフェースに送られる仕組みは Chomsky (2004)の転送(Transfer)という概念に対応する。
[7] ただし、Stroik (2009)の枠組みでは、素性の削除操作はなく、全ての素性

は構造構築に関わると仮定されている。

[8] ペアリスト解釈を得るためには、同じCの指定部で直接C統御されるという構造条件を満たさなければならないと Stroik (2009)は論じている。

[9] whom の音声解釈は元位置で行われるが、意味解釈は移動先で行われるので、LF まで動かないということはない。

[10] その結果、左端にある wh 要素 who との依存関係が成立せず、ペアリスト解釈が得られない。

[11] 属格名詞が話題という機能を担うという仮説に対しては、Amano (2003)が英字新聞記事を事例にして問題点を指摘している。属格属格が話題になるのなら、特定の記事の話題と、その記事に生じる属格名詞が一貫して同じであるという予測になる。しかし、実際にはそうなっていないことから、Amano (2003)はこの仮説を否定して、属格名詞はむしろ既知情報（known information）を担うと論じている 。しかしながら、一般に話題（topic）には談話話題（discourse topic）と文話題（sentence topic）の 2 つがあることに着目し、検討の余地は残されているものの、Amano (2003: 193)は所有属格が（名詞）句レベルでの話題になり得る可能性を示唆している 。

[12] この場合、yesterday は lecture が意味するイベントの時を表している。

[13] 紙面制約のために Melvold (1991)が提案した分析の詳細には触れない。

[14] 定の DP に空演算子を仮定する分析は Campbell (1996)も提案している。宗正(2010)の(i)の提案は、(30)と(31)に示したように、DP の最大投射を KP とする分析に対応している。

[15] Campbell (1996)の示唆に従い、不定冠詞 a は DP の主要部 D にあるのではなく NP にあると仮定する。

[16] Lasnik and Saito (1992)が考察したように、話題の島(topic island)からの wh 移動が阻止される事実はこの示唆に基づいて説明が可能となる。

[17] もっとも深い位置にある時制文(tensed IP)も障壁を成すので、(43)では合計 3 つの障壁を越した移動が生じていることを chomsky (1986:38)は示唆している。

削除現象の融合分析-態不一致現象を中心に

根之木　朋貴

Synopsis

Until now, the passive construction have been analyzed in various ways such as regarding a passive morpheme (*en*) as an usual argument originally suggested by Jaeggli(1986) and refined structure on the Voice Phrase clause(VoiceP) by Collins (2005).

But in this paper, rather than exploring normal passive structure above, we aim to focus on voice-mismatching phenomena in (1a) and (1b), account for why they are indicating ungrammatical and examine the appropriate derivation for these sentences syntactically.

(1) a. Active antecedent, passive ellipsis

*Some **brought roses**, but lilies were by others. <~~brought~~>

b. Passive antecedent, active ellipsis

*Roses **were brought by** some, but others did lilies. <~~bring~~>

As for the previous studies, we examine Johnson(2005), Merchant(2007), Gengel(2007) Tanaka(2011) Concretely, although Johnson (2005) suggest that only if light verb structures are formed, these structures can be deleted, assuming null projection (*pro*) theory we point out a kind of voice-mismatching structure can't be explained elegantly. Second, by examining Gengel (2007)'s analysis that combination of FocP with TopP can account for general phenomena of pseudogapping, we insist that his explanation could be limited to specific double object construction he is suggesting. Moreover Merchant's (2007) suggestion that voiceP's complex

structure can capture the voice-mismatching phenomena can't explain the similarity between usual VP-deletion and pseudogapping, which can be said to Tanaka's (2010) analysis. By and large, we conclude that although all of these analyses can capture the specific phenomena on their own, they could not capture the peculiarity of *by phrases*.

As an alternative to their proposals, we adopt the C-T *inheritance system* that bases the framework of Chomsky (2005a, 2006) by extending this system to the level of *Voice Phrases* (voiceP) for derivational process of (1a) and (1b) as shown in (2).

(2) a. *by-phrase formation*; $[_{PP}$ $[_{P'}$ by $][_{NP}$ others]]

b. *p*-Pinheritance*;$[_{p*P}$ by$[_{p*}\varphi_{[voice:pass]}[_{PP}$ other$[_{P'}t_{\varphi}[_{P}t_{by}$ t_{others}]…

c. *merger of v*P*; $[_{v*P}$ brought$_{[-case]}$ lilies $][_{p*P}$ by $[_{P*}\varphi[_{PP}$ others …

d. *VoiceP formation*; $[_{voiceP}$ $[_{v*P}$ lilies

$[_{v*}$ brought$_{[-case]}$ $t_{lilies}]][_{voice'}\varphi_{[voice:pass]}[_{p*P}$ by$[_{p*}\varphi[_{PP}$ …

e. *deletion*; lilies$_i$ were $[_{voiceP}$ $[_{v*P}$ t_i brought$_{[-case]}]$ $[_{voice'}\varphi_{[voice:pass]}$

$[_{p*P}$ by $[_{p*}\varphi[_{PP}$ …

In (2a-b), after *by phrases*(by others) merging with light verbs in (2c), *VoiceP* has formed to establish the passive structure in (2d) and voice feature of *by phrases* have already inherited to Tense feature (were). As a result, the fact that these features that had already checked off should not be remained and whole *VoiceP* must be deleted leads to the ungrammaticality of (1a-b).

0. 序

これまで、受動態の分析では Jaeggli (1986)の受動形態素(en)を項として用いる分析、Collins (2005)による態句(Voice Phrase)の構造を詳細化した分析など、様々な形で分析されてきた。本発表ではそれらの通常見られる受動態構造ではなく、主に(1a-b)に示されるような、先行文と削除文の受動態と能動態とで異なる態の不一致現象(voice mismatch phenomena)にみられる削除構

造がなぜ非文法性を示すのかに焦点を当て、その適切な派生体系を考察することを目的とする。

(1) a. Active antecedent, passive ellipsis

*Some **brought roses**, but lilies were by others.

<削除：~~**brought**~~>

b. Passive antecedent, active ellipsis

*Roses **were brought by** some, but others did lilies.

<削除：~~**bring**~~>

(Gengel 2007.280)

(1 a-b)のような動詞句削除、空所化をめぐる先行研究として Johnson (2005)は削除の対象になるには軽動詞(v*P)レベルを標的としなければならないとし、音韻投射(p-projection)上の削除過程を提案している。また、Gengel(2007)は擬似空所化一般を説明するために焦点化句(FocP)と話題化句(TopP)とを組み合わせた構造を用い、さらに束縛の事実を説明している。さらに Merchant(2007)は削除素性付与(e-GIVENness)の条件のもと E 素性が付与された句は削除の対象となるものと主張し構造上 E 素性は態句(VoiceP)を超えているため削除できないと仮定することで(1a-b)の非文法性を説明している。

本稿では(2)-(5)からの順に先行分析を概観し、それらの問題点を指摘していくことにする。

(2) Johnson (2004)の音韻投射分析

a. This$_i$ can [$_{VP}$ be *pro* [$_{VP}$ frozen t_i]]. → Please do <freeze this>.

b. This$_i$ can [$_{VP}$ freeze t_i]. → *Please do <freeze this>.

(3) Merchant (2007)の態句分析

[$_{TP}$ Some [$_{FocP}$ roses$_j$ [$_{Foc'}$ Foc[E] [$_{v*P[E]}$ bring$_i$ v[voi:act] [$_{VP}$ t_i t_j]]]]… [$_{TP}$ lilies$_i$ were [$_{FocP}$ lilies$_j$ ~~[$_{Foc'}$ Foc[E] [$_{v*P[E]}$ t_i v[voi:pass] [$_{VP}$ bring t_j]]~~]]]]

(4) Gengel (2007)の話題化&焦点化句分析

a. John read a book, and Heather _ a magazine.

b. …and [$_{TopP}$ Heather [$_{FocP}$ a magazine [$_{Foc'}$ [E] [$_{VP}$ $t_{Heather}$ [$_{V'}$ V ~~[$_{VP}$ read [a magazine]]]]]]~~

(5) Tanaka (2011)の F 束縛分析

a. Roses should have been [$_{VPA}$ brought roses] by somebody, but nobody did ~~[$_{VPE}$ bring roses]~~

b.*[$_{TPA}$ SOMEONE$_i$ brought roses],but we don't know by WHOM$_j$ [$_{TPE}$ ~~roses were brought <roses>t_j]~~.

本稿ではこれらの先行分析の問題として(2)のJohnson(2005)の問題点としては音韻投射分析では態不一致現象を説明できず、(3)のMerchant(2007)の態句分析では態不一致現象と動詞句削除を区分できない点を指摘する。さらにGengel(2007)の問題点としては話題化&焦点化句分析で空所化現象を説明できない点、最後に(5)のTanaka(2011)の問題点としてはF束縛だけでは一般的な動詞句削除と空所化の事実を捉えきれない側面がある点を指摘する。

上記の問題点を解決するために本稿では(6a-e)で示すようにChomsky (2005a, 2006)の C から T への継承体系(inheritance system)の考えを見直し、さらに by 句による *p**P 継承体系分析へと拡張することで受動態構造とその削除過程が説明できることを提案する。

(6) 態不一致現象の継承体系分析

a. *by-phrase formation*; [$_{PP}$ [$_{P'}$ by][$_{NP}$ others]]

b. *p*-P inheritance*; [$_{p*P}$ by [$_{p*}\varphi_{[voice:pass]}$ [$_{PP}$ other [$_{P'}$ t_{φ}[$_{P}$ t_{by} t_{others}]]]]]

c. *Merger of v*P*; [$_{v*P}$ brought$_{[-case]}$ lilies][$_{p*P}$ by [$_{P*}\varphi$[$_{PP}$ others …

d. *VoiceP formation*;[$_{voiceP}$[$_{v*P}$lilies [$_{v*}$ brought$_{[-case]}$ t_{lilies}]][$_{voice'}\varphi_{[voice:pass]}$[$_{p*P}$ by [$_{p*}\varphi$[$_{PP}$ …

e. *Deletion*; lilies$_i$ were~~[$_{voiceP}$ [$_{v*P}$ t_i brought$_{[-case]}$]~~][$_{voice'}\varphi_{[voice:pass]}$ [$_{p*P}$ by [$_{p*}\varphi$[$_{PP}$ others …

(6a)で形成された by 句は(6b)で示すよう通常の軽前置詞句と同様の形成過程を経て(6c)で示すように軽動詞と併合する。次に受動態構造を形成すべく(6d)で態句(VoiceP)が形成され(6e)のような削除は素性照合を完全に経ているにも関わらず態句全体の削除がなされていないため結果的に(1a)は非文法的となる。なお、(1b)にも同様の派生を展開し非文法的な文として排除する。

また、最後に本稿の分析は、Arrege(2010)、Camacho(2002)らの提案する分離疑問文の派生、名詞類のone置換における削除体系の振る舞いの違いを分析する際にも拡張できるか、その可能性を検証する。

1. 態不一致現象とは

本節では前提として態不一致現象とは何かを検証する。(7)をみよう。

(7) Passive antecedent, active ellipsis

a. This problem was to have been looked into, but obviously nobody did. <削除：~~look into this problem~~>

b. The system can be used by anyone who wants to. <削除：~~use it~~>

(7a-b)は先行節が受動態であり、後半の削除節が能動態(passive antecedent, active ellipsis)となりその削除形が許容される点に注意したい。次に(8a-b)を見よう。

(8) Active antecedent, passive ellipsis

a. Actually, I have implemented it [a computer system] with a manager, but it doesn't have to be. <削除：~~implemented with a manager~~>

b. The janitor must remove the trash whenever it is apparent that it should be. <削除：~~removed~~> ((7)-(8)Merchant2007.170-171)

(8a-b)はいずれも先行節が能動態であり、後半の削除節が受動態(active antecedent, passive ellipsis)であるがやはりその削除形が許容される。では、次に非文法的な文として排除される態不一致現象とはどのようなものか、(9a-d)と(10a-d)を概観する。

(9) Case1; Passive antecedent, active ellipsis

a. *Roses were brought by some, and others did lilies. <削除：~~bring~~>

b. *Klimt is admired by Abby more than anyone does Klee. <削除：~~admire~~>

c. *Hundertwasser's ideas are respected by architects more than most people do his work. <削除：~~respect~~>

d. *More people were invited to Beth's reception by her mother than Beth herself did to her wedding! <削除:~~invite~~>

(10) Case2;Active antecedent, passive ellipsis

a. *Some brought roses, and lilies were by others. <削除：~~bought~~>

b. *Abby admires Klimt more than he is by anyone else. <削除：~~admired~~>

c. *Laypeople respect Hundertwasser's work more than his ideas are by architects. <削除：~~respected~~>

d. *Beth's mother invited more people to her wedding than were by Beth herself! <削除：~~invited~~> (Merchant 2007: 170-171)

(9a-d)においては先行節が受動態であり、削除節が能動態であるが、逆に(10a-d)では先行節が能動態、削除節が受動態となっているが全て態不一致現象が生じても文法的な(7)(8)とは異なり、非文法的な文としてみなされる点に注意したい。

以下、先行節が受動態であり、削除節が能動態である(9)をcase(1)、先行節が能動態、削除節が受動態(10)をcase(2)と呼称しそれぞれの文の適切な派生体系とは何かを考察したい。

1.1 音韻投射分析 - Johnson (2004)

本節では音韻投射分析の名の元動詞句全体が削除できるかどうかの決定する要因となるのは削除分布を説明できる空範疇を含んだ述部の存在であると主張している Johnson (2004)を概観する。Johnson による(11)をみよう。

(11) a. This can be frozen. Please do <~~freeze this~~>.

b. This can freeze. * Please do <~~freeze this~~>.

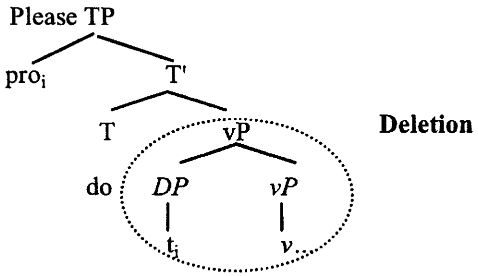
(Johnson 2004.7)

(11a-b)にみられる態代替に関してJohnson は他動詞と自動詞の代替とを比較しているが、まず(11a)では先行節が受動態であるのに対して削除節は能動形であるという態不一致が生じているにも関わらず文法的であるのに対して、逆に(11b)においては 先行節が能動形であるのと同様に削除節も能動態の様相、態一致を示しているが文法的である。この現象に関するJohnsonによる(11a)の削除文の構造は(12)である。

(12) a. This$_i$ can [$_{vP}$ be *pro* [$_{VP}$ frozen t_i]].

b. *This$_i$ can [$_{VP}$ freeze t_i]. (Johnson 2004.6)

(13)



(Johnson 2004.7)

(11a)の先行節構造である(12a)では全体が軽動詞句(vP)まで投射されてその軽動詞指定部に行為者の θ-role を持つ pro が生起していることに注意したい。次に (11b)の非文法的な先行節構造(12b)では pro はなく軽動詞句より小さい動詞句構造を仮定している。これらを踏まえ削除節構造(13)を検証するとここでも行為者 θ-role を持つ pro が設定されていることが分かる。このように Johnson ではまず先行節と削除節との態不一致現象に関しては先行節と削除節の範疇に注目し、先行節で動詞より大きい軽動詞句レベルにまで形成されていれば、態の(不)一致に関係なく次節の削除が可能であるとし、逆に動詞句レベルにまでに

しか形成されていない場合は態が一致しようとも次節の削除が不可能であると述べている。

次にこの分析は態不一致現象を説明できるか検証する。Gengel(2007)が提示する(14)をみよう。

(14) a. The system can be used by anyone who wants to. <~~use it~~>

b. Actually, I have implemented it [= a computer system] with a manager, but it doesn't have to be.

<~~implemented with a manager~~>

(Gengel 2007. 280)

(14a-b)からわかることは、いずれにおいても先行節の範疇は動詞句(be used by…, implemented it)である。そのため態不一致現象は関わりなく先行節も次節も軽動詞句を共有している。そのためこれらの表現の削除は可能であると結論付けられる。

1.1.1 Johnson (2004)の問題点

前節ではJohnson(2004)を通じ、先行節と削除節の範疇に注目し態不一致現象をも網羅できる点を概観した。本節ではこの分析が網羅できない点を指摘したい。Gengel(2007)の提示する(15a-b)をみよう。

(15) a. *Hundertwasser's ideas are respected by scholars more than most people do his actual work. <~~respect~~>

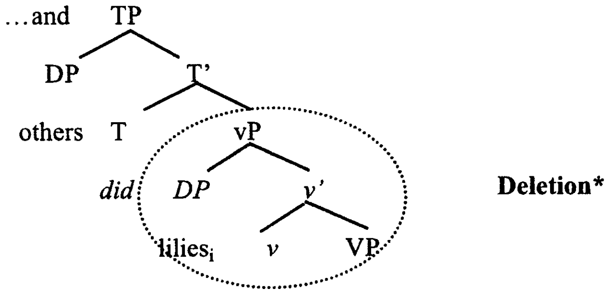
b. *Laypeople respect Hundertwasser's actual work more than his ideas are by scholars. <~~respected~~>

(Gengel 2007.280)

Johnson は先行節の範疇が軽動詞句である際に態不一致が生じても文法的であると主張しているが(15a-b)いずれの文でおいて

先行節も削除節も軽動詞句(are respected by..., respect Hundertwasser's actual work)がすでに形成されており削除前の段階では軽動詞句を共有できているはずだからである。そのため態不一致現象は関わりなく先行節も次節も軽動詞句を共有しているため削除可能であることが予測されるがいずれも非文法性を示している。ゆえに先行節の範疇と無関係に容認が不可能であるのは問題がありさらに主題である case(1)を対処できないのではないかという疑問が生じる。その証拠として Johnson の分析を case(1)に適用するとこうなるだろうと予測される(16)の構造を提示する。

(16) *Rose [$_{vP}$ were [$_{VP}$ brought by some]].



(16)の先行節は受動態であり、既に軽動詞を形成している。Johnson が正しければ削除節と同一性が確立され、case(1)にも対処できるはずではあるがにもかかわらず非文法的である。ゆえに、Johnson の考えは受動態と非対格の先行節に関してはうまく説明できるものの本稿で取り扱っている態不一致現象のみならず疑似空所化と動詞句削除体系という現象そのものを説明することが困難であると結論付けられよう。

1.2 焦点・態句構造分析- Merchant (2007)

次の先行分析としてMerchant(2007)を概観する。Merchantは態句構造と削除文との構造的位置関係を踏まえ、態不一致現象の非容認性を説明するため(17a-b)を掲げている。

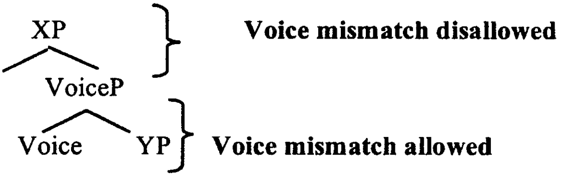
(17) a. VP ellipsis; This problem was to have been looked into, but nobody did.

b. pseudogapping; *Some bought roses, and lilies were by others.

(Merchant 2007.16)

では、(17a)の動詞句削除の容認可能性と(17b)の疑似空所化の容認可能性はどのようにして説明できるのだろうか。こうした態不一致現象の容認性一般を網羅するためにMerchantは前提として(18)の基本構造をあげている。

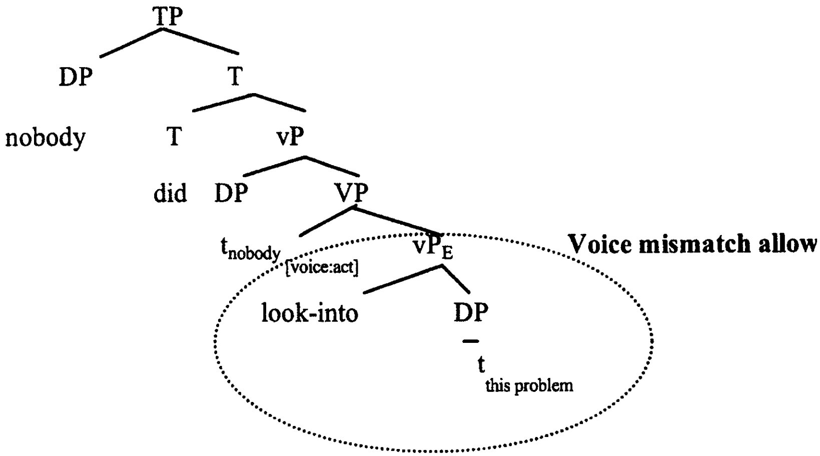
(18)



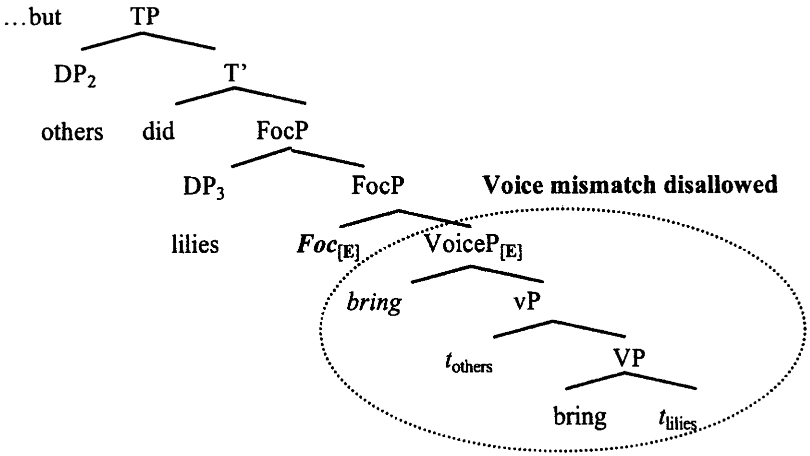
(Merchant 2007.15)

(18)が意味することは、ある表現が態句(voiceP)より上に位置する場合その E 素性を持つ句の削除は許容されず、態句より下位にある範疇であればその削除が許容されるという。では具体的にはどのような分析がなされるのか。(17a)の構造(19a)、(17b)の構造として(19b)を提示する。

(19) a. [This problem] was to have been [$_{VP}$ looked into $t_{this\ problem}$].



b. Roses were [$_{vP}$ t_{were} [$_{vP}$ brought][$_{PP}$ by some]]]



(Merchant 2007.16)

(19a-b)はいずれにおいても省略、削除される句にはE素性が与えられている事に注意したい。(19a)では態句(voiceP)より上に位置

する場合そのE素性を持つ句の削除は許容されず、逆に(19b)で態句より下位にある範疇であればその削除が許容され結果的に文法的である。[1] Merchantによる擬似空所化構造と動詞句削除構造との区分として基本構造(20)が考えられる。

(20) Merchant による動詞句削除と擬似空所化の構造

(a) VP ellipsis	(b) Pseudogapping
[$_{v*P}$ v* [~~$_{VP}$ V DP]~~]	[$_{XP}$ DP X [~~$_{v*P}$ v* [$_{VP}$ V t_{DP}]~~]]]

(Gallego2009.7)

(20)において、動詞句削除(a)は削除対象となる範疇 VP(動詞句)であるのに対して(b)の疑似空所化においては軽動詞句(v*P)となる点で区分される。[2] また目的語に位置する名詞句は XP 指定部となり、この位置は焦点句(FocP)あるいは軽動詞句指定部いずれかであると捉えられる。[3]

次節ではこの分析に関して 2 つの問題点を指摘する。

1.2.1 Merchant (2007)の問題点

本節ではMerchant(2007)の分析に関して2つの問題点があることを指摘する。最初の問題点として Gallego(2009)の指摘を概観したい。Gallego は Merchant 分析を批判的に検証し、以下で示す疑似空所化(21)と動詞句削除(22)には文法性において共通する点が多い点を指摘している。

(21) pseudogapping

a. *Roses were brought by some, and others did ~~bring~~ lilies.

b. *Some brought roses, and lilies were ~~brought~~ by others.

c. *Abby admires Klimt more than he is ~~admired~~ by anyone.

d. *Klimt is admired by Abby more than anyone does ~~admire~~ Klee.

(22) VP ellipsis

a. *Roses were brought by some, and others did ~~bring roses~~, too.

b. *Some brought roses, and lilies were ~~brought by others~~, too.

c. *Abby admires Klimt more than he is ~~admired by Abby~~.

d. *Klimt is admired by Abby more than anyone ~~does admire Klimt~~. ((21)-(22)Gallego 2009. 8-9)

Gallego は(21a-d)の動詞句削除、また(22a-d)の疑似空所化の文いずれも非文法的であり、派生過程を区分しておきながらこのように文法性に変化がなく最小ペアを作ることができない Merchant の分析には問題があると主張している。第二の問題点として(23a-b)をみよう。

(23) a. This problem was to have been looked into, but obviously nobody did.

b. ?My problem will be looked into by Tom, but he won't into yours. (Gallego 2009.9)

動詞句削除である(23a)と疑似空所化である(23b)はともに意味的には対応関係があり、さらにいずれにおいても完全に非文法的ではないことがわかる。やはり、ここでも Gallego は前節で(20)にみられるように複雑な派生過程を提示する空所化現象とそれと比較して単純な派生過程で生じる動詞句削除とを完全に区分している Merchant には問題があると結論付けている。

1.3 話題化＆焦点句分析- Gengel (2007)

次に三番目の先行研究としてGengel(2007)の分析を概観する。まずGengelはMerchant(2001)による焦点化素性付与(e-GIVENness)という概念を採用したうえで、さらに動詞句内部に話題化構造と焦点化構造とを組み合わせた態不一致現象に関して独自の理論を展開している。その前提となっている(24)のE素性付与とは何か概観する。

(24) E 素性付与(e-GIVENness)

a. An expression E counts as e-GIVEN iff E has a salient antecedent A and, modulo E-type shifting, (i) A entails F-clo(E), and (ii) E entails F-clo(A).

b. The whole XP is deleted at PF by the rule of [φvP]

→ ϕ /E ______ (Merchant 2001.26)

(24a)はもしもある表現 E に A という顕著な先行詞があれば、E 素性が与えられるものとして機能する。そして E タイプ代替を別にして A には E が含意され、E には A が同様に含意することになる。これにより、(24b)は [φ vP] という 規則 によって PF 上である範疇 XP が削除されることが可能になることを意味する。Gengel は空所化現象を説明するにあたってこの考えを前提にしている。

この点を踏まえ空所化構造と束縛の事実を踏まえた解釈関係を検証したい。(25)と(26)をみよう。

(25) a. *Few* cats eat Frolic or ~~few~~ dogs ~~eat~~ Whiskas.

b. **Few* cats eat Frolic or dogs eat Whiskas.

(26) a. It's not the case that many cats eat Frolic or many dogs eat Whiskas.

b. *Few* cats eat Frolic or *few* dogs eat Whiskas.

((25)-(26):Gengel 2007.276)

まずは few, eat などの表現が省略され、空所化された(25a)の解釈が成立するがそれに対応するのは(26a)となり、数量詞(few)が文全体を作用域にとる解釈が予測される。だが 2 番目の節にその数量詞が生起しない非文法的な(25b)は実際は(26a)にも対応せずまた(26b)の解釈が成立するには数量詞の顕在化が必要である。この事実から Gengel は空所化現象の有無によって解釈の上でも相違がみられ、構造の上でも両者を区分することが必要だと主張している。さらに否定表現を含んだ束縛の事実との関連で Gengel による空所化とは何か探りたい。(27)を提示する。

(27) a. No boy$_i$ joined the navy and his$_i$ mother ~~joined~~ the army.

b. *No boy$_i$ joined the navy and his$_i$ mother headed the army.

(Gengel 2007.275)

(27a)において先行節の主語の数量詞の作用域は次に来る節を超えていて、対照的に(27b)の 2 番目の節の代名詞(his)は空所化されない場合は束縛されないことを示している。このように Gengel は空所化構造と空所化しない構造とでは時制句まで形成されるか否かで違いがあるのだと主張している。では空所化現象に関しては具体的にどのような構造を仮定するのか(28)をあげて検証する。

(28) a. Claire read a book, and Heather a magazine.

b. *Claire$_i$ read a book, and she$_i$ a magazine.

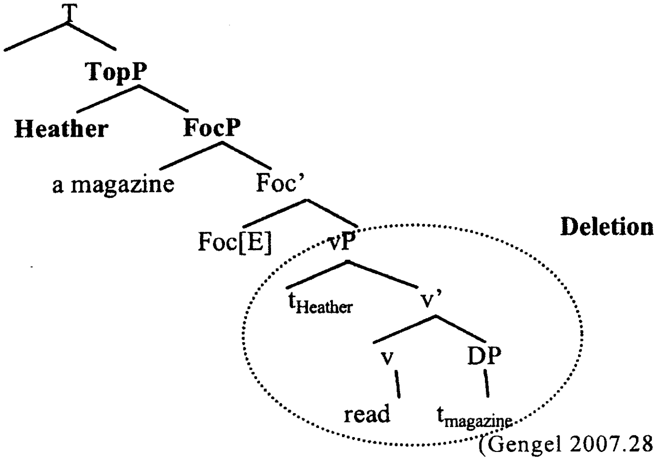
c. Claire$_i$ read a book, and SHE$_k$ a magazine.

(Gengel 2007.273-274)

(28a)の基本構造はどのようになるか説明すると、(28b)に見られるように先行節の名詞句(Claire)は次節の代名詞(she)を束縛し同一指標付けされていない事実を考慮し、次節の主語は時制節までは形成されていないと主張している。さらにこうした文の中で固有名詞と代名詞との同一指標付けが可能になるには、(28c)にみられるように次節の主語を話題化することによってのみ可能であるため文法的だと主張としている。こうした事実からGengelは空所化の場合時制節より下部位置に話題化句構造、さらにその下部に焦点化句構造を設定し、(29a)に対し(29b)の構造を仮定している。[4]

(29) a. John read a book, and Heather _ a magazine.

b. …



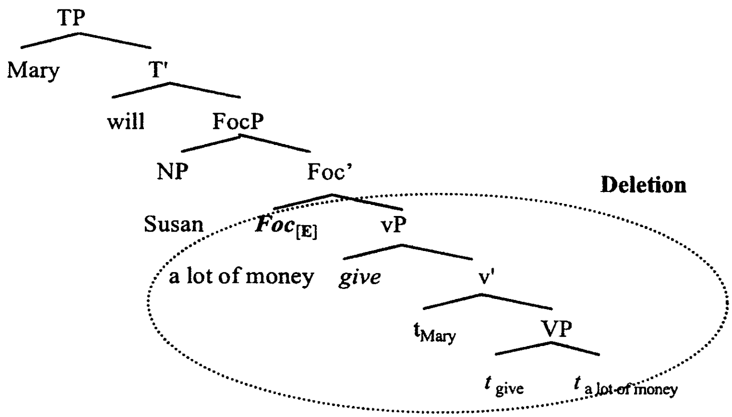
(Gengel 2007.281)

Gengelはまず(29a)で削除節の名詞句(a magazine)がMerchantの(24)のE素性付与が適用され焦点化をうけることを主張の根本としており、(29b)から分かるように削除文においては時制節より下部位置に焦点構造を仮定している。さらにもう一つの名詞句(Heather)に話題化が適用され、話題化句(Topic Phrase)を時制節より下に設定しているが、この(29b)の構造からは先行節の名詞句が次に来る節の名詞句を束縛し同一指標付けすることができない事実を示している。このようにGengelの構造は、動詞句の上方に焦点化と話題化といった情報構造があり、目的語が焦点化句指定部へ生起する間、主語位置はその真上にある話題化句主要部へ生起することとなり、焦点化句主要部にE素性が設定されているため軽動詞全体の削除が可能になるのである。

前節ではGengel(2007)では話題化句できる要素と焦点化できる要素との組み合わせが義務的なものとなり、話題化句を時制句より上のCP範囲内ではなく時制句より下方に設定する主張を概観してきたが本節ではこの分析の問題点を構造的側面に関して考察する。(30a)とその構造(30b)を提示する。

(30) a. ?John gave Bill a lot of money, and Mary will ~~gave~~ Susan ~~a lot of money~~.

b.

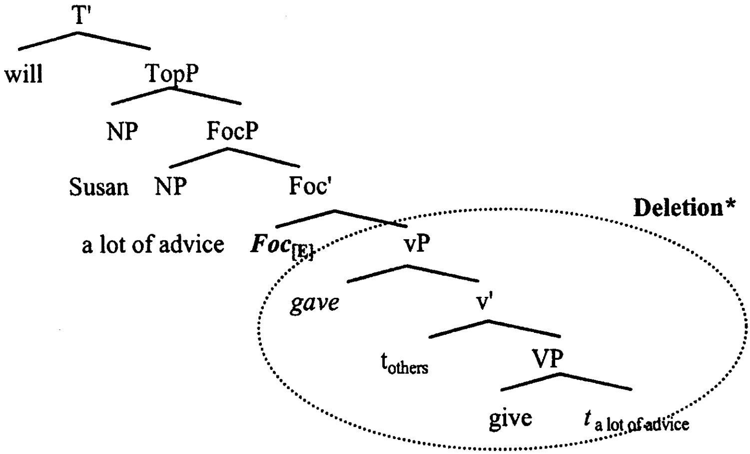


二重目的語構文(30a)は完全に非文法的ではないが、ここで注意するべき点はこの文の構造(30b)において焦点化句指定部位置に Susan が生起し、次の主語である Mary は助動詞(will)より上位になり時制句となりこの場合(27)のように話題化句が設定されていないことが分かる。これは話題化要素が想定される場合は時制句までは投射されないという Gengel の予測に符合するものである。

次に非文法的な(31a)とその構造である(31b)をみてみよう。

(31) a.*John gave Bill a lot of money, and Mary will ~~gave~~ Susan a lot of advice.

b.



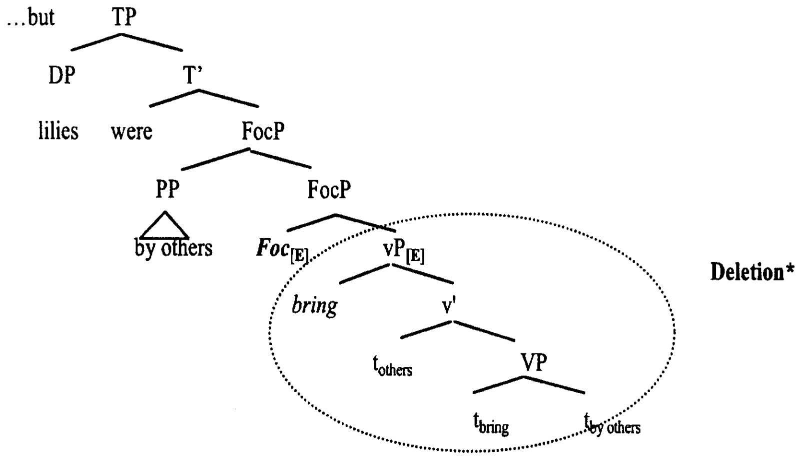
(31a)の非文法的な二重目的語構文の構造となる(31b)では、Gengel の分析上焦点化句に名詞句(a lot of advice)を置いて、さらにその上に話題化句主要部の位置に間接目的語(Susan)を生起させている。さらにここで注意したいのは話題化要素があるにもかかわらず時制句まで投射されてしまっているという Gengel の主張に反するものだという点である。よって Gengel の枠組みが正しいものだとするとこの文を非文法的なものとして排除できる。[5]

1.3.1 Gengel (2007)の問題点

前節では Gengel(2007)分析の考察のもと、二重目的語構文の空所化現象に対応可能であることをみてきた。では果たしてこの分析が本稿の主題である態不一致現象である(1)、(2)に対処できるのかどうか。(1)の構造として(32a)、(2)の構造として(32b)が考えられよう。

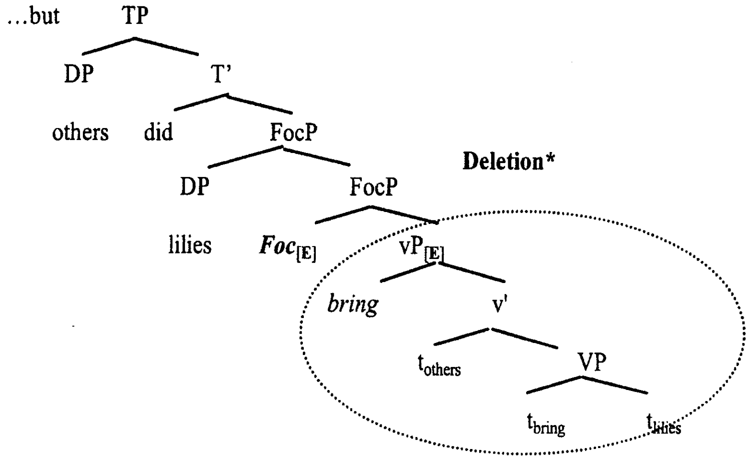
(32) a. case(1)

Some [$_{vP}$ brought] roses]]



b. case(2)

Roses were [$_{vP}$ t_{were} [$_{vP}$ brought][$_{PP}$ by some]]]



(32a)から分かる事として case(1)において前置詞句を焦点化位置に生起させることができるが、話題化句位置を設定していな

いのは時制節主要部(were)に既に時制が形成されている事に起因し(32b)と同じ様に考えられるため文法的である事が予測されるが、結果的には非文法的である。

また(32b)の case(2)においても同様に名詞句(lilies)を焦点化位置に生起させることができるが、話題化句位置を設定できないのはやはり既に時制節主要部(do)が形成されているからであると考えればこの文を排除できないはずであるにもかかわらず非文法的である。そうすると case(1)、case(2)いずれにおいても構造上は Gengel の分析は態不一致現象を充分には説明できないと結論付けられる。

1.4 F束縛分析- Tanaka (2011)

最後の先行分析として焦点化と F 束縛という概念とを関連付けて態不一致現象を分析した Tanaka(2011)を概観する。前提として彼の提示するF束縛とはどういうものか定義(33)を概観する。

(33) An expression is f-bound iff it is bound by a phrase (the f-binder) that reflexively dominates a focus phrase.

(34) a. SAM$_i$ [$_{XPA}$ t_i ate the beans], and SALLY$_i$ [$_{XPE}$ ~~t_j ate the beans~~], too.

b. I can tell you *which HOT beans*$_i$ [$_{XPA}$ Sam ate t_i], but I can't tell you *which COLD beans* $_j$ [$_{XPE}$ ~~Sam ate t_j~~].

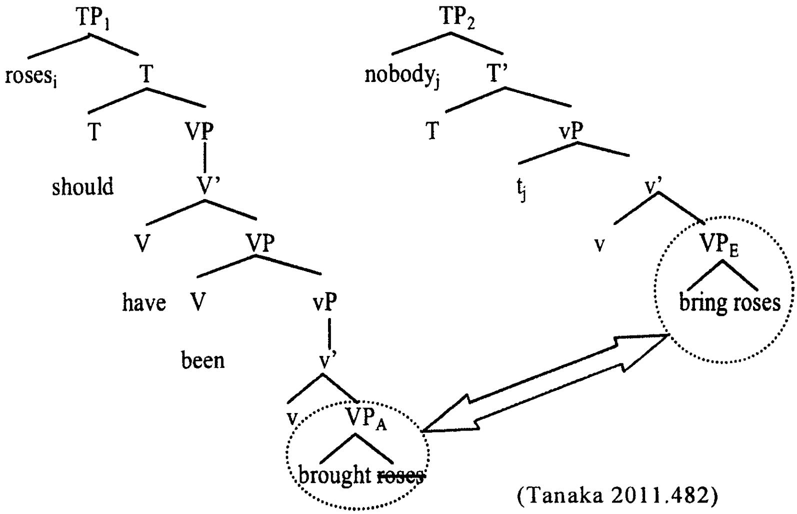
((33)-(34)Tanaka 2011.480)

(33)の定義はある表現が焦点化移動を通じて束縛ができる場合(以下、f 束縛と呼称する)そのひとつの焦点句を再帰的に支配するひとつの句(F 束縛子)によって支配されるときに限ることを述べている。次に(34a)において具体例を挙げて説明すると、焦

点化を受けた 2 つの句(SAM, SALLY)が F 束縛子として機能し後続するそれぞれの句(XP_A, XP_E)を F 束縛できるのだが、この事実は(34b)での WH 句(which HOT beans, which COLD beans)の移動に関しても同様で、後続するそれぞれの句(XP_A, XP_E)を F 束縛できる。さらにその句(XP_A, XP_E)は同一のものとみなされ、削除可能である。この考えを踏まえ態不一致現象(35a)がなぜ文法的であるか構造(35b)を用いて検証したい。

(35) a. Roses should have been [$_{VPA}$ brought roses] by somebody, but nobody did [~~bring roses~~].

b.



(Tanaka 2011.482)

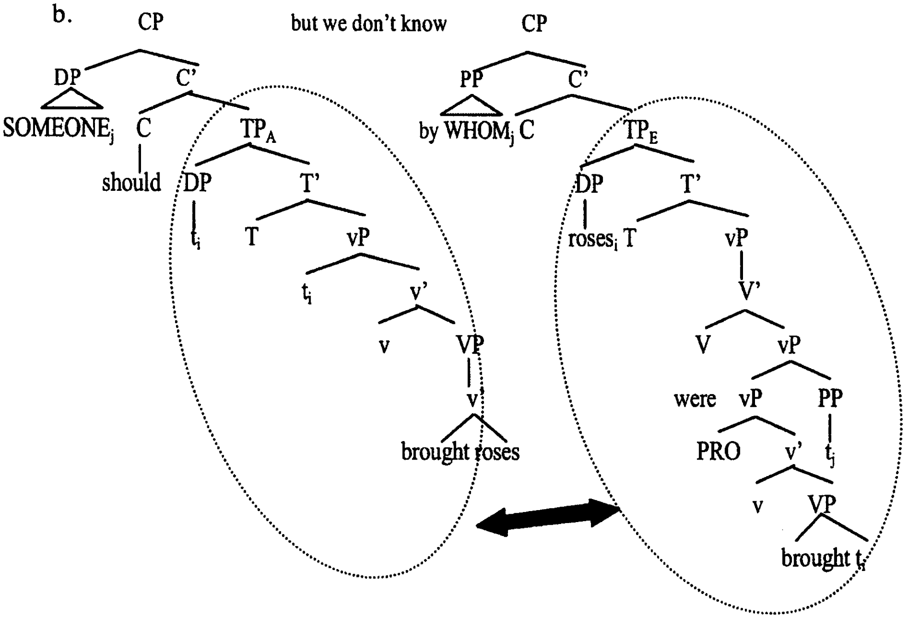
(35a)は態不一致が生じており、その構造(35b)からも明らかなように受動態文のTP 1 における先行詞(VP_A)には動詞目的語位置にはコピーが残されているためそのVP_Aと能動態である削除対象になる動詞(VP_E)とは同一の表現であるとみなされる。よって

削除節のVP_Eは省略が可能となる。では次に非文法生をもたらす(36a)に関してその内部構造(36b)を用いて検証したい。

(36) a.*[$_{TPA}$ SOMEONE $_i$ brought roses], but we don't know by

WHOM$_j$ [$_{TPE}$ ~~roses were brought <roses>t_j~~].

b.



(Tanaka 2011.486)

(36a)のsluicingが非文法的であるのは構造(36b)が示すように2つのTP(TP_AとTP_E)の構造に注目するべきである。先行詞(TP_A)と能動態である削除対象の動詞(TP_E)とでは焦点化により随伴される表現(SOMEONE$_j$, by WHOM$_j$)が異なるため、削除節のほうにはbe動詞が残るなど動詞句の構造だけでも違う事が分かる。よって先行節(TP_A)と削除節(TP_E)も違う構造として非文法的になる。

1. 4. 1 F束縛分析の問題点

本節では Tanaka の分析の問題点として 2 点取り上げる。まず一つ目として 1.1 において Johnson (2004)で説明されてきた動詞句削除の例を再度概観し、この考えだけでは説明しきれない点を指摘したい。再度(10)を提示する(ここでは(37)として再掲)。

(37) a. This can be frozen. Please do <~~freeze this~~>.

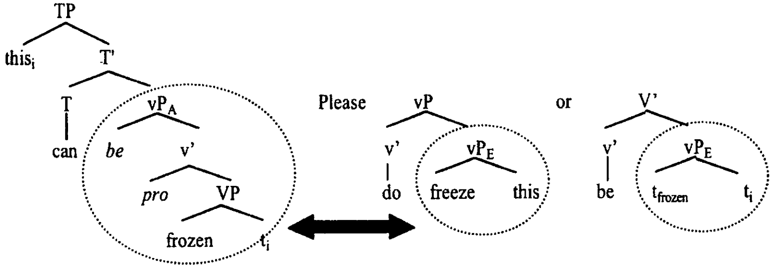
b. This can freeze. * Please do <~~freeze this~~>.

(Johnson 2004.7)

(37a-b)にみられる態代替は Johnson (2004)では態不一致現象に関しては先行節と削除節の範疇に注目し、先行節で動詞より大きい軽動詞句が形成されてさえいれば、態不一致に関係なく次節の削除が可能であるとし、逆に動詞句レベルにまでにしか形成されていない場合は態が一致しようとも次節の削除が不可能であると結論付けている。しかしながらも Tanaka(2011)ではこのような基本的な事実ですら説明できないことを証明する。

それでは(37a-b)を Tanaka の枠組みではどうなるか(38)をあげて検証する。(38)で注目すべき点は先行節と削除節との間の 2 つの動詞句 vP(vP_A と vP_E)との間に構造上の相違が見られる点である。

(38)



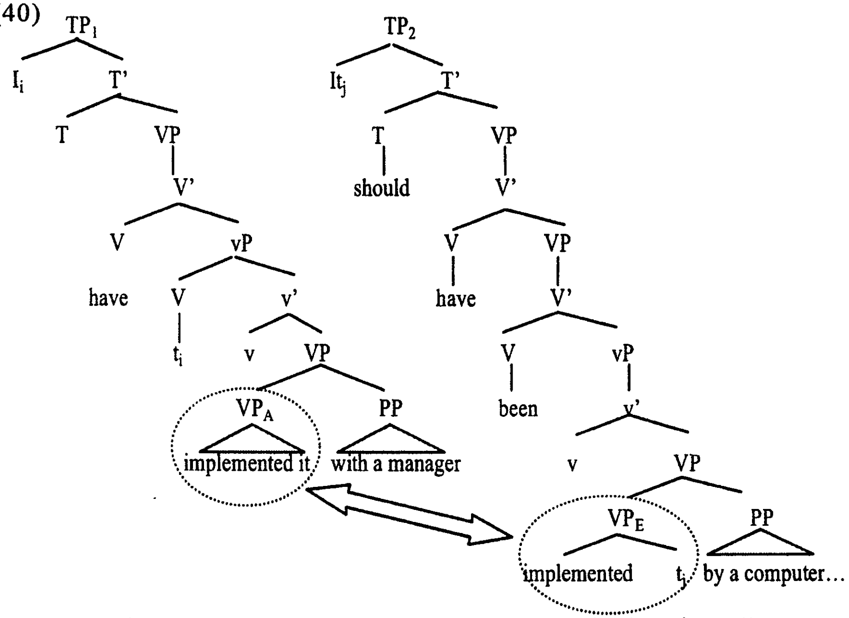
この場合Tanakaの分析では(36)のような場合、先行詞(vP_A)と削除対象の動詞(vP_E)とでは先行節のほうにはbe動詞が生起し pro が設定される軽動詞句構造、さらに削除節は動詞句となっているため、両者は違う構造として捉えられる。ゆえに非文法的としてみなされるはずであるが事実に反して文法的である。

次に二つ目の問題点を指摘する。

(39) a. ?Actually, I have implemented a computer system with a manager, but it doesn't have to be ~~implemented~~ by a computer technician.

b. Actually, I have implemented it with a manager, but it doesn't have to be.

(40)



(39a)から分かることは、先行する動詞(vPA)と削徐対象の動詞(vPA)は同一であるため、完全に非文法性を導かないと考えられ

る。しかしながら次に(39b)の事実からは(40)でわかるように、先節の動詞(vPA)と削徐対象の動詞(vPA)とでは同一の構造ではないにもかかわらず削除が可能でむしろ完全に文法的であるため(39a-b)を同一に扱おうとすると矛盾が生じる。よってこのような空所化にみられる態不一致現象はF束縛という考え方では網羅しきれない点が少なくない点は否定できない。

1.5 削除現象の盲点

これまで先行分析として Johnson(2004)、Gengel(2010)、Merchant (2007)、Tanaka(2011)を概観してきたが、これらの本節ではすべての分析の問題点を提示する。(41)と(42)をみよう。(下線部は筆者による。)

(41) (i) Case1; Passive antecedent, active ellipsis

a. *Roses were brought *by some*, and others did lilies.

b. *Klimt is admired *by Abby* more than anyone does Klee.

c. *Hundertwasser's ideas are respected *by architects* more than most people do his work.

(ii) Case1; Passive antecedent, active ellipsis

a. The system can be used by anyone who wants to.

b. This information could have been released by Gorbachev, but he chose not to.

c. This problem was to have been looked into, but obviously nobody did.

d. Some of us are retired, some want to, some don't want to and some cannot!

(Merchant 2007.3-4)

(42) (i) Case 2; Active antecedent, passive ellipsis

a. *Some brought roses, and lilies were *by others*.

b. *Abby admires Klimt more than he is *by anyone else*.

c. *Laypeople respect Hundertwasser's work more than his ideas are *by architects*.

d. *Beth's mother invited more people to her wedding than were *by Beth herself*!

(ii) Case (2) Active antecedent, passive ellipsis

a. The janitor must remove the trash whenever it is apparent that it should be.

b. Proposing to reduce their numbers to save money would be endangering them even more than they are.

c. Steve asked me to send the set by courier through my company insured, and it was.

d. "Nevertheless, I shouldn't have brought you into this." It seems I already am,

thought the piano tuner, but he was silent.

(Merchant 2007.170-171)

空所化の態不一致である(41(i)-a-c)と先行節で用いられる前置詞句として by 句が用いられているものに限り、また同じく空所化の(42(i)-a-d)から分かることは削除節において by 句が残留している場合は必ず非文法的であることがわかる。また動詞句削除の(41(ii)-a-d)と(42(ii)-a-d)から分かることは by 句が存在しようとも、さらには態不一致現象が生じていようとも文法的であることがわかる。つまり、ここで注目するべき点はいかにして態不一致と空所化、そして by 句という 3 つの組み合わせが

非文法的な文を生成してしまうかという点にあり、ここで態不一致現象という現象そのものというよりむしろ by 句を土台とした受動態構造上の派生の特殊性に注意するべきであることが予測されよう。そうすると Johnson(2004)、Gengel(2007)、Merchant (2007)、Tanaka(2011)の分析だけでなく by 句が用いられる全ての受動態構造分析にも言えることだが、by 句がいかなる過程を経て派生されるのかもう一度検討するべき余地がある。

1.6 削除体系をめぐって

これまでJohnson(2004)、Gengel(2007)、Merchant (2007)、Tanaka(2011)という削除分析をめぐって先行分析を概観し、これらの問題点を指摘してきたが、これらの先行分析の問題点は以下(43)に要約される。

(43) 削除体系分析をめぐって(要約)

	Johnson (2004)	Merchant(2007)	Gengel (2007)	Tanaka (2010)
Case(1)	*	○	*	○
Case(2)	OK	○	*	○
Pseudogapping	*	Too complex	○	*
VP deletion	OK	Too simple	○	*

(*＝説明不可、OK=説明可)

表(43)から分かる事として、Johnson (2004)では空範疇を用い、先行節において軽動詞句が形成されていれば、態不一致現象にかかわりなく削除が可能である。だが本稿の態不一致現象であるcase(1)の先行節が受動態の場合軽動詞句が形成されるにも関わらず許容されない点を説明できない。またGengel(2007)では擬似空所化一般を説明するために焦点化句と話題化句との組み合わせで説明したが、この分析は二重目的語構文にみられる空所化現象の非文法性は説明できるものの、case(1)-(2)をうまく対処できない。また、Merchant(2007)、Tanaka(2010)では態不一致現象を説明するべく態句の構造的位置関係を考察して焦点要素がいずれに位置するかで説明をしてきたが、この分析は通常の動詞句と擬似空所化現象との類似性を説明できない。最後に、全ての分析にもいえるが、一番重要な点はby句派生と削除体系との相互関係を度外視している点である。そこで、先行分析に見られる問題点を解決するために本稿ではby句を用いた受動態構造における態句形成過程にまで拡張し、態句の動態素性を時制句のbe動詞が照合、削除することを主張する。

次章では、Chomsky(2005a, 2006)で提案されている継承体系(inheritance system)を採用し、さらに態句派生もその体系に取り入れることを主張する。

2. 継承体系分析-Chomsky(2005a, 2006)

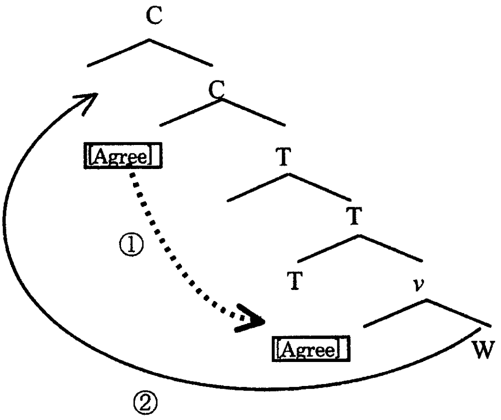
これまでの先行研究で掲げられた問題を解決する代案として、本節ではCから時制(T)へ解釈不可能素性が継承され、端素性と一致素性とを同時に満たすという体系を提案したChomsky (2005a, 2006)の主張(以下、継承体系)を、軽動詞から動詞、軽名詞から名詞という拡張、軽前置詞から前置詞への継承体系を主張し、ことでこの体系をby句などの前置詞句レベルにまで拡張し、態不一致現象の適切な分析を試る。本稿にける態句形成過程の修正案として(44a-c)を提示する。

(44) a. by が軽前置詞句全体 p*P 要素となり、主要部に φ 素性が付与される。
b. case(1)では時制句に位置する be 動詞が受動態句を選択し、主要部の φ 素性を消去する。
c. case(2)に関しては時制句 T が継承し能動態句を選択

まずは一般的に知られているその移動の動機付けの前提である(45)と C から時制、軽動詞から動詞、軽名詞から D への継承体系(46a-c)を以下に示す。

(45) a. Edge feature: triggering A'-movement.
b. Agree feature: triggering A-movement.

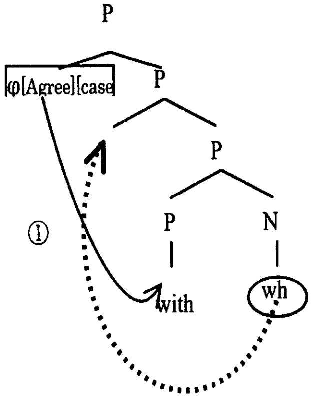
(46) **C-T inheritance**



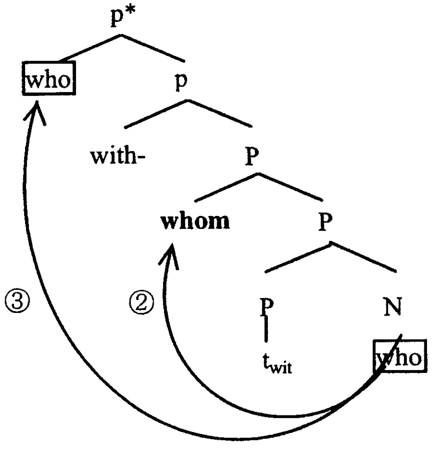
(45)では、A 移動を引き金になる一致素性照合移動(45b)と A'移動を引き金になる端素性照合移動(45a)には 2 種類の移動を仮定していることに注意したい。具体的に(46)の構造では、C の所有する一致素性、時制、さらに人称などの解釈不可能素性が時制(T)へと継承されることを矢印①で表示している。その後このような操作が引き金となって Wh 要素が CP の指定部へ移動する事により一致・端素性の照合とさらに A'移動に必要とされる端素性照合も同時になされることは矢印②の動きから推測できる。

次に(47a-b)の過程を提示する事でこの継承体系を軽前置詞へと拡張し、前置詞句構造の 2 種の構造を検証する。(47a)において①では p*の持っている一致素性と人称などの解釈不可能素性 φ が今度は前置詞(P)へと継承し、それを引き金に前置詞は *p**P 句の主要部へ、Wh 要素は前置詞句指定部へと同時に移動する。また(47b)の②において前置詞句指定部に位置する場合は素性照合と格照合も行われ、対格(whom)として具現化される。[6]

(47) a. p*-P inheritance



b.



さらに(47b)の③では2つ目のパターンとして対格が付与されない場合はA'移動と見なされるので端素性照合のためp*P指定部へと移動後、指定部への移動も予測される。

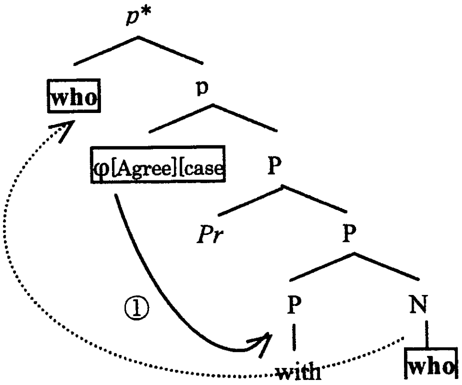
2.1 *p**P 継承体系分析－swiping 構造

前節では sluicing 構造を派生したが、本節では本節では根之

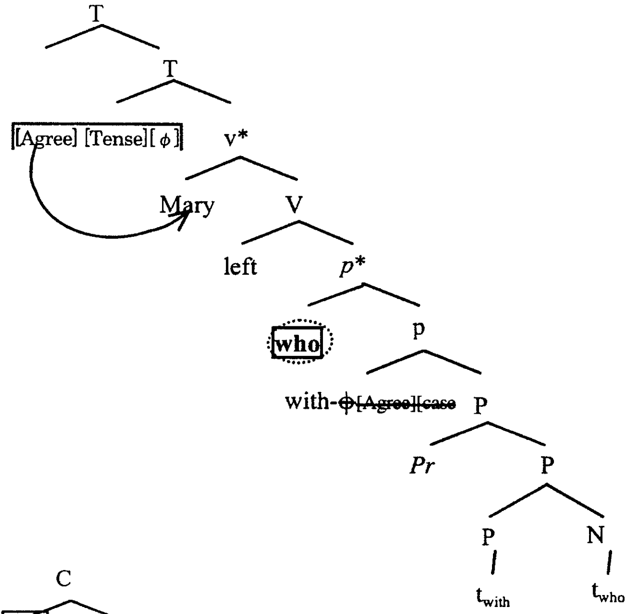
木(2010)で提案した swiping 構造はいかなる過程を経て派生されるかみていくことにする。(48)には(49a-b)の軽前置詞句形成の過程とその軽前置詞句の時制節への後発付加の派生過程を提案する。[7]

(48) Mary left with someone, but we don't know *who with.*

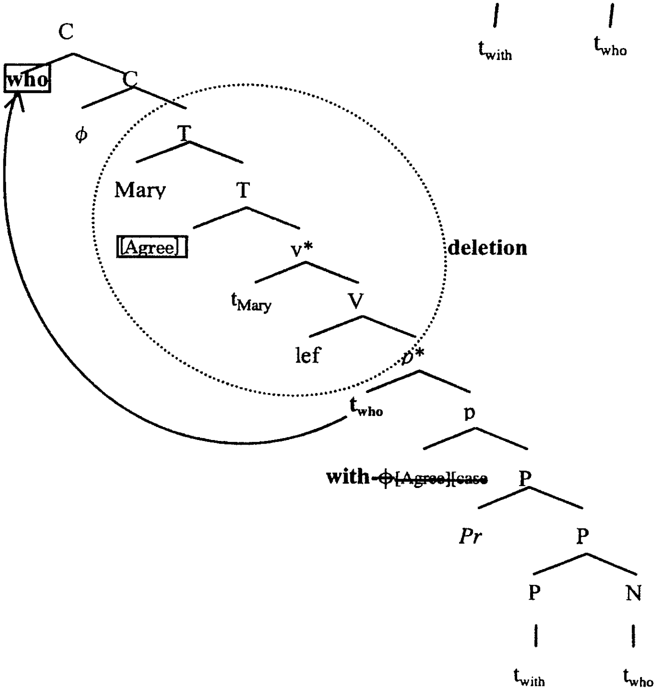
(49) a. ***p*-P* inheritance**



b.


T
T
[Agree] [Tense][ϕ]
v*
Mary
V
left
p*
who
p
with-ϕ[Agree][case
P
Pr
P
P
N
twith
twho

c.


C
who
C
ϕ
T
Mary
T
[Agree]
v*
tMary
V
lef
p*
deletion
twho
p
with-ϕ[Agree][case
P
Pr
P
P
N
twith
twho

(49a)で軽前置詞句構造において軽前置詞句(*p**P)の端素性照合が行われる。このとき前置詞句指定部には Pro が生起しているため Wh 要素は前置詞句の指定部には移動せず、軽前置詞句指定部へ移動するため格表示はされず who として書き出されている点に注意したい。次に(49b)この軽前置詞句が軽動詞句に併合するが、この過程は先に見た(49c)に共通するものであり、一致素性照合と、さらに Wh 要素の C 指定部への端素性を満たす移動が求められることを意味する。(49c)においては主語の DP と、p*P 全体の二重の内的併合が適用される。次に時制節以下は削除されるが、ただここで注意すべき点は(49c)の swiping 構造では *p**P の端素性は未照合であるため Wh 表現(who)は *p**P 指定部より移動して端素性が照合されてもなお前置詞が残留する点であり、この要因は Wh 要素(who)に対して格と素性の照合がなされていないからである。ゆえにこのような swiping 構造は非常に周辺的な構文であると結論付けられる。

その証拠として(50a-i)の例を見てみよう。

(50) a. *She bought a robe for one of her nephews, but God knows *which (one) for*.

b. *They were arguing about animals, but we couldn't figure out *what kind about*.

c. *He was shouting to one of the freshmen Republican senators supporting the bomber program, but it was impossible to tell exactly *which (senator) to*.

d. *He'll be at the Red Room, but I don't know *what time till*.

e. *She's driving, but God knows *which towns to*.

f. * She fixed it, but she wouldn't let us in on *what tool with*.

g. * They were riding in somebody's car, but I don't know
<u>*whose in*</u>. (Merchant 2002. 6)

(50a-g)の非文法性の要因は全て前置詞が残留している場合はswiping構造が許容されないという現象からも明らかである。こうした事実に関連して本稿では受動態における by 句は特殊化せずに(50)と同様の通常の前置詞句として位置づけるため、その際に本稿で問題にしている態不一致現象が許容されないcase(1)にみられる by 句の場合も同様の理由で排除できる事が予測されよう。ゆえに本稿では態不一致現象 case(1)、case(2)いずれも前置詞残留の swiping 構造と同じ理由で排除されると結論付けたい。

次節ではこの Chomsy の継承体系に加え、さらに態句(voiceP)派生と by 句との関連上時制句から態句への継承体系という概念を付加した本稿独自の継承体系分析を展開していきたい。

3. 態不一致現象の継承体系分析

本節では Chomsy(2005a, 2006)の継承体系に態句(voiceP)の派生過程に重点を置き、時制句から態句への継承体系を付加した継承体系を展開する。(51)は概略的な by 句の形成と態句(voice P)の派生過程の流れである。

(51) 態不一致現象の継承体系分析(概略)

a. Step1; by-phrase formation $[_{PP}\ [_{P'}$ by $][_{NP}$ others $]]$

b. Step 2; p*-P inheritance; $[_{p*P}$ by $[_{p*}\varphi_{[voice:pass]}$
$[_{PP}$ other $[_{P'}\ t_{\varphi}[_{P}\ t_{by}\ t_{others}\ ]]]]]$

c. Step 3; merger of v*P; $[_{v*P}$ brought$_{[-case]}$ lilies $]$
$[_{p*P}$ by $[_{P*}\varphi[_{PP}$ others …

d. Step 4; VoiceP formation;[$_{voiceP}$ [$_{v*P}$ lilies[$_{v*}$ brought$_{[-case]}$ t$_{lilies}$]][$_{voice'}$φ$_{[voice:pass]}$ [$_{p*P}$ by[$_{p*}$φ[$_{PP}$ others …

次節 3.1 ではこれまで本稿で対処してきた case(1)、3.2 節では case(2)の派生を詳細に論じたい。

3.1 態不一致現象の削除体系-Case1

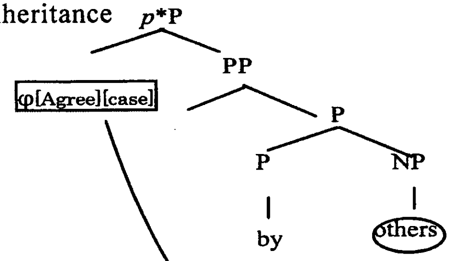
本節ではby句と態句の派生過程を提案したが本節では能動態が先行節で次節が削除されるcase(1)の派生がなぜ排除されるのか概観する。(52)の第一段階の派生は(53a-c)である。

(52) Case1; Active antecedent, passive ellipsis

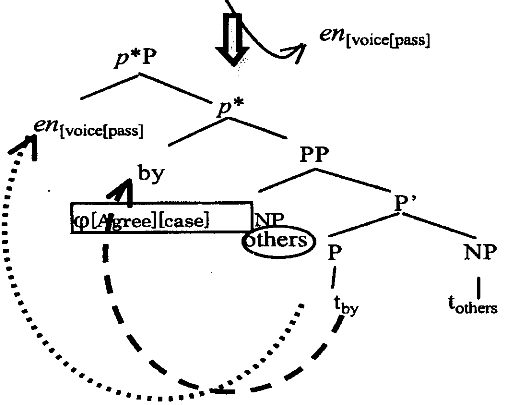
*Some **brought roses**, but lilies were by others.

(53) a. *by*-phrase formation; [$_{PP}$ by$_{[voice[pass]}$ *en* others]]

b. *p**-P inheritance



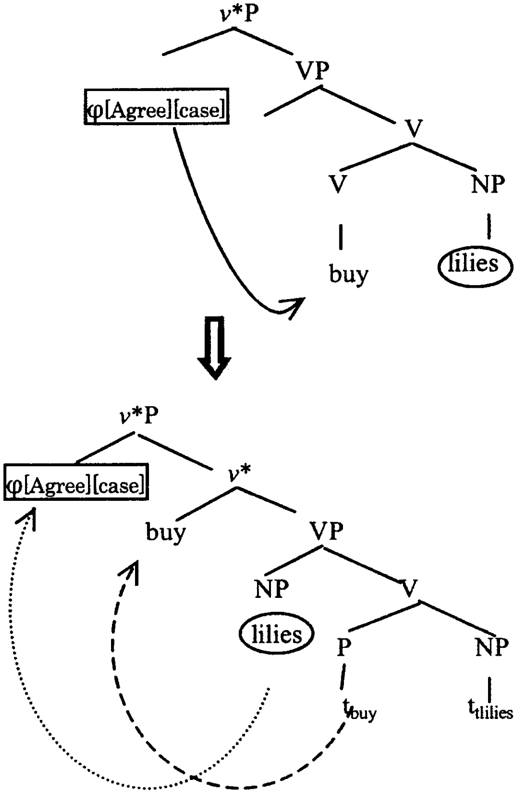
c.



まず(53a)で by 句形成が行われるが，その際受動分詞(en)も態句素性として同時に併合される。次に(53b)から分かるように通常の軽前置詞句派生と同様に素性継承が行われるが、名詞句は前置詞句指定部へ移動することになる。また、(53c)の矢印が示すように軽前置詞句の一致素性を満たすために by が軽前置詞句主要部へ、端素性を満たすために受動分詞(en)が軽前置詞句指定部へとそれぞれ移動する。次なる段階の派生として軽動詞句形成過程を(54a-b)で提示する。

(54) a. v*-V inheritance

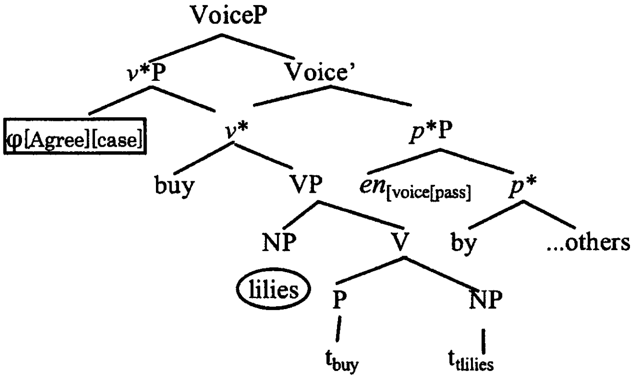
b.



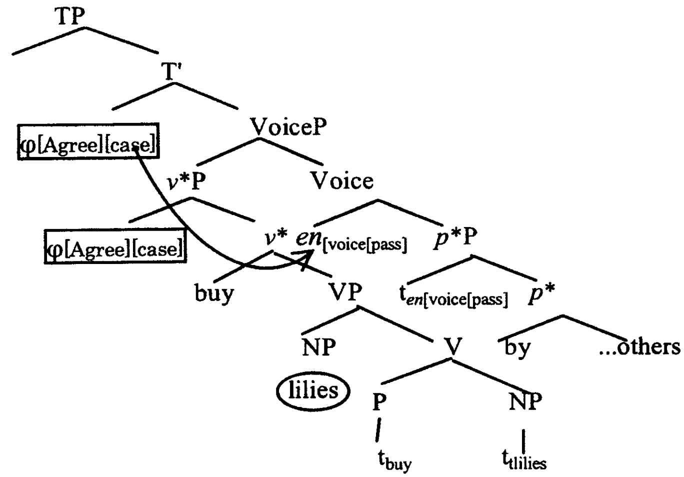
同時に(54a)でもこの軽前置詞句と併合する軽動詞句の形成過程を説明すると、同じように軽動詞から動詞部分への素性の継承が適用される。この時に(54b)で名詞句(lilies)は動詞句の指定部へと移動する点で Merchant(2007)の主張するよう軽動詞へは移動が行われない点とさらに受動態構文であるため格素性の照合は行われない点に注意したい。こうして態句形成のためにφ素性が軽動詞の指定部へと移動する。

次に第三段階の派生として(53b)と(54b)とを併合することでさらなる態句(voiceP)形成の過程を概観する。(55)をみよう。

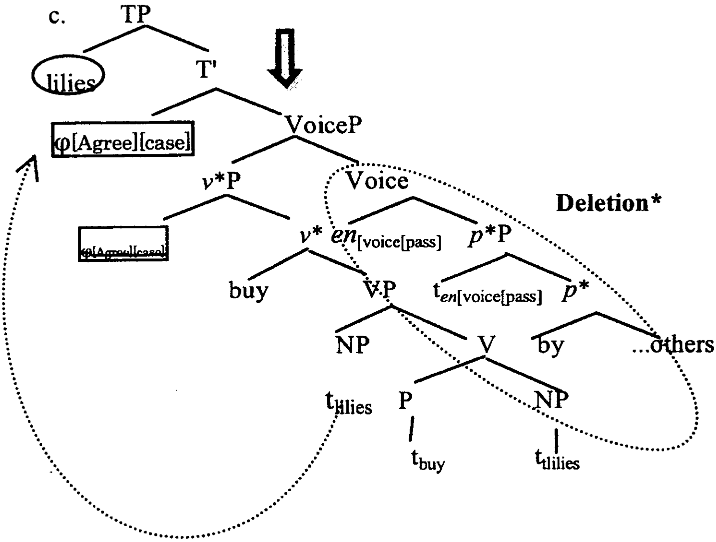
(55) a. merger of v*P & VoiceP formation



b. T-VoiceP inheritance



c.



(55a-c)は先に形成された(53b)と(54b)とを併合することでさらなる態句(voiceP)が形成される過程であるが、このとき(55a)で軽前置詞句指定部に位置していた態素性をもつ受動分詞(en)が

態句主要部へと移動する。[8]次に(55b)においてこの過程を経て態句が形成され、次に時制句の主要部の φ 素性が態句へと継承がおこなわれるが次にすでに形成された軽動詞句と先の形成された軽前置詞句とが併合する。ここで大事なのは両表現を探査するのは時制句の be 動詞である。最後に(55c)ではこの探査によって時制の φ 素性が態句主要部へと継承し、さらに軽前置詞句の過去分詞が主要部へと移動する。こうして態句が完全に形成されるのだが、その後の主語が時制句指定部へと移動するものの、時制句が完全に形成される際には態句の受動分詞の素性が消去されており、by 句が顕在化することが許容されないからである。この場合削除されるはずの by 句が残って結果的に(52)を生成してしまうため非文法的な文として排除される。

3.2 態不一致現象の削除体系-Case2

本節では先行節が能動態で能動態が削除されるcase(2)の派生がなぜ排除されるのか概観する。

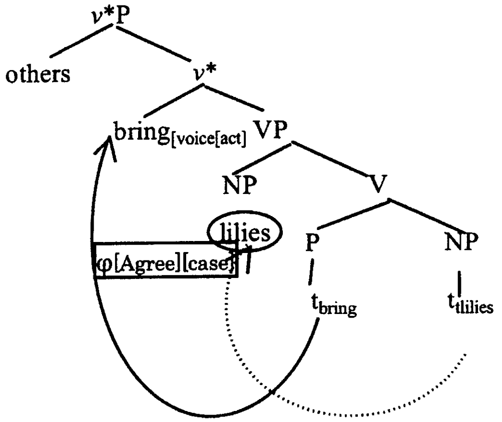
(56)の派生は(57a-c)である。

(56) Case2; Passive antecedent, active ellipsis

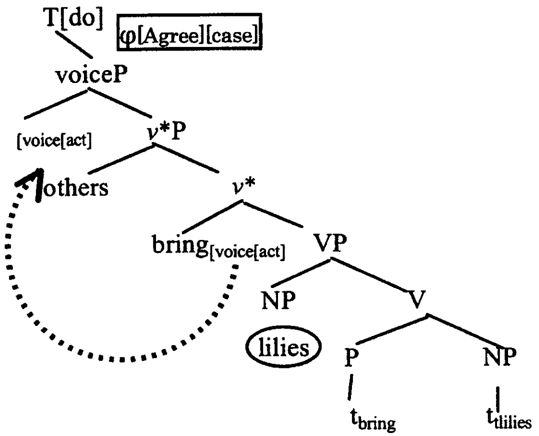
*Roses **<u>were brought by</u>** some, but others did lilies.

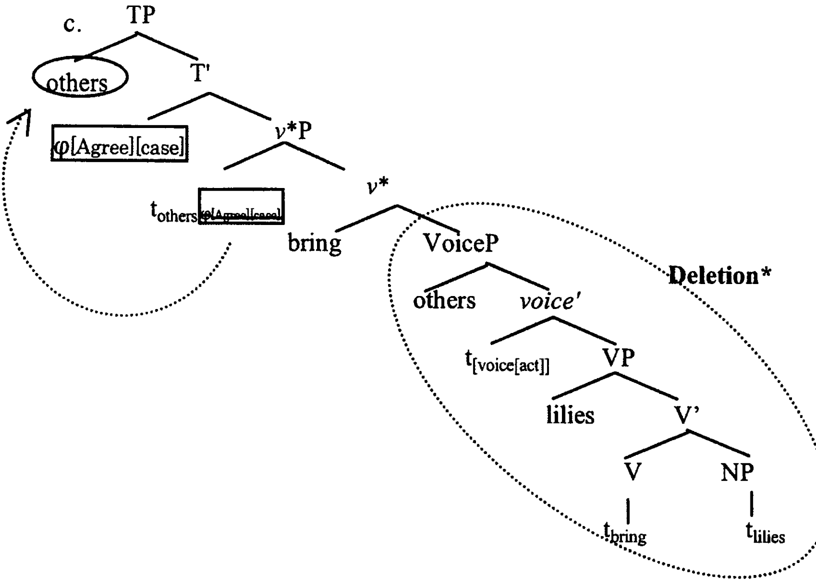
まず(57a)で軽動詞から動詞への φ 素性の継承が行われるが、その形成過程を説明すると、同様に軽動詞から動詞部分への素性の継承が適用され、能動態句が形成される。この時に名詞句(lilies)は動詞句の指定部へと格照合のために移動する。

(57) a. v*-V inheritance; [$_{v*P\varphi}$ others [$_{VP}$ lilies[$_{V}$ bring t_{lilies}]]



b. VoiceP [act]formation





こうして(57b)において態句形成のためにφ素性が軽動詞の指定部へと移動するが、次に時制(T)が態句にさらなる時制から態句素性(能動態素性)を継承するために併合する。最終的に(57c)ではこうして能動態句が形成されるが、その素性が消去されており、この場合削除されるはずの名詞句(lilies)が残り、やはり結果的に非文法的な(54)を生成してしまうため排除される。

3.3 by 句と動詞句削除

これまで本分析では by 句を用いた態不一致現象を対処してきたが、本稿の分析は by 句を伴わない受動態にどのように拡張できるか検証したい。(58)と(59)をみよう。

(58) Passive antecedent, active ellipsis

a. This problem was to have been looked into, but obviously nobody did.

b. In March, four fireworks manufacturers asked that the decision be reversed, and on Monday the ICC did.

(59) Active antecedent, passive ellipsis

a. Actually, I have implemented it [=a computer system] with a manager, but it doesn't have to be.

b. The janitor should remove the trash whenever it is apparent that it needs to be.

c. The janitor must remove the trash whenever it is apparent that it should be.

(58)と(5)はいずれも態不一致現象であり、それぞれ本稿の分析における case(1)と case(2)に相当するものである。だが、これらは case(1)と case(2)とは異なり先行節にも削除節にも by 句、あるいは空所化要素が顕在的に現れていないことが分かる。このことは態句の素性が残留することなく照合された上でその要素が全て顕在化せずに削除されたことを示す証拠となり、これまで本稿で提案したような何らかの空所化要素の残る case(1)と case(2)とは異なるのである。

4. 継承体系は何を継承するか

4.1 検証(1)-分離疑問文(SQ)

この節ではこれまで本稿が提案してきた継承体系分析が Arregi(2010)、Camacho(2002)らの分析する分離疑問文(split questions, 以下 SQ)という現象に適合するのか検証したい。まずは SQ とは何か見ていくために Arregi によるスペイン語(60a)とそれに対応する英語の例(60b)を提示する。

(60) a. Qué árbol plantó Juan, un roble?

what tree planted Juan an oak

'What tree did Juan plant, an oak?'

b. Which shrub did you plant, the rhododendron?

(Arregi 2010.563)

SQの特性は、表面上(60a-b)の*wh*-部分と付加疑問文の部分がコンマでイントネーションが区切られていることがあげられる。またその意味内容としてはWh疑問文と後続する付加疑問文の部分はその返答として可能性のあるものをあげているというわば二重の疑問文構造となっている。

ではArregiはこの文をどのように派生するのだろうか。格照合に関する事実として(61)を見よう。

(61) a. Quién limpió la habitación, { tú / *a ti}?

who cleaned the room { you. NOM / you. ACC }

'Who cleaned the room, you?'

b. A quién vio Juan en el parque, { a mí /*yo }?

who saw Juan in to the park { me. ACC / I. NOM }

'Who did Juan see in the park, me?'

(62) a. Q : Quién leyó el libro de $Juan_i$?

Who read the book of Juan

'Who read Juan's$_i$ book?'

A: $Él_i$. 'him $_i$'

b.Quién leyó el libro de $Juan_i$, $él_i$?

who read the book of $Juan_i$ he_i

'Who read Juan's$_i$ book, him_i?

((61)-(62) Arregi 2010.565-567)

(61a-b)いずれも注目するべき点は付加疑問の箇所における格の形態素である。(61a)の代名詞は主語Wh句に対応するような主格(tú)で顕在化し、さらに(61b)では目的語Wh句に対応すべく対格形(tú)で顕在化しなければならない。さらにこの付加疑問文は(62a)の通常の疑問文に見られるように疑問文の目的語(libro de Juan)がその返答(él)を束縛できるのと同じように(62b)でも同じような同一指標付けがが可能である。このことからArregi(2011)はCamacho(2002)の主張するように単一の文から派生されるのではなくそれぞれ*wh*疑問文と付加疑問文の部分とが独立して派生されるのだとして(60a)に関して(63a-c)の構造段階を提示している。[9]

(63) a. Step1, *WH movement*;[$_{CP1}$ what tree$_i$ [$_{CQ}$ planted Juan t_i]]
[$_{CP2}$ planted Juan an oak]

b. Step2, *Focus movement*;[$_{CP1}$what tree$_i$ [$_{CQ}$ planted Juan t_i]]
[$_{CP2}$ an oak$_j$ [$_{CQ}$ planted Juan t_j]]

c. Step3,*Deletion*;[$_{CP1}$ what tree$_i$[$_{CQ}$ planted Juan t_i]
[$_{CP2}$ an oak$_j$[$_{CQ}$ ~~planted Juan t_j~~]]

(Arregi 2010. 540)

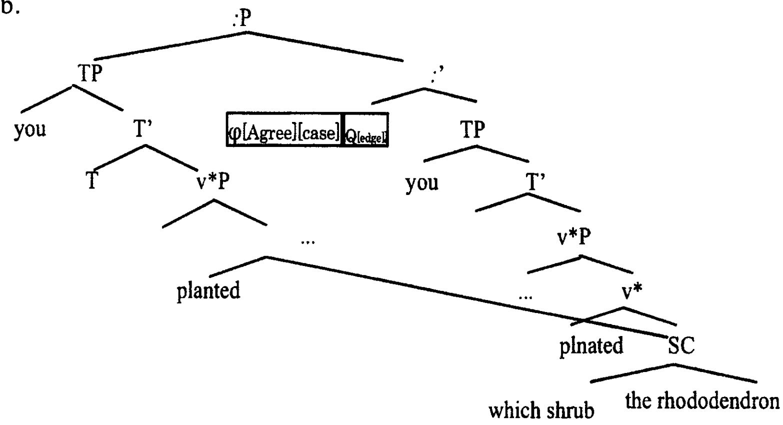
(63a)で注目すべき点は、Arregi は 2 重の CP 構造を仮定した分析を採用しているため第一段階として最初の CP_1 においてはWH移動が適用され、次に第2段階である(63b)では後続する CP_2 において付加疑問文の焦点化移動が導かれるという点である。その後最終段階である(63c)で CP_2 の残りの部分が削除されるが、ここでの削除は削除される要素が背景となる要素と同一である限り適用されるという同一性にも似た優位性(preference) とい

う概念のもと適用される。

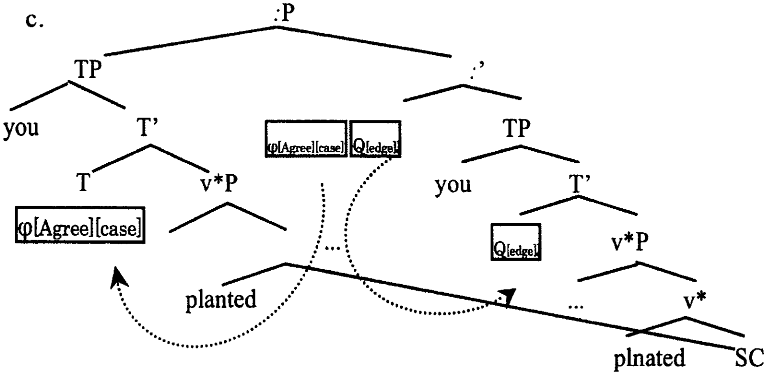
ではこの SQ という現象を本稿の分析の土台である継承体系のもとで(60b)はどのように分析できるだろうか。以下(64a-d)の構造が考えられる。

(64) a. [$_{TP1}$ you [$_{T'}$ [$_{vP}$ planted [$_{SC}$ which shrub the rhododendron]]]]
[$_{TP2}$ you [$_{T'}$ [$_{vP}$ planted [$_{SC}$ which shrub the rhododendron]]]]

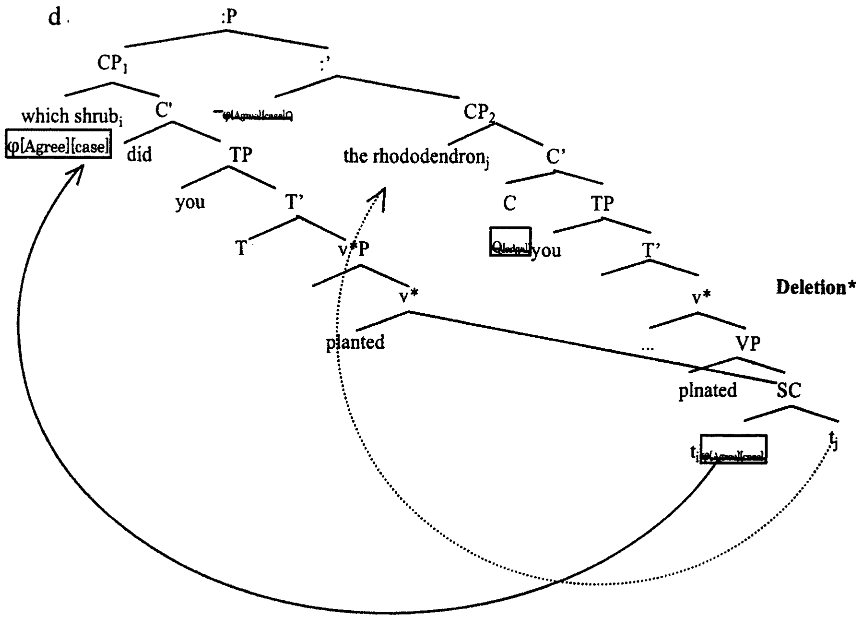
b.



c.



d.



まず(64a)にみられるように二つの TP が併合するがこれらの動詞の目的語位置に生起する表現(which shrub・rhododendron)の一致素性・端素性をそれぞれ照合するため：P 主要部にこれらの素性を設定する。[10]そしてここから TP1 に一致素性、格素性がそして TP2 には Q 素性と端素性がそれぞれ分散して継承される。最終的に(64c-d)ではそれぞれの CP 指定部領域に同時に両名詞句(which shrub ・ rhododendron)の移動が行われ素性照合後、TP2 の削除が可能となる。[11]このようにして本稿で展開している継承体系分析によりなぜ分離疑問文では前半の CP では Wh 移動が行われているのに疑問素性は後半の CP にあるかなど意味的な側面も説明することが可能である。

4.2 検証(2)- one 置換

最後に本稿の削除体系分析を、動詞句レベルを超えた DP レベルの削除体系にまで拡張したい。[12] オランダ語の(65)を見よう。

(65) Over konijnen gesproken... Ik heb gisteren een zwart-e _ zien lopen.

(Talking about rabbits...) I have yesterday a black see walk

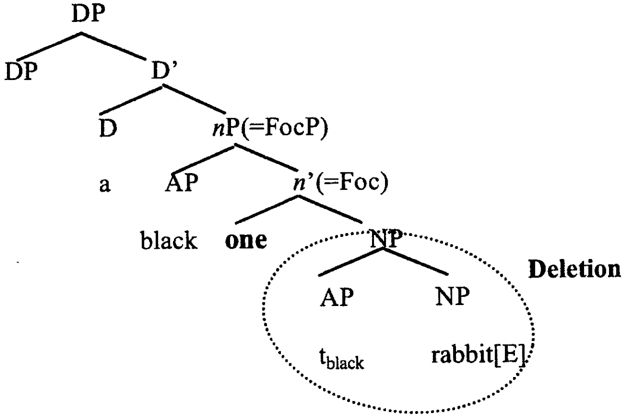
'I have seen a black one yesterday.'

(Gengel 2007.283)

(65)では空所のまま a black one という解釈が可能であり、この事実は構造上名詞句(konijnen)が省略対象となり形容詞(zwart-e)に焦点を置く必要があり、英語(66a)に置き換えると以下(66b)の構造が考えられる。英語の例(66a)の構造となる(66b)では、オランダ語と同様に形容詞部分(black)に焦点が置かれその焦点化句の主要部に one 置換が適用される。そのために、次に位置する名詞句(black rabbit)部分の削除が可能である。

(66) a. I saw a BLACK one yesterday.

b.



(Gengel 2007. 284)

この現象は削除現象で one のような先行節とは異なる要素が現れるという点では、動詞句レベルについて本稿で取り扱ってきた態不一致現象と共通しているため統一化した説明が可能になるはずである。だが、この現象が具体的にどのような過程を経て適用することができるか、さらには本稿で中心的に取り扱ってきた受動化における態不一致現象に関してはどう対処するべきなのかに関しては今後のさらなる研究に依存しなければならない。

5. 結論

本稿では先行節と削除節の受動態と能動態とで異なる態不一致現象(voice mismatch)にみられる削除構造がなぜ非文法性を示すのかに焦点を当て、その適切な派生体系を考察してきたが、全ては(67)に要約される。

(67)

a. 最初の先行分析として Johnson (2004)をとりあげ、その分析上空範疇(pro)が用いられ、先行節において軽動詞句が形成されていれば、態不一致現象にかかわりなく削除が可能であることを概観した。だが本稿の態不一致現象である case(1)の先行節が受動態の場合軽動詞句が形成されるにも関わらず許容されない点を説明できない点、さらには通常の動詞句削除と空所化の事実を区分して説明することが出来ない点を指摘した。

b. 次の先行分析として Gengel(2007)を概観し、擬似空所化一般を説明するために焦点化句(TopP)と話題化句(FocP)とを組み合わせた構造を用い、さらに束縛の事実を説明するた

めに通常の時制節まで形成される空所化が起こらない場合との区別化できる点を説明した。だが、この分析は Case(1)も case(2)もにおけるいずれに見られる非文法性を構造上網羅できるが、 空所化現象の伴う 二重目的語構文について説明することができない点を指摘した。

c. 3 番目の先行分析として Merchant(2007)を取り上げ、case(1)か case(2)にみられる態不一致現象を説明するべく態句の構造的位置関係を考察して焦点要素が、その態句より下位に位置する場合には削除が許され、また逆に 焦点要素が、その態句より上位に位置する場合には削除が許されるといった主張を概観した。 だが、この分析は通常の動詞句削除と擬似空所化現象とを構造上著しく区分してしまうものであり両者が同様の文法性を示す場合どのように説明するべきか曖昧なものになってしまう点を指摘した。

d . 4 番目の先行分析として Tanaka(2011) を取り上げ、ある表現が焦点化移動を通じて F 束縛ができる場合に限り表現の削除が可能であるという主張を概観した。 だが、この分析は先節の動詞と削徐動詞とで同一とみなされない空所化などのる態不一致現象までは網羅しきれない点があることを指摘した。

e. a-d の全ての先行分析見られる問題点として、by 句派生と削除体系には相互に密接な関係がある点を一度外視している点をも指摘することでその解決へ向けて本稿では態句形成過程にまで拡張し、態句の受動態素性は、あるいは能動態素性に関しては時制句時制句の be 動詞が照合、削除することを主張した。 結果的にいずれも前置詞が残留する

swiping 構造と同様に by という前置詞の受動態素性が削除されずに残留することから case(1)か case(2)ともに非文法的なものとして排除されることを主張した。この分析は帰結として by 句が顕在化しない態不一致現象の空所化文がなぜ文法的であるかを説明することが可能となった。

f. 最後に、本稿の継承体系分析は稿が提案してきた継承体系分析が Arregi(2010)、Camacho(2002)らの分析する分離疑問文という現象に適合するのか検証した。また本体系を軽名詞句レベルにまで拡張し、オランダ語に見られる名詞句の削除、さらに英語における one 置換にまで説明できる可能性を検討した。

参照文献

Abels, Klaus 2003. *Successive Cyclicity, Anti-locality, and Adposition Stranding*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Arregi, Karlos. 2003. Clausal pied-piping. *Natural Language Semantics* 11: 115–14

Arregi, Karlos. 2010. Ellipsis in split questions.*Natural Language Linguistic Theory* 28: 539–592

Boeckx, Cedric 2008. *Bare syntax*, Oxford: Oxford University Press.

Camacho, José. 2002. Wh-doubling: implications for the syntax of wh-movement. *Linguistic Inquiry* 33: 157–164.

Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press: Cambridge, Mass.

Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale*: *A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2005a. On phases. Ms., MIT.

Chomsky, Noam. 2005b.Three factors in the language design. *Linguistic Inquiry* 26:1-22.

Chomsky, Noam .2007. Approaching UG from below. In: Sauerland, U.; Gaertner, H.-M. (eds.). Interfaces + recursion = language? *Chomsky's minimalism and the view from semantics.* Mouton de Gruyter. 1-30.

Collins, Chris. 2005. A smuggling approach to the passive in English. *Syntax* 8:81-120.

Dikken, Mercial den.2006. *Relators and linkers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Gallego, A. 2007. *Phase Theory and Parametric Variation*, PhD dissertation, UAB.

Gengel, K. 2007. Phases and Ellipsis, Ms., University of Stuttgart. Hale, K. and S. J. Jaeggli, Osvald A. 1986. Passive, *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.

Johnson, K. 2000. Gapping determiners. In: *Ellipsis in Conjunction*, Niemeyer Publishers, Kerstin Schwabe and Nina Zhang (eds.), pp. 95-115.

Johnson, K. 2001. What VP-Ellipsis can do, what it can't, but not why. In *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, M. Baltin and C. Collins (eds), 439-479. Oxford: Blackwell Publishers.

Johnson, Kyle. 2004. How to be quiet. In Proceedings from the 40th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society, ed. Nikki Adams, Adam Cooper, Fey Parrill, and Thomas Wier, 1–20.

Johnson, K. 2005. Ellipsis as Phonological Projections. Paper presented at the University of Stuttgart, January 2005.

Johnson, Kyle. 2006. Gapping isn't (VP) Ellipsis, Ms., U.Mass Amherst.

Jaeggli, Osvald A. 1986. Passive, *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.

Lasnik, Howard. 1999. *Minimalist Analysis*. Blackwell.

Lee, Wonbin. 2007. Focus and Pseudogapping. *Language &Information Society* 8: 79-96.

Merchant, Jason.2001. *The Syntax of silence: sluicing, islands and identity in ellipsis*. Oxford:Oxford university press.

Merchant, Jason 2002. Swiping in Germanic. In C. Jan-Wouter Zwart and Werner Abraham (eds.), *Studies in comparative Germanic syntax*, 295-321. John Benjamins:msterdam.

Merchant, Jason. 2007. Voice and Ellipsis. Ms., University of Chicago, Chicago, Ill.

Merchant, Jason. 2008. An asymmetry in voice mismatches in VP-ellipsis and pseudogapping *Linguistic Inquiry* 39: 169-179

Moritz,Luc, and Daniel Valois. 1994. Pied piping and specifier-head agreement. *Linguistic Inquiry* 25: 667-707.

van Riemsdijk, Henk. 1978. A Case Study in Syntactic Markedness: The Binding Nature of Prepositional Phrases, Foris Publications, Dordrecht.

Stejepanović,Sandra. 2008.P-stranding under sluicing in a non-P-stranding language? *Linguistic Inquiry* 38.179- 190.

Tanaka, Hidekazu.2011.Discourse and logical form. *Linguistic Inquiry* 42. 470-490.

Truswell, Robert. 2009. Preposition Stranding, Passivisation, and Extraction from Adjuncts in Germanic. In Jeroen van Craenenbroeck and Johan Rooryck (eds.) *Linguistic Variation Yearbook* 9, pp.131-177.

Wang, Arthur. 2007. sluicing and resumption. In Proceedings of NELS 37. University of Massachusetts, Amsherst:GLSA.

Williams,Edwin.1977.Discourse and logical form. *Linguistic Inquiry* 8. 101-139.

Williams,Edwin.1978.Across-the-board rule application. *Linguistic Inquiry* 9. 31-43.

Sources of attested examples; http://corpus.byu.edu/bnc/

根之木朋貴. 2010. 「sluicing, swiping構造の継承体系分析」.『甲南英文学』1-46.

渡辺明. 2005.『ミニマリスト・プログラム序説』. 東京. 大修館書店.

註

[1] Merchant(2007, 2008)は本稿の(26a-b)の最小ペアをあげているものの case(2)に関して構造を提示していない。だが同様の論理が適用すると以下のようになる。

(i) $[_{TP}$ Some $[_{FocP}$ roses$_j$ $[_{Foc'}$ Foc[E] $[_{v^*P[E]}$ bring$_i$ v[voi:act] $[_{VP}$ t_i t_j]]]]]
… $[_{TP}$ lilies$_i$ were $[_{FocP}$ by others$_j$ ~~$[_{Foc'}$ Foc[E] $[_{v^*P[E]}$ t_i v[voi:pass] $[_{VP}$ bring t_j]]~~]]]]

(i)でE素性が与えられるのは動詞句全体であるためも削除句は態句より上部に位置するので非文法的なものとして見なされる。

[2] 動詞句削除の対象が v*P ではなく VP であることの証拠として Merchant(2008)の提示する(i)が示唆的である。

(i) a. Many of them have turned in their assignment already but they haven't yet *all*.

b. Many of them have turned in their assignment already but they haven't yet (**all*) their paper (**all*). (Merchant 2008. 176)

動詞句削除(i a)では遊離数量詞(all)が生起できるのが空所化(i b)は不可能である。こうした事実は、数量詞は軽動詞の指定部に生起するため、その残留が許容できないことを意味するからである。

[3] Gallego(2009)はこの点に関して素性継承体系から考えると動詞の目的語位置は軽動詞句指定部より動詞句の指定部に生起させるべきだと述べている。本稿でも継承体系を取り上げるためこの点に同意し、派生上採用する。

[4] この構造に関して Johnson(2000)は LF 部門において AgrP を設定して束縛の事実を説明している。

(i) a. No boy$_1$ joined the Navy and his$_1$ mother ~~joined~~ the army.

b. *No boy$_1$ joined the Navy and his$_1$ mother joined the army.

(ii) [$_{\text{AgrP}}$ No boy [$_{\text{Agr}}$ *Agr* [$_{\text{TP}}$ $_e$ [$_{\text{T'}}$ joined-T [$_{\text{VP}}$ t_1 t_2 the Navy and his mother t_2 the army]]]]] (Johnson 2000.108)

動詞が削除された(i a)では No boy が his を束縛することができるが、動詞が顕在化する(i b)ではそのような束縛関係は成立しない。このような事実に照らし合わせ Johnson は削除文には LF 部門で(ii)に示すような AgrP を設定し、非顕在的に否定を含んだ名詞句(No boy)が繰り上がることで No boy と his とが同一指標付けされると説明している。

[5] 二重目的語の削除分析に関して二通りの分析 Lasnik(1999)と Lee(2007)を概観する。

(i) John gave Bill a lot of money, and Mary will ~~give~~ Susan ~~a lot of money~~.

(ii) [$_{\text{AgrP}}$ Mary [$_{\text{Agrs'}}$ *Agr* [$_{\text{VP}}$ t_{Mary} [$_{\text{V'}}$ V [$_{\text{AgroP}}$ Susan [$_{\text{Agro'}}$ ~~[$_{\text{VP}}$ give [+strong]][$_{\text{AgroP}}$ [a lot of money]$_1$ [$_{\text{Agro'}}$ [$_{\text{VP}}$ t_{give} t_1]]]]]~~

(iii) [$_{\text{TP}}$ Mary [$_{\text{T'}}$ *T* [$_{\text{FocP}}$ Susan [$_{\text{Foc'}}$ [E] [$_{\text{VP}}$ t_{Mary} [$_{\text{V'}}$ V ~~[$_{\text{VP}}$ give [+strong] [a lot of money]]]]]]]~~ ((i)-(iii) Lee 2007.94)

Lee は(i)に関し、(ii)の LF での AgrP を基盤にし、削除は目的語転移と残余移動によるものだと主張する Lasnik を批判し Merchat(2001)の E 素性付与を肯定視し(iii)の焦点化構造を基盤に説明している。

---

6 このように軽前置詞句の構造を格照合との関連付けるのは(ｉ)が背後にある。

(ｉ) a. Peter went to the movies, but I don't know{who/*whom} with.

b. Peter went to the movies, but I don't know with who.

(Merchant 2001.124)

(ｉa)はsluicing構造において残留する前置詞のWh表現の格表示体系(who, whom)によって文法性が大きく異なることを示している。Swiping構造では格表示は主格(who)でなくてはならず、対格(whom)だと逆に非文法性をもたらす点に注目したい。

7 本構造でproを設定しているがこの構造はWang(2007)の主張を踏襲したものである。

(ｉ) $[_{p*P}$ Wh_i $[_{p*}$ $[_{PP}$ Pro_i $[_{P'} \ldots p \ldots$]]]]

(pro= who, where, whatなどの最小のwh演算子)　(Wang 2007.3)

Wangは削除されている時制節は不定形の解釈が成立する事から名詞句と同一指標付けされるProを仮定することで同一化を可能なものとしている。この考えをswiping構造構築の際にも必要なものとし、本稿でも不定形の解釈が成立するWh要素を成立させるために、swiping構造の軽前置詞句においてもProを仮定している。またMerchant(2002)のsluicing構造とswiping構造の各前置詞句構造は本稿のそれとは異なり、以下のようになる。

(ⅱ) $[_{PP}$ to_P $[_{DP}$ who_D]]→ $[_{PP}$ who_D-to_P $[_{NP}$ t_{whoD}]]

(ⅲ)*$[_{PP}$ to_P $[_{DP}$ $which_D$ $[_{NP}$ {one_N/$composer_N$}]]

→$[_{PP}$ $[_{DP}$ $which_D$ $[_{NP}$ one-to_P $t_{which\ one}$]]]　(Merchant 2002.10)

(ⅱ)は主要部移動により移動と付加が可能なのはChomsky(1995)の接語の定義にみられるように最大限にして最小の句(who)だからである。逆に(ⅲ)が排除される主な要因としてwhichは主要部でありながらも補語(one/composer)を選択しなければならないため最大でも最小でもないからである。

8 本稿では受動分詞(en)を項として用いる点においてJaeggli(1986)の主張を示唆するものとなるが受動分詞en自体にθ役割が付与されるかについては検討の余地があると考える。

9 Arregi(2011)と異なりCamacho(2002)はこうしたSQに関しては単一の句から成り立つとしてMonoclause分析を採用し(ｉ)の構造として(ⅱ a-b)二つの構造が考えられると述べている。

(i) Qué compraste, un libro?
What you.bought a book 'What did you buy, a book?'
(ii) a. [$_{VP}$ bought [$_{DP1}$ what$_1$ [$_{DP}$ a book]]]]
b.[$_{VP}$ bought [$_{DP1}$ a [$_{XP[SC]}$ book [$_{X}$ what]]]]

(ⅱa)では付加疑問文が動詞目的語であるDP(a book)に付加し、さらに(ⅱb)ではこの目的語と付加疑問とが小節を形成していることを意味している。Arregiはこうした単一句分析に関して厳密には動詞の目的語として格表示されることはないとして二重句分析の元派生されるべきだと主張している

10 本稿ではイントネーションの区切りがあるものとしてColon P(:P)を設定している。この句に関してはden Dikken (2006)が背景にある。
(i) a. Imogen met someone yesterday : (namely,) her favorite uncle from Cleveland
b.[$_{:P}$ [$_{TP}$ Imogen met *ec* yesterday [$_{:}$ [$_{DP}$ her favorite uncle from Cleveland]]]]
(den Dikken 2006.283)

ただden Dikkenは前半の時制節は外置した節として:Pの指定部に基底生成していると考えていて本稿で考えられている移動を伴う:Pとはニュアンスが異なるものである事に留意したい。

11 Citcko(2005)は外的併合と内的併合に加え、対句併合(parallel merge)を展開しているが本稿での動詞目的語部分の併合の仕方はこの考えが背景にある。
(i) I wonder what Gretel recommended and Hansel read. (Citcko 2005.482)
(ii) a. [$_{\&}$ & [$_{T}$ Gretel [$_{V}$ recommended [$_{NP}$ what][$_{T}$ Hansel [$_{V}$ read [$_{NP}$ what]]]...
b. [$_{C'}$ *C* [$_{\&}$ & [$_{T}$ Gretel [$_{V}$ recommended [$_{NP}$ what][$_{T}$ Hansel [$_{V}$ read [$_{NP}$ what]]]...
c. [$_{CP}$ what [$_{C'}$ *C* [$_{\&}$ & [$_{T}$ Gretel [$_{V}$ recommended [$_{NP}$ what] [$_{T}$ Hansel [$_{V}$ read [$_{NP}$ what]]] ...

d. I wonder [$_{CP}$ what [$_{C'}$ *C* [$_{\&}$ [$_{T}$ Gretel [$_{V}$ recommended [$_{\&}$ & [$_{T}$ Hansel [$_{V}$ read [$_{NP}$ what]]]... (Citcko 2005.483-484)

並行的併合とは(i)の派生過程(ⅱa)で2つの動詞(recommendedとread)の選択特性を満たすため同時にwh句(what)を選択し併合することを意味する。さらに(ⅱb)でC併合後、探査であるCによりwh句が再併合(re-merge)したものが(ⅱc)である。最終的に(ⅱd)のようにandの生起位置が変化し(i)の語順を得る。

---

12 本稿での分析を形容詞句にまで拡張する点に関して検証する。

(i) a. Spanish

Juan es bastante simpático, pero Pedro lo es [$_{\text{Deg}}$ más ~~[$_{\text{AP}}$ e~~]]
Juan be-3. SG quite nice but Peter CL-it be be-3. SG, pero more

b. John is very nice, and Peter even [$_{\text{DegP}}$ more so ~~[$_{\text{AP}}$ e~~]]

(Gallego 2009.6)

(i a)のスペイン語の事実と同様に(b)の英語でも形容詞部分の削除が適用されている。このことから本稿の継承体系を取り入れる際は時制から DegP からさらに形容詞への継承が行われる事が予測される。

甲南英文学会規約

第１条　名称　本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。

第２条　目的　本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を図ることをその目的とする。

第３条　事業　本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究発表会および講演会
2. 機関誌『甲南英文学』の発行
3. 役員会が必要としたその他の事業

第４条　組織　本会は、つぎの会員を以て組織する。

1. 一般会員
   イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
   ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
   ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
2. 名誉会員　本会の発展に著しく貢献した者
3. 賛助会員

第５条　役員　本会に次の役員を置く。会長１名、副会長１名、評議員若干名、会計２名、会計監査２名、大会準備委員長１名、編集委員長１名、幹事２名。

2. 役員の任期は、それぞれ２年とし、重任は妨げない。
3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
4. 評議員は、第４条第１項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
5. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
8. 評議員は、会員の意思を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
12. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
13. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計　会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。
2. 会費は、一般会員については年間3,000円、学生会員については1,000円とする。

第7条 総会　総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。
2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会　第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会　第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。
2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会　第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。
2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学から若干名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条　顧問　本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。
この規約は、昭和62年5月31日に改訂。
この規約は、平成7年7月1日に改訂。
この規約は、平成11年6月26日に改訂。
この規約は、平成13年6月23日に改訂。
この規約は、平成17年7月3日に改訂。
この規約は、平成21年6月27日に改訂。
この規約は、平成22年7月3日に改訂。
この規約は、平成23年4月1日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は 1 部プリントアウトして郵送するとともに、Word ファイル形式（.doc）、あるいはリッチテキスト形式（.rtf）の電子データを任意の方法で編集委員長宛に提出する。和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスは 65 ストローク×15 行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
   イ. 和文：ワードプロセッサー（40 字×20 行）で A4 判 15 枚程度
   ロ. 英文：ワードプロセッサー（65 ストローク×25 行、ダブルスペース）で A4 判 20 枚程度
4. 書式上の注意
   イ. 注は原稿の末尾に付ける。
   ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
   ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
   ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 7th ed. (New York: MLA, 2009)（『MLA 英語論文の手引き』第 6 版, 北星堂, 2005 年）に、英語学の場合 Linguistic Inquiry style sheet (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は 11 月 30 日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を 1200 字（英文の場合は 500 語）程度にまとめて、プリントアウトしたもの 1 部を電子データとともに大会準備委員長宛に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割り振りは、大会準備委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、原則として一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

ISSN 1883-9924

甲　南　英　文　学　　*No. 27*

平成 24 年 6 月 1 5 日　印刷
平成 24 年 6 月 3 0 日　発行

—非　売　品—

編集兼発行者　甲　南　英　文　学　会
〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8 - 9 - 1
甲南大学文学部英語英米文学科気付